

ジョージ・エリオット作品の登場人物達に見られる
ヴィクトリア朝後期時代の観念形態

About Some Kinds of Ideologies at the Latter Half of
The Victorian Era in George Eliot's Two Works

2014年3月31日

北九州市立大学大学院社会システム研究科
博士（学術）学位請求論文

矢野 清一

論文要旨

ジョージ・エリオット作品の中で、リアリズム小説と評される代表格の2作品、『ミドルマーチ』と『フロス河の水車場』に描かれているとされる「有すなわち疑似現実 (réalité)」に実在した観念が、虚構の世界である小説の中に見られると指摘しているのが、テリー・イーグルトン (1992) である。しかし、「小説」というものが虚構である理由は、「始め」と「終わり」があるとされるからでもある。彼の主張では、一定の文字数を伴った紙の上だけに存在する、「非現実」即ち「今現在ではない (n'est pas la réalité)」が、(当時の) 観念として、(当時も) 非現実の世界である筈の小説内に存在したということになる。

この論文で取り上げる『ミドルマーチ』、『フロス河の水車場』という作品がリアリズム小説と評される一面があるのは、作者自身が小説の中に「語り手」として数多く登場し、当時の社会状況に加え、小説内の各々の場面や登場人物の心境、はたまた彼らの置かれている状況といったこと迄、事細かに説明しているからである。この技法によって、読者は本来、一定の文字数を伴った紙の上だけに存在する虚構であるはずの登場人物と、執筆当時に実在した観念とが融合されて、一つの小説という作品が出来上がっていることが、図らずもイーグルトンの指摘によって明らかになった。故に本論文は、彼の「直感的」とも評せる評論文で指摘されたイデオロギー(又は観念形態)の視点から、小説『ミドルマーチ』、『フロス河の水車場』そのものを登場人物の性格設定の違いに焦点を当てて分析することにより、様々に捉え直そうと試みた論文である。

論旨に一貫性を要求される「論文」の性格上、又、読み手に解り易い著作に仕上げたいとの論文筆者としての思い(願い)の下に、小説分析の具体的な手法面についても熟考を重ねた。結果として、論旨に一貫性を持たせられる様に、任意に抽出した6つのイデオロギー又は観念形態を、小説の各場面に当てはめ、当該イデオロギー(又は観念形態)を最も良く代表すると思われる登場人物を数人選び分析するという過程を踏むこととした。そして、これらのイデオロギー(又は観念形態)とは①フォイエルバッハのヒューマニズム、②ロマン主義的自己目的達成、③福音主義、④農村共同体、⑤プチ・ブルジョア・モラリズム、⑥初期フェミニズムの6つである。

実際の分析に用いる際には、これら6つのイデオロギー(または観念形態)については、次のように定義した。①フォイエルバッハのヒューマニズム (Feuerbachian Humanism) に

については、フォイエルバッハが独自の人間学に拠って、彼の考える、本来在るべき姿のキリスト教自体に照らして、宗教における人間疎外を暴露した理論的達成であるとした。「神、信、善、美、聖」というものは、人間が作ったもの、実在しないものとする考え方だとした。②のロマン主義的自己目的達成 (Romantic self-achievement) については、古典主義・合理主義に反抗し感性・個性・自由を尊重し、個人が掲げる理想をあくまで追求し、その実現を目指す考えを指しているものと考えられるとした。③福音主義 (Evangelicalism) の定義内容については、一般的に「福音主義」が、聖書に証 (あかし) されている救い主イエス・キリストの喜ばしい訪れ (福音) を重んじる立場とされていることに基づいた論証を展開する。④の農村共同体 (Rural organization) とは、農業及び農村組織をもって社会の基礎としようとする立場の人たちの集合体のことである。エリオットは農業を中心とした社会を理想化した面があると、テリー・イーグルトンは指摘している。⑤初期フェミニズム (Incipient feminism) は女性の社会的、政治的、経済的権利を男性と同等にし、女性の能力や役割の発展を目指す主張の初期的段階での考え。当時の女性に対する、観方 (みかた) や女性の価値のことを指している。⑥プチ・ブルジョア・モラリズム (Petty[petit]-bourgeois moralism) とは、資本家階級でもないのに資本家階級的意識をもっている人々の道徳観、倫理観の事を指す。

以上6つ、各々のイデオロギー(または観念形態)についての定義を、『ミドルマーチ』と『フロス河の水車場』に描かれている複数の登場人物に当てはめて考察した。

これまでのエリオット作品研究の特徴は『フェミニズム』を含む幾つかの視点から『ミドルマーチ』なら、ドロシア、カソーボンという主人公クラスの登場人物分析を通じて (又は比較して)、作者・エリオットの思想の特徴や彼女の持つそれぞれの思想を持つに至った背景を探るものは多数存在する。しかし本研究論文のように、イデオロギー(又は観念形態)について、それぞれの特徴に合った登場人物を、主人公だけでなく、脇役の登場人物達を含めた分析対象小説内のすべての登場人物から抽出して分析した先行研究は、今のところ、見つけられていない。テリー・イーグルトンも、複数のイデオロギー(又は観念形態)が見られると指摘しているだけで、小説内の具体的場面や登場人物について当てはめ、指摘するところまではしていない。故に本論文は、これらのことを踏まえ、論証の展開を図った。

ABSTRACT

The world of a novel is a fiction. The reason of which, is that a novel has both the beginning and the end. And it can be existed only on papers with the amount of the constant letters. But Mr. Terry Eagleton pointed out that some kinds of ideologies in “existence” (real; para-reality) were described in the world of George Eliot’s works.

In other words, it may be said as follows; there was not existing “non-reality” as of now, then therefore, the idea in reality (real) in those days could have existed only on papers with the constant amount of letters.

Among Eliot’s two works; *Middlemarch* and *The Mill on the Floss*, they also have been criticized as “the realism novels.” Because the author: Eliot herself dares to ignore the theory of the conventional novel. As a “narrator”, she appears so often and repeatedly in her works, and explains things in detail such as the state of mind of character(s) in various scenes or situations. No other novel has the feature to be seen in such as an author of novels appears in his (her) works.

It was fused, and, by this technique, as for the reader, the idea existed with the character who should be an existing fiction in writing those days originally became clear by indication of the Eagleton to be able to hold it on paper with the number of the constant letters without planning that the work called one novel was completed.

The main subject of this thesis is that I tried to analyze so-called "intuitive" critics of Mr. Eagleton, structurally and a difference whose setting of the characters with novel; *Middlemarch* and *The Mill on the Floss* from the viewpoint of some ideologies he pointed out on sentences.

On the side of techniques in concrete, I chose eight ideologies (the number of the real analysis is summed up to six) to each scene of the novel and stepped on a course to be the best, and to choose several characters considered representing it, and to analyze some ethical ideas (or some ideologies) concerned.

About the eight ethical ideologies (or ideas), I redivided into six named as ① Feuerbachian Humanism, ② Romantic self-achievement, ③ Evangelicalism, ④ Rural organization, ⑤ Incipient feminism, ⑥ Petty[petit]-bourgeois moralism.

At this time for real analysis, summarizing down to six ideologies, and I defined each as follows. At first, about ① Feuerbachian Humanism, Feuerbach depends on original anthropology and is the theoretical achievement that revealed a human alienation in the religion in light of Christianity in itself of the figure which there should be originally which he thinks about. When it was a thing, the non-entity, which a human being made, and a way of thinking to do, I did God, the sincerity, the good, the beauty, what's called "Saint". ② It is Romantic self-achievement that resists classicism, rationalism. But to the best of Romanticism, whose ideas has respects with sensitivity, personality, freedom and pursues the ideal that an individual raised to the last and did it when it was thought that I pointed to the thought to aim at the realization. ③ About Evangelicalism, was generally based on the situation respected happy arrival (the Gospel) of Messiah Jesus Christ performed proof of by the Bible and a done thing. ④ Rural organization is the situation or the society operated by the idea based on agriculture. So Eliot did it as an idealized society mainly built on the agricultural way of thinking. Concerning of Incipient feminism is the thought at the initial stage of the claims to be social, and to be political, and to do an economic right with a man equally, and to aim at the development of ability and the role of the women. So, at the last ideologies of the six ⑥ Petty[Petty-it]-bourgeois moralism is not the bourgeoisies, I point to the mass of people having same as the consciousness of the bourgeoisies, the outlook on ethic.

I applied above six, the definition about each ideology to some characters described on both *Middlemarch* and *The Mill on the Floss*.

However, like this thesis, there is any analysis in the preceding studies, not only on the main characters, but also on the extent to the analyzing object till supporting players with six ideologies above until now. Terry Eagleton just pointed out that eight ideologies were seen in Eliot's works, too. So, he didn't say any comments on the concretely scenes and characters of each G. Eliot's work with the feature of originality and its uniqueness.

Thus, it may be important to be careful about so-called "idea", "reality" (historical facts) and "non-reality". And in this thesis, I tried to explain more demonstratively based on such ideas and six or eight ideologies above.

ジョージ・エリオット作品の登場人物に見られる
ヴィクトリア朝後期時代の観念形態について

目 次

序論	6
第Ⅰ章『ミドルマーチ』	
I.1. フォイエルバッハのヒューマニズム	16
I.2. ロマン主義的自己目的達成	28
I.3. 福音主義	41
I.4. 農村共同体	54
I.5. 初期フェミニズム	62
I.6. プチ・ブルジョア・モラリズム	73
第Ⅱ章『フロス河の水車場』	
II.1. フォイエルバッハのヒューマニズム	87
II.2. ロマン主義的自己目的達成	94
II.3. 福音主義	103
II.4. 農村共同体	128
II.5. 初期フェミニズム	136
II.6. プチ・ブルジョア・モラリズム	154
結論	162

Bibliography

序論

1. はじめに

1.1. はじめに

ジョージ・エリオット作品の中で、リアリズム小説と評される代表格の2作品、『ミドルマーチ』と『フロス河の水車場』に描かれているとされる「有（リアル即ち、例えば人間の脳内イメージとも称される疑似現実の世界とか等）」に実在した観念が虚構の世界（フィクション即ち非現実世界）である小説の中に見られると指摘しているのがテリー・イーグルトン（1992）である。「小説」というものが虚構である理由は、「始め」と「終わり」があるからである。一定の文字数を伴った紙の上だけに存在する、「非現実」即ち「今現在ではない」が、「当時の今」的観念として当時、「現実（リアル）」に存在したのである。

この論文で取り上げる『ミドルマーチ』、『フロス河の水車場』という作品がリアリズム小説と評される一面があるのは、作者自身がそれまでの「小説」の多くとは異なり、数多く小説の中に「語り手」として登場し、場面や登場人物の心境、はたまた彼らの置かれている状況といったことを事細かに説明しているからである。この技法により、本来、一定の文字数を伴った紙の上だけに存在する虚構であるはずの登場人物と、執筆当時に実在した観念とが融合されて、一つの小説という作品が出来上がっていることが、図らずもイーグルトンの指摘によって、読者の初めて知るところとなった。

本論文の目的は、テリー・イーグルトンが「直感的」とも評せる評論文で指摘したイデオロギー又は観念形態の視点から、ジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』、『フロス河の水車場』という小説作品を考察し、彼の主張が正しいことを証明することである。これは、英文学評論史上（現在までのところ）、先例が無い研究題目である。それ故に、所謂「観念」と「現実（史実）」、「非現実」とに注意した上で、これからの論証の展開を図っていきたい。

1.2. 先行研究について

小説『ミドルマーチ』、『フロス河の水車場』を分析する具体的な手法面では、イーグルトンが指摘したイデオロギー又は観念形態の中から特徴的と見なされる6つを任意で抽出し、小説内の各場面に当てはめ、当該イデオロギー(又は観念形態)を最も良く代表すると思われる登場人物を数人選び分析する、という過程を踏んだ。論文筆者が観念形態の数を6つにしたのは、「論文」というものの性格上、論旨の終始一貫性というものを保ちつつ、且つ複数のイデオロギーを統括する「テーマ」性が必要であったことが、理由として挙げられる。更に付け加えさせて頂くと、この論文をお読みくださる皆様の、なるだけ多くの方々に解り易い「論文」にさせて頂きたいとの願いの上からも、観念形態の数を6つにさせて頂けていただいたのである。

これまでのエリオット作品研究の特徴は、『フェミニズム』を含む幾つかの視点から、『ミドルマーチ』なら、ドロシア、カソーボンという主人公クラスの登場人物分析を通じて(又は比較して)、作者エリオットの思想の特徴や彼女の持つそれぞれの思想を持つに至った背景を探るものは多数存在する。しかし本研究論文のように、抽出した6つのイデオロギー(又は観念形態)を、それぞれの特徴に合った登場人物を主人公脇役的を含む、分析対象小説内のすべての登場人物から抽出して分析した先行研究は、今のところ、見つけられていない。テリー・イーグルトンも、数多くのイデオロギー(又は観念形態)が見られると指摘しているだけで、小説内の具体的場面や登場人物について当てはめた指摘はしていない。

1.2.1. 作者、ジョージ・エリオットの思想的背景について中心的に取り上げた先行研究

レティス・クーパー(1956)は、作者ジョージ・エリオット(以下「エリオット」と記す)の生い立ちについて、クーパー(土井氏訳)によれば、次のように紹介している。

コヴェントリとナニートンの両工業都市にはさまれた、イングランドの中部地方に、山も河もみられない殺風景な平坦地が広がっている、地味な農業地帯である。しかし、一日に一回の駅馬車がコヴェントリとナニートンの間を通っていた19世紀の前半においてすら、その地方は部分的には工業化していた。(略)この土地に、1819年、後年ジョージ・エリオットとなるべきメアリ・アンが生まれた。彼女の父親はウェールズ人の血をひいていて(略)後にウォリックシャーの地主のある地所の差配人になった。父親

はその正直な性格や田園生活の組織のすべてについての広範な知識を持っていること
によって、その地方ではあまねく知られ、又尊敬を受けていた。彼の意見は伝統主義的
で、生涯を通じての英国国教会と保守党 (=トーリー党) の支持者であった。

メアリ・アンは彼の末女で、小地主の娘と結婚して出来た三人目の子であった。彼女
が生まれた時には、先妻の生んだ二人の子供 (姉と兄) はもうほとんど成人していて、
間もなく実社会に出ていった。(略) このような家族の中の末っ子というものは、自分
にはもう誰も相手になってくれるものがないと、ともすれば心細く思うことがあるもの
である。父親と母親は互いに相手を自分のものにしていくし、姉や兄は既に密接な関係
にある。自分を第一に考えてくれる誰かがほしいという激しい願いが、エリオットの生
涯を通じて抱かれていた。⁽¹⁾

以上の事から、作者ジョージ・エリオットは通常末っ子が甘えて得をするといった経験をして
いないことが分かる。幼少期のメアリ・アンは両親から構って貰えず、姉や兄とは年が離れすぎて
いて馴染めないまま、物心ついた頃には、既に彼女は家族から孤立していたのである。更に続け
て、クーパー (土井氏訳) によれば、ジョージ・エリオットには自分が姉とは対照的に不器
量だという悩みがあり、子供の頃は手伝もしないで本にばかりかじりついていると言われた
りとか、馬のたて髪のようにどうにも手のつけられない髪のためにしばしば嫌われたりとか
して、周りから嫌われた。それにも拘らず、エリオット 15 歳の時、母が亡くなり、彼女は
家や父や兄の面倒を見たり、貧しい人々を訪問したりする近所の慈善事業に従事したりして、
働いたりしたという。一方でエリオットの姉は、彼女と対照的に結婚して家を出て行ってい
る。⁽²⁾ エリオットは子供時代、余り恵まれなかったにも拘らず、父親が亡くなってからは、
家族の世話をしたり、今で謂うボランティア活動をしたりしていた。彼女は、とても順風満
帆と言えない状況に置かれていたのである。エリオットには自分の境遇、生来の特質に対し
ての悩み事は何一つ出て来ない。それどころか著詩では幼少期の頃のことを詩編、*Brother and
Sister* (1869) の中で、「私のすべての善の種子」⁽³⁾ だと説明している。小説『ミドルマーチ』
の主人公ドロシアが、すべてを受け容れ、良い方向に解釈しようとする姿勢にはエリオット
のこうした生い立ちからくる性格が反映されていると思われる。彼女は「芸術家などの靈感
によるような小説家という面と、独断的な道德家の二面がある」⁽⁴⁾ とされる。故に、本論文
では、土井氏の訳によるエリオットについての紹介文 (前出) に書かれている、複雑な二面
性を持つ彼女の、ある種の「偏り」⁽⁵⁾ を生んだ背景やその過程を明らかにしようと試みた。

1.2.2. テリー・イーグルトンの指摘した『ミドルマーチ』、『フロス河の水車場』に於けるヴィクトリア朝後期時代に見られるイデオロギー又は観念形態について

テリー・イーグルトン (1992) は『『ミドルマーチ』、『フロス河の水車場』の中には、大別して Romantic individualism や Romantic self-achievement などの個人主義と、Idealism や Feuerbachian humanism といった共同団体主義の対立があり、様々なイデオロギー又は観念形態が描かれている』^⑥と述べている。テリー・イーグルトンによる、作中に描かれていると指摘されたイデオロギー(又は観念形態)の中から任意に抽出した主なものを以下に列挙する。

①フォイエルバッハのヒューマニズム (Feuerbachian Humanism) については、フォイエルバッハが独自の人間学に拠って、彼の考える本来在るべき姿のキリスト教自体に照らして、宗教における人間疎外を暴露した理論的達成である。神、信、善、美、聖というものは人間が作ったもの、実在しないものとする考え方である。こうした考え方に立った小説の登場人物分析という点で、本論文の目新しさがある。イーグルトンが指摘するところでは『ミドルマーチ』、『フロス河の水車場』におけるエリオットに見られるイデオロギー全体を統括するアイデア (idea) である。それは「信、善、美、聖」というものは人間が作ったものとするのだが、実際には、そのようなものは存在しないのだとする考え方でもある。「神の救い」ですらも人間中心に考えられた「恩恵」のようなもので、自分に都合の良い「神の救い」だと受け取ったバルストロウド (第71章等) が、『ミドルマーチ』における代表者として挙げられる。

『フロス河の水車場』に於ける代表者として、スティーヴン、マギーが挙げられる。このテーマに関する主な批評として代表的なものに、フォイエルバッハのヒューマニズムがエリオット作品に見られるという内容のイーグルトンの “George Eliot: Ideology and Literary Form”^⑦があり、その他に小説の題にもなっているフロス河を「人類の精神的文化遺産の集積」と考えるエリオットの思想を紹介しており、神を含めた精神的文化遺産を人間が作り出したものだとし、それに支配される状況は本末転倒だとしている、萩野昌利の「第4章 『ミドルマーチ』——その構造と機能——」^⑧等がある。

②ロマン主義的自己目的達成 (Romantic self-achievement) とは、古典主義・合理主義に反

抗し感性・個性・自由を尊重し、個人が掲げる理想をあくまで追求し、その実現を目指す考えを指しているものと考えられる。

『ミドルマーチ』における代表者として、社会からの評価に背を向けたまま、自分の研究だけの世界に閉じこもるカソーボンや、熱心な福音主義者の振りをして、金の為に不正を働くバルストロウドと、社会との調和を目指すドロシア、ウィル・ラディスローの2派に分けて描かれている。

『フロス河の水車場』に於ける代表者に、スティーヴン、トム、マギーが挙げられる。

このテーマに関する論調の傾向として、自己実現でも女性の社会的自立の観点から論じられるのみで、男性の登場人物を含めた人間の自己実現の観点から論じた先行研究本は存在しないと見られる。故に、本論文が「ロマン主義的自己目的達成」という観点があると指摘したイーグルトンの主張について検証を試みた初めての論文であると言えよう。また、「ロマン主義的自己目的達成」の定義に使用した各登場人物の「理想」という観点からも『ミドルマーチ』について論じた先行研究はあるが、その数は少なく、小説内の登場人物に於ける「理想」という概念を含む「ロマン主義的自己目的達成」の観点からの分析という点、そして『フロス河の水車場』について、このテーマで論じられたものが今のところ見当たらないという2点が、本論文の目新しい点である。

このテーマに関する主な批評（書籍、論文等）としては、外国語の当該テーマの言葉を表題に用いてある書籍、論文に該当無し。日本人、又は日本語に翻訳された、当該テーマの言葉を表題に用いてある書籍、論文として藤井元子の「*Middlemarch*における“Individuality”について」⁹⁾がある。その他に、松本啓の「第10章理想と現実の狭間——『ミドルマーチ』をめぐって——」¹⁰⁾や美術を例にロマン主義についての講義内容を纏めた、アイザイヤ・バーリンの『バーリンロマン主義講義』¹¹⁾がある。

③福音主義 (Evangelicalism) については、一般的に「福音主義」は、聖書に証 (あかし) されている救い主、イエス・キリストの喜ばしい訪れ (福音) を重んじる立場とされ、1) 伝統、秘蹟等を重視するローマ・カトリックに対し、「信仰のみ」「聖書のみ」を主張するプロテスタント、2) 再洗礼派やカルバン派などに対して、特に、ドイツのルター派、3) 聖書解釈の上で、逐語的に受け入れる根本主義、4) イギリス国教会で、高教会に対する低教会、

5) 18世紀の福音信仰覚醒運動の流れをひくメソジスト派が、それぞれ福音派もしくは福音主義に立つと言われている。⁽¹²⁾「新約」とは神がイエス・キリストを持って新たに人類に与えた契約の意である。福音主義者は、キリストの伝えた福音にのみ、救済の根拠があるとす。これらのことから、彼ら福音主義者の言う「聖書」とは、『新約聖書』ということになる。『ミドルマーチ』においては、新約聖書に書かれていることに、忠実に従って、生きようとすることによって神の恩恵に与るとする、4) に挙げたイギリス国教会低教会派の考え方の立場を、主に採って描かれているとする。

『ミドルマーチ』における代表者として、こうした福音主義の考え方に従順であろうとしたのが、ドロシアとカソーボンとの結婚生活である。片やそれに背く生活を送っている、福音主義を踏み外した人物としてバルストロウドが描かれている。こうした意味で彼の描写には福音主義の考え方が色濃く反映されていると言える。

『フロス河の水車場』における代表者にマギー、スティーヴン、フィリップ、トムが挙げられる。

このテーマに関する主な批評（書籍、論文等）として代表的なものに、イギリス思想研究の大御所的存在である、バジル・ウィリーの *Nineteenth Century Studies*⁽¹³⁾がある。この書籍のG・エリオット論の部分に於いて、福音主義についての記述が見られる。その他、日本人の研究者によるこのテーマについての記述が見られるものとしては、松本啓の『イギリス小説の知的背景』⁽¹⁴⁾にも『ミドルマーチ』、『フロス河の水車場』を含めた、G・エリオット作品の福音主義に対する立ち位置についての記述が見られる。

④農村共同体 (Rural organization) とは、農業及び農村組織をもって社会の基礎としようとする立場。エリオットは農業を中心とした社会を理想化した面がある。

『ミドルマーチ』における代表者としてケイレブ・ガース、メアリー・ガース、フレッド・ヴィンシーが挙げられる。フレッドが著した本の題名を『緑野菜の栽培と家畜飼料の経済について』としたことから伺える。「かぶらやふだんそう」の栽培を語る時、それらを育てる土地 (earth) について、触れない訳には、いかないからである。

『フロス河の水車場』に於ける代表者としてウェイケム (氏)、タリヴァー氏、トムが挙げられる。

このテーマに関する主な批評として代表的なものに、J・Hills Miller の “Optic and Semiotic in *Middlemarch*”⁽¹⁵⁾がある。ミラーはこの論文の中で、1932年の第1次選挙法改正頃のイギリス社会を如何に描き現すかにエリオットが心を砕いたと述べている。その上で論者は『フロス河の水車場』にも（[農村共同体を理想郷とした]）エリオットの人生観が表現されているとした。（[]内、筆者）その他、萩野昌利は『小説空間を《読む》』⁽¹⁶⁾の中で、競り市が最終稿に載せられた点に着目し、所見を述べている。

⑤初期フェミニズム（*Incipient feminism*）は女性の社会的、政治的、経済的権利を男性と同等にし、女性の能力や役割の発展を目指す主張の初期的段階での考えである。当時の女性に対する観方（みかた）や女性の価値のことを指している。

『ミドルマーチ』における代表者として、夫・カソーボンが過度の緊張と疲労からくる心臓発作で論文執筆中に倒れたときも夫を助け、良人の為にながめるかを治療に訪れたリドゲイトにドロシアが訊ねる場面など。家父長制度のもとに抑圧され、家庭の場に閉じ込められたヴィクトリア朝の女性の立場をよく現している。エリオットによる悲劇からの開放・救済方に着目した。

『フロス河の水車場』に於ける代表者として、マギーが挙げられる。トムとマギー、マギーとスティーヴン、各々に関わり合う場合と、マギー単独の場合に於いて論じている。このテーマに関してエリオットが、女性がどれ程、男性と比べ虐げられてきたかを強調して女性の解放を小説の中で訴えたのだとした解釈が定説になっていた。また『フロス河の水車場』に関して、松田英男（2000）がフェミニズムの観点から男女の「性的役割が確立した世界」⁽¹⁷⁾での兄妹の葛藤と和解について触れられているというのが、これまでの論調の傾向であった。当該テーマの視点を『ミドルマーチ』、『フロス河の水車場』両小説の、一人の、それも主人公分析に用いた先行研究は多くある。しかし当該論文ではメアリ・ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』（1792）を出版し、男女同権を目指して始まるフェミニズム運動の、さらにその前段階という視点から分析（検証）した点と、複数の、或いは脇登場人物の分析手段として用いた、その分析方法の2点に目新しさがある。

次に外国の研究者による、「初期フェミニズム」というテーマに関する書籍、又は論文として、Kathleen Blake の “*Middlemarch and the Woman Question*”⁽¹⁸⁾がある。続いて、日本語又は日本人による当該テーマに該当する書籍、又は論文としては、織田元子の「第8章ジョージ・

エリオット」⁽¹⁹⁾がある。他に、亀井規子の「George・Eliotと婦人解放運動」⁽²⁰⁾、これは、米国文化使節コール女史に聞いた、英米文学の現状が綴られており、座談会形式を本に纏めたものとなっている。他には、松田英男が『『フロス河の水車場』における男と女』⁽²¹⁾で、トムが男性、マギーが女性の代表として小説内で描かれていることが、フェミニズム批評の中で指摘されている旨の記述がある。また、ジャネット・K・ボールズ、ダイアン・ロング・ホーヴェラーらは、編著『フェミニズム歴史事典』⁽²²⁾を、V・ウルフには、「女性と小説」⁽²³⁾、「女性にとっての職業」⁽²⁴⁾、「ジョージ・エリオット——大人のための文学」⁽²⁵⁾等を著している。中でも『フェミニズム歴史事典』は多くの要素を簡潔な形にまとめた参考図書であり、人物、組織、キャンペーンの背景と、裁判事例、目標、達成されたことが含まれている。多くの行動が集中しているアメリカ合衆国とヨーロッパに重点が置かれているが、世界の他の地域に関する項目も多く掲載されている。フェミニズム運動については、序論で要約され、年表で時代があとづけられている。さらに詳しい情報資料を、大量の文献目録の形で提供しているのが特徴と言えよう。そして、このテーマに関する主な批評（書籍、論文等）としては、Barbara Hardyが書いた“*Middlemarch: Public and Private Worlds*”⁽²⁶⁾がある。ハーディーはこの論評で、『ミドルマーチ』を単独に取り上げて、その中でエリオットが大作『ミドルマーチ』を完成できた要因について、述べている。彼女によると、エリオットはまず、数多のテレサたち「女性」の努力をワーズワースの言葉を借り、序章に書き、彼女たちの「声なき声」に耳を傾けることをした。そして女性達への「同情に源を発し」（*Middlemarch*, 86）、彼女たちの声を代弁しようとしたと述べている。

⑥プチ・ブルジョア・モラリズム（Petty[petit]-bourgeois moralism）とは、資本家階級でもないのに資本家階級的意識をもっている人々の道徳観（モラル）の事を指す。

『ミドルマーチ』における代表者として、牧師の家柄や受けさせた教育が異なることを、理由に息子フレッドと土地差配人であるケイレブ・ガースの娘メアリーとの結婚に反対するヴィンシー夫人が挙げられる。

『フロス河の水車場』に於ける代表者としては、ディーン氏、ウェイケム（氏）が挙げられる。

19世紀後期、ヴィクトリア朝時代の精神風土や道徳観（モラル）についての、全般的な特徴という視点から論じたり、又はエリオット本人の意識についての、先行研究はある。

しかし、本論文は『ミドルマーチ』、『フロス河の水車場』という、具体的作品且つ両作品内の登場人物に絞って、エリオット本人の道徳的意識とは切り離れた上で、「プチ・ブルジョア階級」という特定の階級の意識に分析する対象を限定して論じた点が新しい。このテーマに関する主な批評（書籍、論文等）として、Terry Eagleton の “George Eliot: Ideology and Literary Form”⁽²⁷⁾ が代表的であり、プチ・ブルジョア・モラリズムについても触れられている。その他日本語の当該テーマに該当する書籍、論文として、萩野昌利の「第15章 ヴィクトリア朝の精神風土、人間ジョージ・エリオット」⁽²⁸⁾等がある。この様に、テリー・イーグルトンの指摘する数多くのイデオロギー又は観念形態の中から、既に述べた様に、本論文では一括りとして纏め易く、且つ読んで頂く皆様にも解り易いと思われた任意の6つを抽出し、以後の節で小説の各場面に当てはめながら、検証していくこととする。

註

- (1) Cooper, Lettice. 土井治訳『GEORGE・ELIOT 英文学ハンドブッカー「作家と作品」No.30』（研究社出版、1956年），pp. 1 - 3.
- (2) *Ibid.*, p. 4.
- (3) *Ibid.*, p. 54. 原文は、“seeds to all my after good;” となっている。
- (4) *Ibid.*, p. 4.
- (5) *Ibid.*, p. 158.
- (6) Eagleton, Terry. “George Eliot: Ideology and Literary Form”, Peck, John ed. *Contemporary Critical Essays, New Casebooks Middlemarch*, London: MacMillan Education, 1992, pp. 158-173.
- (7) *Ibid.*, p. 158.
- (8) 萩野昌利「第4章 『ミドルマーチ』——第60章 その構造と機能——」、『小説空間を《読む》』（英宝社、2009年），p. 40.
- (9) 藤井元子「*Middlemarch* における “Individuality” について」、『日本福祉大学研究紀要』第16号（日本福祉大学、1969年），pp. 1-26.
- (10) 松本啓「第10章理想と現実の狭間——『ミドルマーチ』をめぐって——」、『イギリス小説の知的背景』（中央大学出版部、2005年），pp. 187-215.

- (11) A・バーリン、田中治男訳『バーリンロマン主義講義』（岩波書店、2000年）、pp. 125-148.
- (12) “Evangelicalism”, *Encyclopædia Britannica, Volume 3*, London 1788, pp. 868-9.
- (13) Willey, Basil. *Nineteenth Century Studies*, London: Chatto and Windus, 1949, pp. 204-5.
- (14) 松本啓 『イギリス小説の知的背景』（中央大学出版、2005）, pp. 215-236.
- (15) Miller, J. Hills. “Optic and Semiotic in *Middlemarch*”, edited by Harold Bloom. *Modern Critical Interpretations; The Mill on the Floss*. New York: Chelsea House Publisher, 1988, pp. 9-25.
- (16) 萩野昌利 『小説空間を《読む》』（英宝社、2009年）, pp. 72-5.
- (17) 松田英男 「性的役割が確立した世界」、海老根宏、内田能嗣共編著『ジョージ・エリオットの時空——小説の再評価』（北星堂書店、2000年）, pp. 180-191.
- (18) Blake, Kathleen. “*Middlemarch* and the Woman Question”, *Nineteenth-Century Fiction* 31, no.3, Oakland: The Regents of the University of California, 1976, pp. 235-250.
- (19) 織田元子 「第8章ジョージ・エリオット」、『フェミニズム批評』（勁草書房、1998年）, pp. 173-208.
- (20) 亀井規子 「George Eliot と婦人解放運動」、『上代たの先生米寿記念英米文学論集』（上代たの先生米寿記念実行委員会、1975年）, pp. 202-8.
- (21) 松田英男 『『フロス河の水車場』における男と女』、『ジョージ・エリオットの時空——小説の再評価』海老根宏、内田能嗣共編著（北星堂書店、2000年）, pp. 122-131.
- (22) ジャネット・K・ボールズ、ダイアン・ロング・ホーヴェラー編著、水田珠枝・安川悦子監訳『フェミニズム歴史事典』（明石書店、2000年）, p. 83.
- (23) V・ウルフ、福原麟太郎監修、黒沢茂編集、朱牟田房子訳「女性と小説」、『ヴァージニア・ウルフ著作集』第7（評論）（みすず書房、1976年）, pp. 193-6.
- (24) V・ウルフ、出淵敬子・川本静子監訳「女性にとっての職業」、『女性にとっての職業: エッセイ集』（みすず書房、1994年）, p. 1, 14, 16, 26, 301, 302, 309.
- (25) V・ウルフ、大澤實訳「ジョージ・エリオット——大人のための文学」、『女性と文学』（河出書房、1956年）, pp. 152-164
- (26) Hardy, Barbara. “*Middlemarch: Public and Private Worlds*”, *Particularities: Readings in George Eliot*, London: Peter Owen, 1982, pp. 123-135.
- (27) Eagleton, pp. 160-1.
- (28) 萩野昌利 「第15章ヴィクトリア朝の精神風土、人間ジョージ・エリオット」、『イギリス文学史序説:社会と文学』（中教出版、1978年）, p. 40, 51.

I.1. フォイエルバッハのヒューマニズム

I.1.1. フォイエルバッハのヒューマニズム (Feuerbachian Humanism) とは

I.1.1.1. ヒューマニズムについて

この小説、『ミドルマーチ』全体を統括するアイデア (idea) である「フォイエルバッハのヒューマニズム」(Feuerbachian Humanism) を定義する前に、まずはヒューマニズムについての一般的な定義が必要であろう。これについては、以下に引用する内容を基調とする。

(ヒューマニズムとは) 人間性の尊重、人間の解放を目指す思想、態度。語義、内容は多様であるが、一般的には人道主義、人間主義、人文主義などの訳語が充てられる。ヒューマニズムは、(略) ヨーロッパの伝統として保たれている。18世紀から19世紀にかけて特にドイツで啓蒙思想 に対する反動として、ギリシャ古典を仰ぎ(略) 人間性の多面的調和を主張した^①

上記の文章で、私達は人間性を尊重することを目指す態度が取れるように努力すべきであること、即ち、ヒューマニズムにはディグニティ(品位や高潔さ)が求められているということが読み取れる。そのことは、ヒューマニズムの訳語に「人道主義」を充てているところからも分かる。

それならば、フォイエルバッハはヒューマニズムとの接点をどこで見出したのか。別の資料にその根拠を見ることが出来る。そこではヒューマニズムとは、ルネッサンス期(14～16世紀)に、ギリシャ古典に直接接触れることを糸口にして、腐敗していたとされる教会の一部の幹部たちによって主導された中世封建社会からの人間解放を求めた知識レベルでの潮流のことをも指す^②としている。

I.1. 著書『キリスト教の本質』の中の「フォイエルバッハのヒューマニズム」

I.1.1. 『キリスト教の本質』に書かれているヒューマニズムについて

フォイエルバッハが『キリスト教の本質』の中で書かんとした、神と「宗教的愛」との関係という視点から見た場合、後に「フォイエルバッハのヒューマニズム」と呼ばれているものとは何かということが、問題となる。この中心的な部分の一つが、即ち、彼独自のヒューマニズム（人間中心主義）理論である。

まず、この「フォイエルバッハのヒューマニズム」は3つの特徴に分けられる。それらの特徴を箇条書きで列挙すると、i) 人間中心に物事を見るということが、キリスト教に於いて、それまで神とされてきたイエスを人間と見なしたこと⁽³⁾、ii) 神の意識は、人間の自己意識であり、神の認識は、人間の自己認識である、と定義付けし、そしてさらに、iii) キリスト教の教理では、神は愛である(121)⁽⁴⁾と「宗教的愛」について触れていて、その倒錯性を批判しているといった点にある。取分けii)の「神の意識は、人間の自己意識であり、神の認識は、人間の自己認識である」というのは、彼に依ると、「神」を人間とは別な他の存在者と想定し、「神」を自己の外にあって、尚且つ自分自身が人間として持っている、そして最も尊いものを全部「神」の所有物となし、自分は全く卑しい虚無的な存在であると位置付けている。このような「神」と人間の関係は、球形のアイスクリーム部分と尖り帽子形のコーン部分との関係と同じである。球形のアイスクリーム部分が「神」で、コーン部分が「人間」という関係である。なぜならば、ソフトクリームに於いても、一番尊い（美味しく甘い）部分は球形のアイスクリームが全て「所有」し、虚無的な存在である人間は中味が空洞のコーンのようなものに例えられるからである。

フォイエルバッハはキリスト教を批判するつもりで『キリスト教の本質』という書物を著した筈だったが、彼は「キリスト教の神」としてのイエス・キリストについては、否定したものの、そして、当時の様々な教会による腐敗を糾弾している。滝沢（1978）に依れば、『キリスト教の本質』という著作は、フォイエルバッハによる宗教の人間学化であり、人間を当時のキリスト教会の呪縛から救うものであったと位置づけられる。

しかし、『キリスト教の本質』を著した当時は、教会とその信者による抵抗を受けた⁽⁴⁾という。キリスト教はイエスを「神」とし、信仰の対象として崇める（拝礼の儀を行う）よう、強いる立場である。故に後の唯物論と無神論的立場に移っていくフォイエルバッハは、「神」が人間が脳の中で創り出したものであり、人間であったイエスを「神」とすることを否認していたと言えよう。

そしてさらに、彼はキリスト教の教理では、神は愛である(121)⁽⁵⁾と述べていて、「宗教的愛」について触れ、批判している。因みに以下の引用は、エリオットの英訳本 (*The Essence of Christianity*) からの引用で、フォイエルバッハが「神」と「宗教的愛」について述べている部分である。

祈る者によって決定され得るべき「神」というコンセプトを否定することは、この上もない不合理である。……もし我々が一旦、尊敬の対象となるものを信ずるならば、それは祈る人の対象であり、愛情の対象であり、神意の現れたものであるのだ。

—「神」は愛なしには考えることが出来ない—故に人は愛していると錯覚し、その人の行動は総て愛に起因すると思いついでいる。……クリスチャンは神に、その属性としてのモラルを与える。ためらいもなく、それは幻想でも想像のものでもない、真実の愛である。(55)⁽⁶⁾

ここでは、最も内的で最も真実な心術である愛でさえも、宗教心を通して、単に外見的幻想的な物になるからである、という意味のことが述べられている。というのも、宗教的な愛は人間をただ神の為に愛するにすぎず、従って、単に外見的に人間を愛するに過ぎず、実際はただ、神を愛するだけ、ということになるからである。本来キリスト教精神と矛盾するものではなかった筈の人間中心主義が、フォイエルバッハの宗教的愛に関するこの解釈が表出したことによって、キリスト教から人心が離れていくことに繋がった。「神への信仰が人類への信仰に置き換えられ⁽⁷⁾ていった。やがて、人間中心主義の概念自体も同様に自然から離れて抽象化されていった。「隣人愛」を唱えていたキリスト教から離れていった人間中心主義の概念が、その後「隣に生きている具体的な人間」よりも、「一般的な人間」を大切にしていこうという内容に変貌していき⁽⁸⁾こととなった。

その「キリスト教本来の神」の属性について、宗教的愛との関係に於いて、フォイエルバッハは原本ドイツ語版『キリスト教の本質』第5章で、次のようにも叙述している。

人間は宗教において自己を神的対象として、神的目的として見、それ故人間は、宗教において人間自身の本質にのみ、自分自身にのみ関係するにすぎぬ、というこの最も明瞭にして論破の余地最も少なき証拠は宗教の基礎にして且つ中心的なる、神の人間に対する愛である。神は人間のためにその神性を放棄する。(略) 最高の缺けるところ

なき神が人間のために自己を卑下し自己を低める。(130)⁹⁾

前頁の引用で「人間は宗教において自己を神的対象として」見てしまうと述べられた部分では、フォイエルバッハは、人間は時として自分たちが何でも出来る存在になったかのようになり、錯覚を起こすことがあるという意味のことが書かれている。キリスト教はイエスが全ての人間の罪を一身に被って処刑されたことから、一気に人々の間に広まることとなった。

フォイエルバッハは、人間が「神」になれるのではない、そのような考えは思い上がりであり、人間は自分たちと同じ人間だった「イエス」を信仰の対象にしてしまう愚かな存在であると、イエスの処刑の意味合いを捉え直して評している箇所である。因みに上記の引用箇所での「宗教」とはキリスト教のみを指し、宗教一般ではない。何故なら、その宗教は「神の人間に対する愛」を基礎且つ中心にしている⁽¹⁰⁾からである。フォイエルバッハは「最高の缺けるところなき神が人間のために自己を卑下し、自己を低め」て下さると述べている。つまり、フォイエルバッハはキリスト教における「神」を規定している。即ち、人間である彼が「神」を規定してみせることで、「神」は人間が脳で作らあげたものであることを証明して見せたと言えよう。フォイエルバッハは、この「キリスト教本来の神」の属性について、宗教的愛との関係に於いてキリスト教的宗教意識の倒錯性が見られると指摘する。故に、上記の引用箇所最後の二行分には、「キリスト教では、神が(宗教的)愛であるため、人間の為ならその神性を捨ててまで、虚無的な人間の為に尽くして下さっている」という意味のことが書かれていると(原文を)再訳することが出来る。

I.1.2.2. フォイエルバッハのヒューマニズムでは何故「神の必要性」を否定しないのか。

既述の通り、フォイエルバッハは「キリスト教の神と呼ばれるもの」は人間の脳が作り出したと述べており、神の存在を否認しており、自身は無神論的傾向を強めていくのだが、『キリスト教の本質』の中では、執筆当時の社会に於ける「神そのものの必要性」までは否定していない。その考え方の根拠は何処にあるのか。立証可能な根拠の一つに「ルターの影響」が考えられるからである。故に『キリスト教の本質』に於けるフォイエルバッハのヒューマニズムに見られる「ルターの影響」について、以下に論証を試みる。

ルターとフォイエルバッハ、2人それぞれが生きていた当時の教会の姿勢を批判した点に、両者の共通点が見られる。ご承知の通り、ルターが教会の腐敗に対して正面から異を唱えた所は、フォイエルバッハが本を書いて間接的に批判したのとは異なる。

しかし、フォイエルバッハとはその根拠と考え方、そして憂教の士であるという点に於いては共通していた。第14巻⁽¹¹⁾にルターの「神は全能である。しかし信仰をもっている人は神である」との意味の言葉が収められている。同様の内容を、今度は、フォイエルバッハが『キリスト教の本質』の中で叙述している。比較の意味で以下に紹介する。

もし私(フォイエルバッハ)が神を信ずるならば、そのとき私は神を持つのである。即ち神に対する信仰が人間の神なのである。もし神が、私が信ずるようなものであり且つ私が信ずるように存在するならば、神の本質は信仰の本質と違った何物であろうか？ (266)⁽¹²⁾

ルターはこの説教を含む一連の教会のありようについて話したことを1526年に出版している。二人の言葉を読み比べれば、双方の言わんとする内容が極めて似通っていることにお気づきだろうか。どちらも神が信仰の本質を為す位置を占めるという点では一致している。つまり、フォイエルバッハの言葉に依れば、「キリスト教の信仰」には「神」が必要であるが、信仰しない者に対してまでは、「神」の必要性を認めていない、ということになる。信仰しない者が神を否認することを認めた点がルターとの違いになってくる。

『キリスト教の本質』の初版が刊行されたのが、1841年のことである。フォイエルバッハがルターの説教集を何らかの形で入手し読み、ルターと自分の考え方の共通点、相違点を意識した上で『キリスト教の本質』を記述したであろうことは、歴史年表の上からも証明されていると言える。

I.1.2.3. 「フォイエルバッハのヒューマニズム」とは(まとめ)

これまでのことをまとめると、当時の教会が説く神(イエス)が救いの中心とされ、人間を否定するキリスト教であったのとは対照的に人間が救われることを中心に物事を考えているのが、フォイエルバッハの唱えている「フォイエルバッハのヒューマニズム」、言い

換えると、「フォイエルバッハが唱える人間中心主義」という結論に至る。即ち、フォイエルバッハは、イエスを「神」ではなく人間と見なし、「神」から人間へと視点の転換を図ったのである。人間の罪を一身に背負って処刑されたことを理由としてイエスを神として祈りの対象とすることで秩序を保とうとした、15世紀の教会の方針に、フォイエルバッハは異を唱えたのである。

人間が万物の霊長⁽¹³⁾と言える位に、フォイエルバッハは人間をこの世に存在する生き物の頂点に置き、イエスに対して神という名称の使用を否定しながら、イエスより上位の神（聖書表現で「天の父」と訳されている）又は神のような性格を持つ絶対的存在自体は否定していない。繰り返しになるが、フォイエルバッハはキリスト教の人間社会に於ける必要性を認めた上で、彼独自のヒューマニズム(人間中心主義)を唱えたのである。

フォイエルバッハの主張する内容が正確に理解される為に、更に補足説明をしておく。フォイエルバッハが否定した「神」とは人間であるキリストを「キリスト教の神」とする、当時の「教会の主張する神」を「否定」し、キリスト教に於ける（神学上の）「神」そのものも「否認」した⁽¹⁴⁾のである。キリスト教の神というものが、人間によって規定された存在であるとフォイエルバッハは考えた。故に物事を考える基準の中心を人間側に置くべきだとした。これが、フォイエルバッハの人間中心主義(ヒューマニズム)の特徴である、と言える。

『キリスト教の本質』の日本語訳版ではキリスト教を指す代名詞として「宗教」が多用されている、それ以外に理解の仕様のない場合が多く見られる。よってフォイエルバッハの頭の中に「神」と言えばキリスト教の神のみを想定している⁽¹⁵⁾ということが言えよう。彼の論理に依れば、「(キリスト教の)神」(以後「神」と略記)は人間がその性質をそのように規定したのだから、教会の言うように、「神」の存在を信じるには、根拠が不十分であると述べている。ただし、フォイエルバッハが『キリスト教の本質』を書く中で、「神」の存在を証明する根拠が不十分だという、その事だけで、彼が何故、「神」から人間中心の考え方へ転換することを発表したのか。それは、「キリスト教の神」というものが、人間が頭の中で創り出した想像の産物(コンセプト)⁽¹⁶⁾だという点だけが理論的に証明出来たからである。

彼は、生前に人間であったイエス・キリストを神と崇める、教会の姿勢に反発し、ルターと同じ考え方を採るようになるものの、キリスト教の国家や社会に於ける必要性は認めざるを得なかった。それは、彼がキリスト教をととてもよく理解していた（ことの証明にも

なる) からであり、神に取って代わる、社会の倫理を中心とした様々な規範(制度)を新たに構築し直す難事業に耐えうるだけの新たな基準を(『キリスト教の本質』執筆)当時、すぐに見出だすことが不可能に近いことであることもまた、予測出来たからであったことが容易に理解できよう。彼はあくまで教会側に反省を求め、司祭たちがキリスト教の原典(原点とも)へ回帰することと同時に立ち直ってくれることを期待して『キリスト教の本質』を書いたと言える。なぜなら、その根拠が、無神論的傾向は見られるものの、彼が終生、キリスト教徒であり続けたことであり、教派すら移らなかったことが確実視されている⁽¹⁷⁾からである。以上ここまで「フォイエルバッハのヒューマニズム」について、彼の著書である『キリスト教の本質』を通して定義づけてきた。

これまでの論証の結論として、「フォイエルバッハのヒューマニズム」とジョージ・エリオット訳『キリスト教の本質』との間には密接な繋がりがあることが理解できよう。

この後の項では、『キリスト教の本質』を英訳したエリオットが『ミドルマーチ』の中で、どのように「フォイエルバッハのヒューマニズム」を描いているのかを、小説の中の各場面に当てはめることにより以下で順次検証していく。

I.1.3. 『ミドルマーチ』作中に於ける「フォイエルバッハのヒューマニズム」の例

I.1.3.1. 検証①—カソーボン氏の場合

フォイエルバッハのヒューマニズムの定義に当てはめると、「神、善、美、聖」の内の「聖」についても、人それぞれ、何を聖と考えるかは千差万別である。故にミドルマーチの町という限られた範囲の住人の総数であっても、共通して多くの人々が「聖」だと考えるかどうかは、分からない。カソーボン氏が「聖」だと考える対象ですら、彼の脳の中で創り出したものであり、彼が言うところの「聖」的なものなど実存しないのだということになる。カソーボン氏の場合、つまりは「神学大全」という研究書の完成自体、彼の所属する教会にとって、それが如何に「聖」なる仕事と評価されているかどうかについて、小説内で定かにはされていない。ましてやイギリスのキリスト教全体に対しては、カソーボン氏の研究書が完成しようがしまいが、何の影響もないことになってしまうのである。そのような研究を神「聖」なものだと、思い込んでいるという事実が、既に彼がフォイエルバッハの

ヒューマニズムの虜になっていることを示している。故に、次のような場面に於いて、カソーボン氏のフォイエルバッハのヒューマニズム的考え方が描かれていると言えよう。

ミサ式の次第通りに朗読する司祭の声の様に正しく、つり合いの取れた、勿体ぶつた声音で言う[カソーボン氏の]このような答え[ドロシアに美術館の展示彫刻の事を、説明する時の彼の言い方]は、永遠の都[ローマ]の栄光を証明する助けにはならないし、又、彼女[ドロシア]に、この栄光をもっとよく知るならば、世界は喜ばしい光に照らされて見えるだろう、という期待を与える助けにもならなかった。多年知識を積み重ねた筈であるのに、興味も共感も全く欠如している人に接すること程、熱烈な思いに満ちた若い者を憂鬱にすることはないだろう。(197) ([]内、筆者)

カソーボン氏がドロシアと結婚して、新婚旅行先のローマでのエピソードを取り上げている場面である。エリオットがカソーボン氏のことを、多年に亘って知識を積み重ねた筈なのに、その知識が、彼の人柄や人的魅力となって他の人に、取り分け、妻になったドロシアにさえ、伝わらないことを残念がっているとも、解釈できる個所ではないだろうか。この事実から、エリオットが、「神、善、美、聖」といった概念のうちの「聖」という概念について、カソーボン氏のローマでのドロシアに対する行動の結果を以て、「聖」という概念すら、人間が頭の中で作り出したものの例の一つであり、普遍的に存在していて、誰でもが共通の認識を持てる種類の概念ではないことが証明されていると考え、この場面を描写することにしたのではないだろうか。

I.1.3.2. 検証②——リドゲイトの場合

医薬分業の理想を掲げ、且つ全科診療の為に、わざわざ田舎のミドルマーチを希望して赴任したリドゲイトだったが、町の人々に彼の理想とする医療サービスはなかなか受け入れていただけなかったようである。彼は医薬分業や一人の医師で全科を診察することが患者の為になる、つまり「善」だと考えたのである。しかし、フォイエルバッハのヒューマニズムの定義に当てはめると、「神、善、美、聖」の内の「善」についても、人それぞれ、

何を善とするかは千差万別であるから、ミドルマーチの町という限られた範囲の住人の総数であっても、そこに共通して多くの人々が「善」だと考える医療体制というものでさえも、人間（この場合はリドゲイト）が脳の中で創り出したものであり、「善」的医療体制というものが実存しないのだということになる。故にミドルマーチの町で掲げた、リドゲイトの医薬分業及び全科診療の理想は、彼が脳の中で創り出したものとされたことにならないか。さすれば、リドゲイトのこの場面の描写に、「神、善、美、聖」の内の「善」についてフォイエルバッハのヒューマニズム的要素が描かれていると言えよう。

I.1.3.3. 検証③——ドロシアの場合

人間が作り出した神に支配される状況は本末転倒であるとフォイエルバッハは主張している。人間が作り出した観念に囚われて自分で自分を疎外させてしまい人間らしさを失う状況はよくある。フォイエルバッハもヒューマニズムの立場を固守するように説いている。そのことから、ドロシアの場合も、彼のヒューマニズムについての考え方が具現化されている場面がある。ドロシアは結婚後、結婚前に描いていた「自分の無知に引き回されている小娘の状態から[ドロシア自身を]解き放して最も壮大な道に彼女を導いてくれる人に進んで行く」(29、[]内、筆者)という理想とのギャップに苦しむことになる(第37章)。こうした苦しい思いの中であって尚、ドロシアは結婚前に抱いた理想に縛られている。その場面を見てみたい。

ドロシアは脇目も振らずに机に向かっていた。するとその時、ぱたりと書物が床に落ちる大きな音がした。素早く振り返ると、書棚用の脚立の上のカソーボン氏が、苦しいと見えて前かがみになっていた。彼女[ドロシア]はすぐ飛び立って夫のところに駆け寄った。彼が呼吸困難に喘いでいることは、一目で分かった。彼女はそこにある足台に飛び乗って夫の肘のところにぴったり体を寄せた。ただ夫の身を案じる思いに自分が一杯になって言った。「わたくしに寄り掛かれますか、あなた」(283) ([]内、筆者)

そして夫カソーボンの診察を終えたリドゲイトにドロシアは次のように懇願するのである。

わたくしにできることを[リドゲイトさん]お考えになって下さいまし。主人は生涯苦しい研究を続けて参りました、そして前途に望みをかけて参りました。それ以外のことは何も考えておりません。そしてわたくしの心にあるのもそのことだけなのです。

(289) ([]内、筆者)

ドロシヤが人間の作り出した神の教え（隣人愛というヒューマニズム）を記した聖書の言葉通り忠実に守ろうという（福音主義とも言い換えられる）観念に囚われて、自分で自分を疎外させてしまう状態にあることが窺える場面である。「夫の肘のところにぴったり体を寄せた。ただ夫の身を案じる思いに自分が一杯になって」いるという記述描写に、ドロシヤがこの時、頭の中で何を考えていたかが現れている。それはつまり、人間は神というものを作り出した。その神の教えの一つとされた隣人愛の実践にドロシヤが囚われてあること、またそうした観念に囚われている為、彼女自身が所謂、疎外された状態にあることを如実に物語っている。

夫の研究に参加することによって、「無知に引き回されている小娘の状態から」(29)脱出出来るのではないかとの淡い期待が裏切られたにもかかわらずその自分の期待を裏切った「夫の肘のところにぴったり体を寄せ」て寄り添おうとする程に、ドロシヤは人間が作った神というものが教え説く「観念」に振り回され、頭の中を支配されている状態にあると言えよう。正にフォイエルバッハの説いた、ヒューマニズムの立場に固守し、人間が作り出した神に支配された本末転倒の状態が、上記2箇所引用に見られたドロシヤの姿である。

註

(1) 「ヒューマニズム」、『ブリタニカ国際大百科事典』1974年, pp. 886-8. この百科事典の「ヒューマニズム」の項目に依ると、フランスの実証主義哲学者、オーギュスト・コントが、始めた「人道教」にも言及している点が注目される。

因みに、「ヨーロッパの伝統」と言われているものには、このヒューマニズムの他に「コモンセンス」と「コモンウェルス」があるが、これらについて、詳しく述べることは別の

機会に譲るとして、ここでは「ヨーロッパの伝統」という言葉の中に含まれているコンテンツの名称を紹介する程度に止めておくこととする。

- (2) 「人文主義」、『ブリタニカ国際大百科事典』1974年, pp. 367-8.
- (3) ジョージ・エリオットと「高等批評」との関係についてだが、当時の彼女はドイツで起こっていた「高等批評」運動から強い影響を受けていた。「高等批評」運動とは、キリスト教に於いて、それまで神とされてきたイエスを人間と見なし、歴史上の他の英雄たちと同列に扱おうとする運動のこと。
- (4) 「神の人間に対する愛」、フォイエルバッハはキリスト教の人間的意味（キリスト教に於ける人間性；ヒューマニティ）について論じた後、一転してキリスト教の非人間的側面の批判を展開している。滝沢武人「カール・バルトのフォイエルバッハ論」（北海道大学、1978）, p. 81.
- (5) フォイエルバッハ、桑田悟郎譯『キリスト教の本質』（改造社、1932年）, p. 121.
- (6) Heuerbach, Ludwig. *Essence of Christianity*, Eliot, George trans. (New York: Harper Torchbooks, 1975) , p. 55.
- (7) 『ベルジャーエフ著作集』（白水社、1960年）, p. 289.
- (8) ロシアの思想家、哲学者であるベルジャーエフによる、自然的存在としての人間の解体から、オーギュスト・コントの目指した実証主義についての著述部分からの抜粋。
コントがジョージ・エリオットに与えた影響の内、自然の中で絶対的な信仰対象の存在を求める動きについての工藤好美(1975)による分析でも、同様のことが述べられている。工藤好美「小伝」、ジョージ・エリオット、工藤好美、淀川郁子訳『ミドルマーチ』 第I巻（講談社、1975年）, pp. 457-9.
- (9) フォイエルバッハ、p. 130.
- (10) 「神の人間に対する愛」、フォイエルバッハは、キリスト教の人間的意味（キリスト教に於ける人間性；ヒューマニティ）について論じたのち、一転して、キリスト教の非人間的側面の批判を展開している。この様に「ヒューマニティ」の非人間的側面の一つ、所有物としての「ヒューマニティ」を描いた作品としては、日本文学では芥川龍之介の「蜘蛛の糸」、『蜘蛛の糸、柱子春、トロッコ他17篇』（岩波文庫、1990年）が挙げられる。この作品の主要人物、「お釈迦様」は、韃陀多(かんだた)の善意を「所有物」として扱う。彼が人生で一つだけ良いことをしたからという理由で、彼を助けるのが「お釈迦様」である。「お釈迦様」と表記されている存在は、実は「神」なのだが、日本人に解り易いよう

にと、芥川龍之介が神の属性はそのまま変えずに、「神」をお釈迦様に名称を置き換えたものとの研究が存在する。

ちなみに芥川が「お釈迦様」を「神」と認識していた根拠は、『蜘蛛の糸』を書くに際し、ロシア正教が広く社会に浸透していたロシア文学、ツルゲイネフの『カラマーゾフの兄弟』に、その題材、倫理観を取材した事実による。佐藤泰正、関口安義編「芥川龍之介の児童文学——『蜘蛛の糸』小論」、『蜘蛛の糸児童文学の世界』芥川龍之介作品論集成第5巻（翰林書房、1999年）、p. 40.

- (11) ルドウィッグ・フォイエルバッハ、船山信一訳『キリスト教の本質』上巻（岩波書店、1937年）、p. 267.
- (12) *Ibid.*, p. 266.
- (13) 人類のこと。岩波国語辞典第7版(岩波書店、2112年)、p. 1232.
- (14) 滝沢武人, p. 79. 原典は、フォイエルバッハ、船山信一訳「宗教の本質に関する講演」、『全集』第11巻（新日本出版社、1973年）、p. 500.
- (15) フォイエルバッハ、桑田悟郎譯『キリスト教の本質』（改造社、1932年）、p. 150.
- (16) 養老猛司も著作等で同様の考えを述べている。
- (17) エンゲルス『フォイエルバッハ論』（新日本出版社、1998年）、p. 19.
- (18) フィリップ・ハートノル、子安雅博訳『ジョージ・エリオット登場人物事典』（京都修学社、1998年）、p. 84.
- (19) この箇所ではエリオットは「死」という事態を「(その人の) 魂が肉体を離れて旅立つこと」と定義している。原文が“the departure of that man’s soul” (*Middlemarch*, 717) となっていることから彼女の「死」観が窺える。
- (20) Eliot, George. *Middlemarch, Ed. with an Introduction and Notes by Rosemary Ashton*, London: Penguin Books, 1994. 以下、原文からの引用を示す括弧内の数字は、この本をテキストとし、翻訳は工藤好美・淀川郁子訳『ミドルマーチ』I、II巻（講談社、1975年）を参照させて頂いた。

I.2. ロマン主義的自己目的達成

I.2.1. 「ロマン主義的自己目的達成」とは

「ロマン主義的自己目的達成」とは、『ミドルマーチ』においても、古典主義・合理主義に反抗し、感性・個性・自由を尊重し、個人が掲げる理想をあくまで追求し、その実現を目指す考えを指しているものと考えられる。この定義を前提として以下、作中の数箇所当てはめて見てみたい。

I.2.2. 『ミドルマーチ』における代表者—①カソーボン氏の場合

カソーボン氏に見られる「ロマン主義的自己目的達成」について、作者エリオットは第10章で次のように述べている。

人それぞれの運命は当事者の目には重要なものとして映るのである。彼が周囲の者にもそれを重視してくれと求めたとき、我々がそれを不当な要求だと考えたとすれば、それは何よりもまず、我々に相手を容れる余地がないからであるに違いない。つまり、我々は、そのような人は神のお世話に任せるのが良いと思いつこんでいるのである。それどころか、そのような人が、我々からは殆んど尊敬されなくても、神からは最大の恩恵を授けられると期待するのは、まことに崇高な態度であるとさえ思われる。カソーボン氏もまた彼自身の世界の中心である。もし彼が他の人間は神の思し召しによって、彼のために創られていると考え、特にそれらの人々を『神話学全解』の著者に適合するか否かで評価する癖がある。(84-5)

エリオットは、カソーボン氏の性格をいかに設定したかを、この箇所で説明している。と同時に作者は、彼がロマン主義的自己目的達成の考え方を持つ登場人物として設定されていることを説明している。理由を以下に説明する。カソーボン氏は『神話学全解』という書物を書くことに生涯を費やしてきた。彼は、結婚も含めた全てを犠牲にしてこの書物の

完成を目指している。その一方でカソーボン氏は「他の人間は神の思し召しによって、彼のためにつくられている」と思っているが、これは彼の利己主義を表している。ロマン主義的自己目的の達成は、しばしば彼のように利己主義と結びつく。

I.2.3. 『ミドルマーチ』における代表者—②リドゲイトの場合

次にリドゲイトにもこのロマン主義的自己目的達成の考え方があることを示したい。彼のロマン主義的自己目的達成の考え方について、エリオットは第 18 章で次の様に述べている。

周囲の者は……リドゲイトという男は偉い者になって出世したいばかりに、バルストロウドに取り入っている、と言いつてるだろう。それがどうしたというのだ。彼[リドゲイト]自身としては、もし自分の個人的な立身出世だけが問題なら、銀行家を味方にしようと、敵に回そうと、そんな事は一向に構わないということを知っていた。(180) ([]内、筆者)

この様にリドゲイトは、作中で理想を持った人物として描かれている。このことについてエリオットは、第 15 章で彼の理想の内容について説明している。

彼[リドゲイト]の学問上の興味は、ほどなく職業への熱意となったので、彼には一層成功の望みがあった。彼は生計の道である医者という仕事に若々しい信念を持っていた……医術ほど立派な職業は無いという確信……医術に於いては、学問と技術の間に最も完全な交流があり、知的探求と社会福祉との間には最も直接的な協調があるかと思われた。リドゲイトのような性格にはこのような組み合わせが必要であった。彼は感動し易い性質で、専門的研究の持つ凡ての抽象論に対抗して、人間は血肉によって結ばれるものと感じていた。(145) ([]内、筆者)

上記の引用に示されているように、リドゲイトの理想の第一は「単なる患者ではなく」(145)

血の通った人間を医者として相手にすることであった。そして彼は理想の第二に「医術の改善」を掲げた。彼は当時の医術の世界に対しては現実を踏まえ、自らの立身出世だけを求めていることを十二分に自覚している。その場面を見てみたい。

金で買える勲章や、その他のくだらないものを見向きもしないで、たとえ世間は要求しなくとも、医師としての真の資格を身につけよう、と決意する機会が、ここにあったのだ。彼はパリへ遊学した時、やがて故国に帰ったら、全科にわたる開業医として地方の町に住み、自分一個の学問研究の為はもとよりのこと、医学全般の進歩のためにも、内科的知識と外科的知識とを不合理にも分離させることにはあくまでも反対しよう、と決心したのである。(145)

彼は「医者の仕事それ自体の価値によって名を揚げたい」(145) と思っていた。なぜならば、リドゲイトは時代的な理由から医師を志したからである。

それというのも、この時代が一種の暗黒時代であったことを忘れてはならない。由緒ある大学では、知識を希少化することによって知識の全体の純粋性を守り、報酬や任用については厳しい排他主義をとって、誤診や失策を除こうと努力したにも拘わらず、都市では無知無学の若者が昇進し、地方では更に多くの同じ輩が法的権利を得て、広い地域にわたって開業する時代であった。……なにしろ当時の開業医の仕事といえば、薬をふんだんに与えることだったのだから、(145-46)

彼はこうした一種の暗黒とも言える医学界の環境を踏まえた上で、次のように考えていた。ジョージ・エリオットによると次のような言葉で表されている。

彼[リドゲイト]は真実、自分の研究を達成するための手段、理想を実現するのに必要な道具を望んでいた。結局、彼としては、よい病院を手に入れるという目標を優先させなければならないのではないか？ (180) ([]内、筆者)

この為リドゲイトは「医術の改善」、ひいては「医薬分業」を彼の理想の第二に掲げ、彼が後に赴任した「ミドルマーチ」という「地方の町」(145) で実際に試してみることになる。

このようにリドゲイトは自分中心の世界を一番に考えつつも、個人の利益によって、それが決定されるのではない、と自身に言い聞かせている。つまり、『ミドルマーチ』における彼の目的に照らしてみても、リドゲイトの理想である、医薬分業を実現する為に「よい病院を手に入れる」という行為は、彼にとっては「ロマン主義的自己目的達成」の一環となっている。

「医術の改善」、ひいては「医薬分業」が理想（目的）で、その理想達成の為に1)町医者として地方に住み、全診療科を診ること、2)病院を手に入れること、の二つが手段で、「目的」と「手段」の関係になっている。このことをリドゲイトの理想の描写を通してエリオットはここに論理だて、説明しようとしている。上記二箇所の引用で、エリオットは熱意を以ってリドゲイトの理想を読者に伝えようとしている。リドゲイトの場合、この点で、ロマン主義的自己目的の達成が理想主義や利他主義と結合していると言える。

I.2.4. 『ミドルマーチ』における代表者—③ロザモンドの場合

ロザモンドにもこのロマン主義的自己目的達成の考え方がある。その考え方における最大の傾向は結婚相手としてリドゲイトを選ぶところにある。

しかしリドゲイトの最大の魅力は、彼が名門の出であることで、これが彼と、ミドルマーチにおける彼女の賞賛者たちとの大きな違いである。彼と結婚すれば、彼女の身分が高くなり、地上の天国ともいえる境涯に少しでも近づくことになるのだ。(166)

ロザモンドのこの利己的なロマン主義的自己目的を達成する過程を、作者ジョージ・エリオットは次のように明確に叙述している。

彼 [リドゲイト] のどの表情も、どの言葉も残らず心に記録して、あらかじめ考えていたロマンスの序の口の出来事であると評価したのである。この様な出来事も、ロマンスが発展し、クライマックスに達する様を予想すれば、値打ちが出てくるのである。(166) ([]内、筆者)

リドゲイトの「精神生活や、彼が世の中でどのような仕事に励むかということは、大して考える必要はなかった」(166)し、彼が、それを意図するつもりがなくて発した言葉や、作った表情がすべて無理やりロザモンドの描いた筋書きにこじつけられ、「身分を高くする」という利己的目的達成のために利用される。故に、ロザモンドは、このロマン主義的自己目的達成の考え方を利己主義と結びつけている為、リドゲイトとの結婚で充足されるのである。

I.2.5. 『ミドルマーチ』における代表者—④バルストロウドの場合

バルストロウドも、ロマン主義的自己目的達成の考え方を持っていて、聖書の言葉を厳格に守ることで、神の恩恵に与るとする考えについても、彼個人に特有の利己的な考えと結びつけて勝手に想像している。この様に彼はロマン主義の流行っていた当時に於いても、信仰に対する認識でも利己的な面（自己目的）がある。したがってこの項では、彼にもロマン主義的自己目的達成の考え方があるということを述べる。まず第71章で、彼は自らの犯した重大な悪事が露見しそうになる、その場面を見てみたい。

バルストロウドには明らかにラッフルズを除きたい動機があったし、また、彼は折りも折、この重大な時期にリドゲイトに援助を与えたのだ。しかもその援助がリドゲイトに必要であることを、彼はしばらく前から知っていたにちがいない。そればかりか、バルストロウドは破廉恥なことをしかねない男だ、というのが一般の世評だったし、また、どんな傲慢な人間でも、金に窮してくれば、容易に賄賂を取るものだから、リドゲイトだって例外ではない、と決めてかかるのが世間の常識だった。たとえその金が、バルストロウドの前身にまつわる秘密を洩らさない口止め料として渡されたに過ぎないとしても、そのこと自体がリドゲイトに忌まわしい影を投げかけた。(720)

リドゲイトの書いた死亡診断書の死因に間違いはないけれども、ラッフルズの死亡時期が早すぎたために、バルストロウドがラッフルズに毒を飲ませたのではないか、という疑問があった。バルストロウドはラッフルズを使ってリグ母子を食いものにしていた。ラッ

フルズはリッグの母を騙して夫婦になり、義理の息子になったリッグから母親の老後の面倒を見るため、という名目でお金を騙し取っていたからである。その企てが露見しそうになったのとリッグの死亡時期とが偶然重なった。その為、バルストロウドはミドルマーチの人々から、お金に窮している、というリドゲイトの弱みにつけ込んで彼にラッフルズの「死を促進するようなことを」(717) させたのではないか、という疑惑を持たれることになった。この時、ラッフルズはアルコール中毒であった。アルコール中毒の患者に対してはアヘンを数回のみ服用させて、酒気を断ち切るのが定石とされていた。それにも拘らず、バルストロウドは家政婦に、ラッフルズにブランデーを与える許可を出した。なぜなら、アルコールの禁断症状で苦しむラッフルズの様子を見かねた、医学の知識の無い家政婦が、一時でも苦痛を和らげてあげたいとの思いから、主人であるバルストロウドに、ラッフルズにブランデーを与えてやって欲しいと頼んできたからでもある。しかし本当の所彼は、これ幸い、この機に乗じて、ラッフルズの口を封じようと、決心をしたからである。バルストロウドが後になって、ラッフルズの様子を見に行ってみると、ラッフルズは規定量を超える量のアヘンと、ほとんど空になったブランデーの瓶を机上に置いて、深い眠りに落ちていた。そこでバルストロウドはアヘンの小瓶とブランデーの瓶を隠した。ラッフルズは二度と目を覚まさなかった。(709~11 参照) 屠殺横丁の居酒屋のおかみがバルストロウド本人から聞いたという言葉、ミドルマーチの人々は聞いて知っていたので、このような疑いを持ったのである。

「バルストロウドに言わせれば、『俺が腹の中で何を考えているか、もし髪の毛が知ったら、そんな髪の毛は根こそぎ引き抜いてやる。それほど俺は腹黒いのだ』という訳なのさ」(721)

バルストロウドは目的のためなら手段を選ばない人物として設定されていることが分かる。そのことはエリオットが同じ第71章の中で、次のように述べていることから分かる。

信仰上の便宜が〔旅行する目的で、バルストロウドが妻に言っていたチェルトナムというところに〕あることを彼〔バルストロウド〕は心から信じていたし、また、最近犯した罪を償う為にも、今後はもっと信心深い生活を送るつもりでいた——もっとも、その罪は仮定的なもの——「もし、」私がそのことで罪を犯したのであるならば」と

いうのであるから、その許しを乞う祈りも仮定の上に立ったものであった。

(724) ([]内、筆者)

このように、バルストロウドはエリオットによって、信仰面でも自分に都合よく物事を解釈する人物として描かれている。彼は、この「自分に都合よく物事を解釈する」点で、ロザモンド同様、利己的である。(I.3.4 を参照)彼は福音主義者と取られているが、彼のそれは見せかけの福音主義であり、利己的な自己目的の達成の考え方を持っている。

I.2.6. 『ミドルマーチ』における代表者——⑤ドロシアの場合

ドロシアはいくつかの理想を持っている。その幾つかある理想の内、生活についてエリオットは第3章で次の様に触れている。

信心深い財産家の令嬢たるものの理想の生活とは、村の慈善事業に加わって、貧しい牧師たちを援助し、旧約ではサラが、新約ではドルカスが人知れず経験したことを誌した書物、『聖書に現われた女性たち』を読み、部屋にこもって刺繍をする時にも魂のことを考える、ま、そういった生活である、と。勿論その背景には、ある男性と結婚するという目当てがなくてはならない。(28)

さらにドロシアは、最低限、キリスト教徒ではあるものの、あまり信仰に熱心でない夫を「彼のために祈り、やがてよい折をみて信仰の道を勧めることができる」(28)生活を理想としていた。そんな理想を持った彼女はなぜ、このロマン主義的自己目的達成の考え方を持っている、と言えるのか。

まず、彼女は相当な家柄で、かなりの財産のある令嬢である。相当な家柄、と言っても、養い親である伯父のブルック氏は、「年収 3,000 ポンドと推定される……財産」(9)程度の地代収入しかないのだが。しかしこれだけの地代収入を、ミドルマーチのこの地方の人々は、莫大な財産と見做している。そういう家の令嬢であるから、ドロシアは「相当な家柄で、かなりの財産のある令嬢」ということになるのである。

(そのような彼女は) 極端なことが好きなので、ある観念に従ってあくまでも生活を律しようとする。……病める労働者の看取りをしながら、突然、煉瓦の床に跪いて、まるで十二使徒の時代に生きているとでも思っているのか、熱烈な祈りを始める、そしてカトリック教徒のように、気まぐれに断食をしたり、夜の更けるまで神学上の古文書に読み耽ったりする。(9~10)

ドロシアは、このように戒律主義の考えを持っていたり、信仰に熱中したりしている点で、ピューリタンのロマン主義的自己目的達成の考え方の傾向がある。そこで、具体的にこの考え方の傾向が顕われている例の一つ見てみよう。例えば、いくつかの理想の中で、実際にドロシアは、福音主義という理想(自己目的)を達成するために、労働者のために住宅を与えようとしたことがあった。なぜなら、彼女は、福音主義と利他主義とが結びついた考え方を持っていたからである。

その日ドロシアは、予て村で始めていた幼児学校から早めに帰ってきていた。そして姉妹の寝室の間に挟まれた、小奇麗な居間の、いつも坐る椅子に坐って、ある建物の設計図の仕上げに余念がなかった(ドロシアはこの種の仕事が好きだった)。(11)

労働者用住宅建設の実現に向かって勤めから早く帰ったり、好きで仕事に取り組んだりしている。その建設のために、ジェイムズ・チェッタム卿の自分への好意を利用しようとしたこともあった。ジョージ・エリオットによってドロシアは、質素であることの理由を説明されている。彼女は、質素であることを理想の一つにしていたからだ。彼女は、「(家系に)クロムウェルに仕えた清教徒のれっきとした紳士もいて、この人はその後、国教会に転じた」(7) くらい、キリスト教の信仰面でも由緒ある家系の娘に育った。ドロシアは、ピューリタンとしての強い自覚を持つことで模範的かつ理想的な信仰者であるし、キリスト教徒ひいては英国国教会に属するものとしての行いに照らしてみたとしても彼女は正しい行いをしている、と言える。しかし、彼女の持つ倫理観は「独善的」とも言える。ドロシアの思想と行動について、エリオットは序曲の章で彼女を聖テレサになぞらえている。

彼女ら[数多のテレサたち]はその思想と行動とを立派に一致させようと努めた。しかしその努力も、結局、俗人の目には、混沌として形をなさぬ不徹底なものとし映ら

なかった。というのも、これら後世に生まれたテレサたちには、その熱烈な求道心に知識の役割を果たしてくれる、首尾一貫した社会的信念や社会的秩序という援助が欠けていたからである。彼らの情熱は漠然とした理想と、女性なら誰でもが持つ憧れとの間をさまよひ、前者は非常識として悪し様に言われ、後者は墮として非難された。

彼女たちがこのように、間違いだらけの、へまな生き方をするのは、造物主が不都合にも、女性の本性を、良ければ良い、悪ければ悪い、とはっきり決めて形づくらなかったことに起因する、と見る向きもある。(3-4) ([]内、筆者)

女性たちは造物主によって、その本質を「間違いだらけの、へまな生き方をする」ように創られているとされている。ドロシアはキリスト教に縁の深い家系に生まれ育ったが故に彼女が、その思想と行動が極端であるのも、造物主のせいであるとエリオットが考えている節がある。なぜならキリスト教の旧約聖書『創世記』には、最初の人間・アダムは神によって土の塵でつくられ、命の息を吹き入れられることで生命を得たとも、されている。(『旧約聖書』「創世記」2・7) イブはアダムのあばら骨から作られて最初の女性となった、とされているからである。(『旧約聖書』「創世記」2・22) しかし断定してしまつては他からの批判も予測される為、エリオットは「見る向きもある」などと、わざわざ婉曲表現を用いるのだと見ることもできる。ドロシアは「首尾一貫した社会的信念や社会的秩序という援助」を夫・カソーボンに求めて裏切られた。カソーボン氏は牧師でもあったからドロシアは知的求道心を更に高めたのである。それ故次に、ドロシアの思想と行動を「ロマン主義的自己目的達成の考え方」の面から検証していく。

ドロシアは敬虔なピューリタンの家系に生まれ、聖職者として夫の神学研究の手助けをしたいという、高尚な理想をカソーボンとの結婚に求めた。彼女は質素たらんとするピューリタンの理想と装飾品を身につけたいという憧れも、抱いている。彼女はその二つを一致させようとする情熱と理想と憧れとの間に揺れている。ドロシアはそのような普通の女性として、この場面に登場する。

シーリアはどこまでも言い張った。「お姉さまだって十字架ならおつけになっていいはずよ」

「とんでもないことだわ、十字架を飾りにするなんて、考えられないことだわ。」ドロシアはかすかに身を震わせた。(12)

この場面で言うドロシアの母の形見の十字架は「五個のブリリアント形のダイヤモンドをちりばめた真珠」製（12）である。ダイヤモンドを、しかも五個もちりばめた真珠製なら派手に映るであろう。派手な装飾品を身につけたいとドロシアは思った。しかし、一方で、彼女は心の中で、以下の様な矛盾を抱えているのである。

人類の運命をキリスト教的観点から眺めるなら、女が流行にあくせくすることなどは、気違い沙汰としか思われないのである。一方では永遠に救われるか否かにかかわる信仰生活の問題に心を労しながら、もう一方ではレース飾りや不自然に張り出した着物の襷に憂身をやつす、そうした矛盾を彼女は許せなかった。（8）

ドロシアは、女性であれば装飾品を身につけたいという憧れ、つまり女性個人の感情とピューリタニズム（ピューリタンの思想及び信仰と潔癖主義、厳正主義との両方の意）という理想との妥協を図らなければならない。ドロシアは質素で清貧な理想と、優雅で美しく飾り立てるといふ、相反する二つの理想を実際に持っている。このように人間は、清貧に生きることが理想とされるけれども、一方で、優雅な美しい理想もある。それがヒューマニティである。そしてさらに「ロマン主義」とは、個人の感情を尊重し、神秘的体験や無限なものへの憧れを表すものであることから、『ミドルマーチ』における「ロマン主義的自己目的達成」の定義と合致していることを証明したい。

ドロシアは派手な装飾品を身につけたいと思った。言い換えれば彼女は派手な装飾品を身につけることを「自己目的」化したということである。目的達成の為に、彼女は自身の「主義」（ピューリタンの理想）に合致させなければならない。彼女は宝石を身につけることが神秘的体験への憧れであり、ロマン主義的な自らの行為を正当化しようとする。ドロシアは聖書に書かれていることに忠実であるなら、もう一つの理想である福音主義に合致すると考えている。そこでドロシアは宝石が霊的表象としてヨハネ黙示録（21:18-21）にも示されていることを根拠にして、妹・シーリアに次のように説明するのである。

ドロシアは言った。「色が匂いのように、こんなに深く人の心に染み透るとは、本当に不思議ねえ。だから、ヨハネ黙示録（21:18-21）には、宝石が霊的な表象として、誌されているのね。まるで、天国の断片のようだわ。このエメラルドの指環、他のどれよりも美しいじゃないの」（13）

前頁からの引用部分に書かれている様な理由により、ドロシアは指環と腕環を身につけるが、聖書に記述のあった色のついた宝石であるエメラルドの指環と腕環以外の装身具は箱も含めて全部持ち去るようにシーリアに言う。結果として、彼女はシーリアの気分を害した。なぜならば、彼女は質素たらんとするピューリタンの理想と、「汝の隣人を愛せよ」と教える福音主義の理想との両方に反した言動をしてしまったからである。このことに気づいたドロシアは労働者用の住宅設計図を書いているところへ妹を呼び、妹の腕に頬ずりをすることで謝罪をした。ドロシアは、妹という一番身近な「家族」という立場の人間に非難されたり、理解されないままで装飾品を身につけたりするようなことをすれば、ピューリタニズムや福音主義という彼女の主義に反したことになるからである。ここでのドロシアは、「汝の隣人を愛せよ」という聖書の教えを守るという「福音主義」の理想実現の為に生きるという、彼女の「主義」に合致させた上で、派手な装飾を身に着けたいという、「自己目的」を達成したことになるのである。

このことについてエリオットは、既述の引用、序曲の章(3)で、「その思想と行動とを立派に一致させようと努めた」と述べている。言い換えれば、ドロシアは、福音主義や労働者用の住宅設計という利他主義、質素たらんとする理想(目的)と、装飾品を身につけるという行動(目的でもある)とを「立派に一致させようと努めた」ことになる。それ故彼女は、理想主義や利他主義と結合したロマン主義的自己目的達成の考え方を持っていると言える。

この場面でドロシアは、労働者用の住宅設計という利他主義と結びついた福音主義や質素たらんとする理想(目的)と、装飾品を身につけたい、という二つの相反する理想を、霊的な意味を持つものとして宝石が認められている聖書の一節で以って、両方満たすことが出来た。この物語のように、キリスト教を信仰している女性たちは、多くの場合、利他主義と結びついた福音主義的又は、ピューリタンの生活が理想だと分かっているながら、装飾品を身につけたいという見栄も捨て切れないでいる。それもまた、「ヒューマニティ」である。故にウィルがユダヤ人の泥棒質屋の孫だと揶揄された時、ドロシアは彼女なりの「ヒューマニティ」の一面を表す。彼女の人を信じ易く情熱的な性格を、純粹に人を「愛すること(即ち、理想主義)から形成される、とエリオットは述べている。(771~2 参照)ドロシアは、純粹に人を「愛する」という理想を、ウィルと結婚することによって達成する。そして彼女は、再婚すれば遺産を遣らないとする亡き夫・カソーボンの遺言による制約(当時のヴィクトリア朝的女性観に基づく慣習)を無視することになる。それだけに、ウィル

との結婚によってドロシアは、理想主義と結合した利己的なロマン主義的自己目的を達成できる。

I.2.7. 『ミドルマーチ』における代表者——⑥ウィル・ラディスローの場合

ウィル・ラディスローは、純粋な気持ちで社会の役に立つことがしたい、ということをして「目的」とした。エリオットは「終曲」と題した最終章で次のように記述している。

ウィルは熱心な社会運動家になった。当時は今日[『ミドルマーチ』が書かれた 19 世紀後半]の様に改革を始めても多くの妨害に遭うということが無く、すぐにも良い結果が期待される若々しい希望に満ちた時代だったので、ウィルは働きがいがあり、遂に或る選挙区が費用を負担して彼を議会に送り込んだ。(836) ([]内、筆者)

カソーボン氏と精神的にも完全に別れられたドロシアは、今度はウィルの妻となって彼を支えた。以上のことから、ウィルは社会の役に立ちたいという「目的」を、社会運動家として議員になるという「手段」によって達成した。社会運動家になる、というウィルは改革者であり、社会の役に立つという理想を追求し、その実現を目指している点で、「ロマン主義的」考え方を持っている。ミドルマーチからでなく、他の選挙区から立候補して当選したという事実から、彼は、ミドルマーチという町（共同体）に受け入れて貰えなかったのである。第 38 章で選挙に出ようとしていたブルック氏に出馬を断念させようと話し合った人達の中で、教区長やジェイムズ・チェッタム卿、カドウォラダー夫人らは、ウィルを排除しようという考えを口にしている。

「しかし、このラディスロー君ですがね——また煩わしい問題があるのです」とジェイムズ卿が言った。「ブルックさんのお客でもあるし、カソーボンさんの身内でもあるので、それにこの土地には、ほんのちょっと立寄っただけと考えましたから、館へも二、三度、食事に来てもらいました。お二人[教区長、カドウォラダー夫人]もお会いになりましたね。ところが今ミドルマーチで、あの男が『パイオニア』の編集

者だと言わない人はありません。異人文士だの、外国の回し者だの何だのと、噂が飛んでいるのです」

「カソーボンに厭だろかね」と教区長が言った。

「ラディスロー君には幾分外国人の血が混じっているのです」と、ジェイムズ卿が答えた。

「過激な意見に走って、ブルックさんを煽ったりしないといいのですが」

「そう、そう、危険な青二才ですよ、あのラディスローさんというのは」とカドウォラダー夫人が言った。(379) ([]内、筆者)

しかし、ドロシアの夫になったカソーボン氏との血縁関係から育ての父であるブルック氏の事業を手伝おうとしているウィルには、非道い様と感ずるのではないだろうか。イギリス人ではあるが、純血ではない人は客人としてミドルマーチにいるならよい、というのでは、彼らはファシズムに近い考え方を持っている様に見られても仕方がない。しかし、職業で言えばイギリス国教会の役職者、昔からの政治家である貴族又は土着の農民である彼ら3人は、共通した利己的な「農村共同体の考え方」に照らして、純血なイギリス人でないのに社会運動家になろうとする「改革」側のウィルを、受け入れ難い人物だと見做している。よってウィルは、ミドルマーチからでなく、他の選挙区から立候補して当選したというのも「目的」達成の為の「手段」として、位置づけている。

社会運動家になろうとブルック氏の事業を手伝おうとするところから始めて、ミドルマーチからでなく、他の選挙区から立候補して議会の議員に当選したウィルは、その選択と行動に於いて、十分に理想主義と結びついたロマン主義的自己目的達成の考え方を持っている。

I.3. 福音主義

I.3.1. 『ミドルマーチ』における「福音主義」の定義

一般的に「福音主義」とは、聖書に証（あかし）されている救い主イエス・キリストの喜ばしい訪れ（福音）を重んじる立場とされ、1) 伝統、秘蹟などを重視する、ローマ・カトリックに対して、「信仰のみ」「聖書のみ」を主張するプロテスタント、2) 再洗礼派やカルバン派などに対して、特にドイツのルター派、3) 聖書解釈において逐語的に受け入れる根本主義、4) イギリス国教会で、高教会に対する低教会、5) 18世紀の福音信仰覚醒運動の流れをひくメソジスト派がそれぞれ福音派もしくは福音主義に立つ⁽¹⁾、とされている。「新約」とは神がイエス・キリストを持って新たに人類に与えた契約の意である。福音主義者は、キリストの伝えた福音にのみ救済の根拠がある、とする。以上のことを踏まえると、彼ら福音主義者の言う「聖書」とは新約聖書ということになる。『ミドルマーチ』においては、新約聖書に書かれていることに忠実に従って生きようとすることによって神の恩恵に与る、とする 4) に挙げたイギリス国教会低教会派の考え方の立場⁽²⁾を主に採って描かれていることを示したい。

I.3.2. ジョージ・エリオットとその思想

世の中には、神の存在を信じる者、信じない者、キリスト教の必要性を認める者と、認めない者とが共存する。現在の混沌とした世の中と同様に、1930年代、選挙法改正運動で混乱していたイギリスで、ジョージ・エリオットは、キリスト教、とりわけ神の言葉が特に重要な位置を占める福音主義について、どのようなことを考えながら生きていたのだろうか。そのことに関して例えば、福音主義はこの世界に於いて、神の存在が大前提となる。当時のイギリス社会において、「この世界をわれわれはこの上なく貴重な自己を養ってくれる乳房だと考える」（第21章）とエリオットは分析している。しかし、彼女は、神の存在についての考え方について、いろいろな変遷を経て来ている。1841年11月、彼女が

マライア・ルイス宛の手紙を書いた頃、当時ドイツを中心に起こりつつあった「高等批評」の影響を受けた。「高等批評」では、キリストの存在を神話の世界の中にあるそれとしてではなく、過去の歴史の一記録とみなす。この考え方により、エリオットは教会の礼拝式に出ることを拒絶し、父親と一時的に不和となる。

このときのことを B. J. パリスは次のように述べている。「彼女（ジョージ・エリオット）は生命というものが神なしで意味を持つかどうかを自らに問う必要があったから、彼女がキリスト教の考え方と決別したときではなく、汎神論と決別したときが、思想の面で本当の危機であった」。さらにエリオットはキリスト教会での礼拝を巡る父親との不和が収まった後も、「まだ、キリスト教的世界観に支えられて、生きていた」⁽³⁾ としている。もはや彼女は個人の不死を信じなくなっていた。個人は死ぬが、全体としての人類は生き延びる。そこに彼女は人間の精神的な永生に代わるものを見出し人類の歴史に寄与することによって、ある程度個人的な死を克服することができる。これも一つの宗教であるとするならば、同じ宗教であるキリスト教（その中心的な観念とそれを取り巻く多くのシンボルと儀式）も受け入れることができる⁽⁴⁾ とフランスの実証主義哲学者コントは考えたし、エリオットの考えもこれに近かった。エリオットはキリスト教を今までとは別の角度から彼女なりに捉え直し、再び信じてみようとしてみたのである。そして「エリオットによれば、神は人の心に内在する汎神論を引き出す。故に神が人間の心に必要だと、彼女は鋭く感じ取ったのである。人間は、生命をこの世で最も高い利益としている。人間は生きることの目的として、神を知っていることと、神を愛することにしてしている。そして、生きることの目的と調和させて神の意志というものを位置づけた。この世に存在するすべてのものは、神からその能力と生きる目的を与えられる。ジョージ・エリオットは、宇宙についての宗教的（religious）方向感覚を持っていたから、汎神論の考え方によって、生命というものが神なしで意味を持つかどうかを自らに問わねばならないという必要性を満足させることが出来た」⁽⁵⁾ とパリスは述べている。以下の各項で小説『ミドルマーチ』内に於ける登場人物、それぞれの福音主義について見ていきたい。

I.3.3. それぞれの福音主義——①ドロシアとカソーボンの場合

先ずドロシアについて取り上げる。彼女はカソーボンと夫婦になった後で、間違った結

婚をしたという認識と後悔がありながら、夫・カソーボンを見捨てられない。彼女の間違いの理由をより良く理解する為に、リドゲイトとロザモンド、二人の夫婦の在り様と比較する必要がある。結婚の理由がドロシア、リドゲイト共に「聖書にある福音書の教義精神に則って信仰による救いを求めるという、福音主義に縛られた点にある。しかし二人の結末が、ドロシアが違う相手と再婚するものの、幸福になったのに対し、リドゲイトは過労で早世する悲劇的最後を迎えるという様に、両者対照的に描かれているからである。ドロシア、リドゲイトそれぞれの結婚を、出会い、結婚生活（困難に直面した時の対応）、決断という3つの区切りの場面で比較する。各場面でのドロシア、リドゲイトそれぞれの判断（対応）の差に二人の運命を分けた理由が存在すると仮定するからである。

先ず、リドゲイトの場合の分析から始める。出会いの場面で彼は、ロザモンドをどのように評価しているのか。以下にその例を挙げてみたい。

もし恋をするなら、ヴィンシー家の令嬢のような女性を相手にするのが安全であろう。彼女には女性として望ましい知性がある。洗練されていて、趣味がよく、男には素直で、要するに生活のあらゆる優雅な趣味となるのに役立つ知性が、ひと目見ただけでこのことがうなずける惚々する肉体に包まれている。リドゲイトは、もし自分が結婚するなら、その妻は、このような女性らしい輝きをもち、花と音楽に通じる女らしさを備え、もともと清らかで上品なよろこびのためにのみ造られているからには、貞淑な美をもつ女性であるにちがいないと思った。(164)

リドゲイトはロザモンドが浪費癖のある女性と知らずに、彼女を妻として選ぶことを決める。彼は、後にこの結婚が誤りであったと気づく。しかしこの時点で、リドゲイトはロザモンドを「男には素直」な女性だと判断する。そして第64章で二人は言い争いをする。リドゲイトは借金問題を妻に切り出す。すると彼は逆にロザモンドからミドルマーチを出てやり直そうと言われる。

[リドゲイト]「ね、あの時ぼくは説明したじゃないか。あれは担保にすぎなかったんだ。担保を出すということは借金があるということなのだ。その借金をこれから二、三ヶ月以内に払わねばならない、さもないと、家具は売られてしまうのだ。もしプリムデイル君がこの家と家具の大部分をひきとってくれるなら、その金であの借金や、

まだほかにもある借りを返すことができるのだ、そして、ぼくらには不相応な金のかかる家から出てゆけるのだ。そうなれば、ぼくらとしては、もっと小さな家を借りられるかもしれないのだ。たしかトランブル君の持家で、家賃が年に三十ポンドという手ごろの家がある。だのに、われわれが住んでいるこの家は九十ポンドもするのだ」
(650-1) ([]内、筆者)

リドゲイトは借金のために担保を出さなければならないと妻、ロザモンドに説明している。彼は、ロザモンドの考える「医者という身分」にふさわしい生活をしようと、家賃が年に九十ポンドする家に住み、召使を一人以上雇い、そのほかの女中を二人置き、往診用の馬も一頭以上飼う、等の出費をした事によって借金を作ったのである。

「もちろんお望みなら、ほかの女中たち二人にも暇をお出しなさいな」とロザモンドは言った。「ですけど、あたしたちがみすぼらしい生活をしたら、あなたのご身分にさわるのではないかしら。患者さんの数もへることでしょうし」(648)

ロザモンドは彼女のプライドにかけて医者の子の生活に固執する。その上で、「訓戒するような低い声ではっきりと」(649) 言う場面がある。その個所を以下に挙げる。

「ねえ、あなた、あなただつて繁昌なさったらよろしいじゃありませんか。ピーコックさんは繁昌してらしたわ。あなたは患者さんを怒らせないように、もっと注意なさらなければいけませんわ。そして、ほかのお医者さんのようにお薬をお出しになったらいいのよ。たしかにあなたは最初は好調でしたわ。そしていいお得意さまが何軒かできましたわ。風変りなことをしてよくゆくはずはありません。みんなからすかれるようなことを考えるべきですわ」(649)

ロザモンドは、夫、リドゲイトの第二の理想である「医術の改善」、ひいては「医薬分業」を実行しようとするれば、患者を怒らせ、何軒かあったお得意様や収入が減るであろうことを予測している。上記の引用で、「あなただつて繁昌なさったらよろしいじゃありませんか」と話す時の口調には、彼女にとって「信じるのは金だけ」と言わんばかりの態度が見える。ロザモンドは夫・リドゲイトの理想を理解していないだけでなく、さらに次のように言う。

「しようと思えばほかにたくさん方法があったんじゃないかしら。ねえ、何もかもを売りに出して、ミドルマーチからすっかり離れてしましましょう」(651)

これに対するリドゲイトの言葉に反論して、ロザモンドは、「わたくしたちがそんな境遇になるとすれば、それは、あなた、みんなあなたのせいよ」(651)と彼を責める。二人の言い争いは進み、ロザモンドはリドゲイトに対し、重ねてリドゲイトの身分、「信用」が傷つくと言うのである。そして、とうとう彼女はミドルマーチを出てやり直そうと言い出す。

「プリムデイルさんたちが家を借りておしまいになったとわかったので、あたし、トランブルさんをお訪ねして、あの方たちにわたくしたちの家のことを言わないように、って頼みましたのよ。そして、それといっしょに、この用件はもうこれでうち切るように、って言いましたの。あなたがこの家と家具を手放したいと思っていらっしゃることが世間に知れたら、そしてあたしはそんなことをするのに大反対だってことが世間に知れたら、あなたの信用がひどく傷つくことになるのじゃなくって？それだけで十分な理由だと思いますわ」(658)

「わたくしたちが結婚した頃、みんなはあなたの社会的地位が高いように思っていましたわ。あなたが家具を売って、ブライド通りの、檻のように狭い部屋の家へ引越そうとおっしゃるだろうなんて、あの時、あたし、想像することができたでしょうか？もし、わたしたちがそんな風に暮らさなければならぬのなら、いっそミドルマーチを去りましょうよ」(659-60)

この部分を読むと、当時、ミドルマーチの町の人「みんな」は、リドゲイトのことを「社会的地位が高いように思って」いたとある。しかし、ロザモンドは自らの浪費癖によって町の「みんな」を、金がふんだんにあるかのように錯角させたのである。それにも拘らず、ロザモンドは彼女のプライドにかけて医者へのステータスに固執する。それはなぜか。

それはつまり、彼が「医者である」ということであり、それによって入ってくるであろう「お金」と「信用」がついて来るからである。ロザモンドは、リドゲイトに関わるこの様な観念に最後まで固執したということである。

ロザモンド同様、ドロシアも又、彼女自身のプライド故に固定観念に最後まで縛られる。

ドロシアは、婚約したことを披露するパーティーの直前にカソーボン氏から、新婚旅行先に予定しているローマでの研究用資料収集に時間を有効に使う為に、彼女に連れがなければ、彼女を一人にしないで済むのだ、と言われる。この言葉にドロシアは激しく反発する。

「あなたのお時間が大切なことが、わたくしにはわからない、とお考えになるのですたら——あなたがお時間を出来るだけ有効にお使いになるのをお妨げするようなことをわたくしは平気です、などとお考えになるのですたら、ずいぶんわたくしを誤解していらっしゃるのですわ」(87)

「このことは、もう、これっきり、おっしゃらないで下さいまし」とドロシアは横柄とも聞こえる口調で言った。しかし、そのすぐ後、自分の考えが間違っているのではないかと気になって、彼[カソーボン氏]の方へ振り向いて、その手に手を重ね語調を、変えて付け加えた。(87) ([]内、筆者)

そしてドロシアは次のように自分を納得させようとしている。

「確かに、私は考え方が不思議なほど利己的で、気が弱くなっているんだわ」と彼女はひとり呟いた。

「自分よりずっと優れた人を夫に持つからには、妻にとって夫はなくてはならぬ人であっても、夫は妻をそれほどには思っていないことを、心得ていなければならないのだわ」(88)

ドロシアは「カソーボン氏の言う言葉はどこまでも正しいと納得がいて」、「平静をとり戻した」(88)。このことについて、ある批評家によると、ドロシアはカソーボン氏が彼女の人生にとっての「しみ」になっていると言われているという。まさにその通りである。

ドロシアは結婚した後の第 30 章で、カソーボン氏が研究による疲労で倒れる、という事態に直面する。ドロシアは夫の研究を支えること、即ち「相手のために尽くす」という聖書の教えに則った福音主義的考えでもある、「献身」の精神に殉ずることを尊しとして、結婚したのだから、まさに結婚継続の危機である。普通なら妻は、研究継続より夫の命を大事に思うだろう。しかしこうした事態に直面しても尚、ドロシアは医者に（ここで訪れ

たのはリドゲイトなのだが) 夫の研究や執筆が続けられるのかどうかを気にし、その為に自分にできることは何かを尋ねている。ドロシアは、カソーボン氏が研究に没頭してかまわって貰えないので、次のように彼に言うのである。

犯罪をひきおこしかねないほどのエネルギーも、いつもの気高い心がたちかえってくると、従順を決意するに至るために必要なエネルギーほどは大きくない。(427)

ドロシアは、夫、カソーボンが自分に構ってくれないことよりも、むしろ今までのようなペースでは研究が出来なくなることを告げた時の彼の落胆振りを思い遣ろうと、彼女自身に言い聞かせる。彼女は相手の悲しみをいたわる心になれるよう、「幾たびも声なき祈りを繰り返さねばならなかった。」(427) 自分自身にそう言い聞かせるために、彼女は恣意的な祈りを神に捧げる。彼女は自発的、又は自然に心の奥底から湧き上がってきた祈りをしていない、と作者・エリオットによって解説されている。

こうしてロザモンドの固執する様と比較してみると、ドロシアにはロザモンドと同様、プライドにかけて固定観念に最後まで固執するという面のあることがよりはっきりする。このようなドロシアの姿について、作者であるエリオットは次のようにも解説している。まず、第10章でのエリオットの解説を例に挙げる。

カソーボン氏が何もかも教えて下さるのだ。こう考えて彼女は思想のより高い奥義を伝授されることを期待すると同時に、結婚を待ちうけながら、漠然と考えているこの二つのものを混同していたのであった。(86)

さらにエリオットは以下のように解説を続ける。

フレシットやティプトン近在の人に言わせれば、なるほど彼女は利口な女であった。しかし、より明確な語彙をもつ人は、利口とは、人格と切り離して、単にものごとを知り行う能力であると解しているのだから、そういう人たちから見ればこの言葉は正確にドロシアの真相を伝えることにはならないのだ。彼女の思想や衝動は同情に源を発した奔流となって流れるのが常であるが、彼女の知識欲もすべてこの流れの外には出なかった。(86)

前頁からの引用箇所でもロシアは、エリオットにより「彼女の行動を養う血と肉から切り離した知識を身につけようとは思わなかった。」(86)と説明されている。「行動を養う血と肉」の「血と肉」とは、すなわち「葡萄酒とパン」のことである。ロシアはキリストの教えに基づいて知識を得たい、福音主義を貫こうとしていると解釈できる。彼女は「良心を強制するある権威者の命令に従って」(86)ではなく、福音主義に基づいてカソーボン氏に「尊厳」を認めているのである。そのことを示しているのが、以下に挙げる引用箇所である。

合理的であると同時に熱烈でもあるような行動を以って、彼女の生活を満たしてくれる何ものかを、彼女は憧れ求めた。しかも、自分を導く幻想や、霊的指導者の時代は過ぎ去ってしまい、祈りは憧れを強めるはするものの、教えを増してはくれない現在 [この『ミドルマーチ』が書かれた19世紀] にあっては、知識の外に自分を照らしてくれる燈火があるだろうか？ その燈火の唯一の油を切らないのは、学者のみである。そして、カソーボン氏に優る学者があるだろうか。(86-7)

ロシアはこの場面で、お金でなく福音主義が「信用」に足るものであることを言わんとしているのであろう。では、なぜお金でなく福音主義が「信用」であるのか。その理由をエリオットが、第21章の終わりで述べている。

人間はみな道徳的に愚鈍に生まれついていて、この世界はわれわれのこの上なく貴重な自己を養ってくれる乳房だと考える。ロシアはそのような愚かさから早くも抜けだし始めていたが、それでも、どのようにしたら夫に献身的に仕えることができるか、彼の力と知恵とを頼りに、どれほどまでに自分が賢く、強い人間になれるか、それを想像することはできても、夫も自分と同じように自己という中心があって、そこから出る光と陰は常に自分のものとは違っているということを、単なる反省ではなく感情——ちょうど出ごたえのある物体のように、直観にまで磨きあげられた観念——の明晰さで感じとるのは容易なことではなかった。(211)

上記の引用によると、「自己という中心」は、夫・カソーボンの言うところの自己とは異なると述べられている。しかし、ロシアの「自己という中心」がカソーボンのとは違って

いたとしても、そのことに関係なく、「隣人を愛せよ」という教えに従って、彼女は、夫を愛そうとしている。ドロシアはどこまでも聖書に書かれていることに忠実であり、物事を福音主義的に考え、行動に移していると言える。

しかし同じ福音主義者でも、カソーボンの福音主義は利己的な福音主義である為、利他的なドロシアとの意識疎通を難しくしている。同じ結婚でも、ロザモンドとドロシアの場合の違いは何か。それは、妻が夫に対し福音主義による「尊厳」を認めていない為である。故にロザモンドの論理は破綻し、ドロシアはまだ持ちこたえられていることになる。ちなみに夫・カソーボンの言うところの自己とはどういうものなのか。エリオットは『ミドルマーチ』第42章のエピグラフでカソーボンの性格について述べている。

慈悲に縛られていなかったならば、こういう人物にはずいぶん軽蔑を感じるでしょうに（『ヘンリー8世』第3幕第2場）（412）

エリオットは性格上の理由で、カソーボン氏を、軽蔑すべき人物だろうが、博愛精神でもって受け入れなければいけない、と言いたいのである。

では軽蔑すべきであると同時に博愛すべき孤高な人間でもあるカソーボン氏の自己というものが、具体的にどのようなものか。これについてエリオットが第10章で述べている。

人それぞれの運命は当事者の目には重要なものとして映るのである。・・・われわれからは殆んど尊敬されなくても、神からは最大の恩恵を授けられると期待するのは、まことに崇高な態度であるとさえ思われる。カソーボン氏もまた彼自身の世界の中心である。（中略）他の人間は神の思し召しによって、彼のためにつくられていると考え、特にそれらの人々を『神話学全解』の著者に適合するか否かで評価する癖がある（後略）。（85）

さらに第5章でカソーボン氏は、ドロシアへ送ったプロポーズの手紙の中で自分の考え方を述べている。

ブルック嬢よ、・・・ご厚情に甘えて、敢えてお尋ねいたす次第であります。あなたの夫として、かつまた、御身の仕合せを守る地上の守護者として、ご承認いただける

ならば、これ神の恩寵の最大なるものと、見做して憚りませぬ。(44)

これら二つの箇所のうち、第 10 章からの引用部分では、自分の運命が「当事者」(44) 以外には重要とは映らない、という一般的な婉曲的言い回しで、彼が利己主義者であることをエリオットは、仄めかしている。第 5 章からの引用部分では、第一に、人から尊敬されなくても神の恩恵には最大限頼っている、としていることは、カソーボン氏の考え方が福音主義的であることを示している。第二に、彼は結婚の承諾を相手から得られることを「神からの恩寵」(44) と捉えているのがわかる。このことからカソーボン氏は、自分の願いが叶えられるかどうかを「神の恩寵」として期待、即ち、キリストによる救いに頼ろうとしていることになる。よって彼は利己的な福音主義者だ、と言える。

そして、カソーボン氏は、自分の願いが叶うことが「神の恩寵の最大なるものと、見做して」はばからない、とまで書いている。彼は相当、利己的な福音主義者だと言える。

以上のことからカソーボン氏の場合、ロマン主義の特徴⁽⁶⁾ である、合理主義に反抗し感情、個性、自由などを尊重し、自然との一体感や神秘的な体験や無限なものへの憧れを表現し、自分の目的が成就されるために神の存在を幻想するといった「ロマン主義的自己目的達成」の色が濃い、利己的な福音主義であると言えるのではないか。

I.3.4. それぞれの福音主義——②リドゲイトの場合

リドゲイトは、彼にとって初めて自分の気持ちを理解してくれる人に出会えたことで、自知の瞬間を迎えた。その人とは勿論、ドロシアである。リドゲイトはドロシアと同じ心持ちになれた。リドゲイトは、その気持ちを第 76 章で次のように表現している。

奥様 [ドロシア] にはお話しない内に信じて頂けたのですし、ぼく [リドゲイト] は自分の正直の押し売りをしている、とはご覧にならないでしょうから、そういう方にお話しするのは1つの慰めになります。(762-3) ([]内、筆者)

精神的に追い詰められたリドゲイトはドロシアのリドゲイトに対する共感によって(悲劇的状況から)救われたのである。彼は、ドロシアの人間としてこれ以上はない真心を以て

救われた。一つの苦しみを乗り越えたすがすがしさと「人間性」に於いて一段と成長したドロシアとリドゲイトは対照的である。彼がドロシアに正直に打ち明ける行為は、キリスト教でいうところの「告白」する姿を思い浮かべさせられる。よって話している内に、リドゲイトはドロシアが教会の牧師と重なって思えてきた。心の安定という「救われた」ことを感じたリドゲイトは彼女を通して「キリストによる救い」というものを見た思いであったことだろう。それによってリドゲイトの悲劇的姿をエリオットは見事に描き切っている。そして悲劇的といいつつもリドゲイトを生かしているところが通常の悲劇的描写とは異なっている。

リドゲイトは医者立場で実際に患者を診察し、医療行為を施し、将来の容態を予測する立場である。が、しかし彼は他の医者と同様に、「キリストによる救い」を与えることが出来るかのような錯覚に陥る。

第30章で、カソーボン氏が研究による疲労で倒れ、彼は診察に赴く。

彼女〔ドロシア〕にこれから先の夫の容態について真実を話すのは、医者としてなすべきことをするにすぎない、とリドゲイトは自分に言いかけながらも、また一方では、彼女と内々で話し合うのは、興味のあることにちがいないと考えた。医者は心理的な観察を好むものだが、そういう観察をしている際には、えてして重大な予言をしようという誘惑にかられがちである。(287) ([]内、筆者)

エリオットの解説によると、リドゲイトは「預言者」の心境になっている。それでいて、彼は「こと生死となると、そんな予言はめったに当たるものではない。」(287) とも言い、「キリストによる救い」を期待していることが匂わされている。これらのことを踏まえれば、リドゲイトはカソーボンの容態について、医者は預言者ではないから、彼の容態の先を見通せないことを認めている。なぜならば彼は頭の中に、神が人の生死を司る、その神の子であるキリストの言葉を伝えることにより、救いをもたらしてくれる者が預言者だというキリスト教信仰者の思考があるからである。そしてカソーボン氏が研究や執筆が続けられるのかどうかを気にしたドロシアに、その為に彼女にできることは何かを尋ねられ、彼はこう答えている。

「そのような後悔（知らなかったとはいえ、夫が倒れるような事態を引き起こしたと

「のように、ご夫人が自分を責めるような思いをすること）をできる限り未然に防ぐのが、医者としても役目かと思えます。しかしご主人の病気は、その結果について意見を申しあげるのは、まことにむづかしい種類のものであることを、お気づき願いたいのです。」(288)

ここにも人の生死のことは「神のみぞ知る」といった考えが表現されている。それはどこかで「キリストによる救い」を期待している訳であり、リドゲイトは、十分に福音主義的考えを持った人物として描かれている。彼の言う「神のみぞ知る」という意味での「予測できない」と、現代で一般的な医者の言う「予測できない」、又は「予測しない」こととは根本的に意味合いの異なるものであることを、つけ加えておきたい。

I.3.5. それぞれの福音主義——③バルストロウドの場合

信仰の蔭にかくれる二重人格の銀行家であるバルストロウドの考える福音主義については、第41章にその例を見ることができる。彼は福音主義者のふりをして、専門学校で教育を受けたという学歴を鼻にかけるラッフルズを使ってリグ母子を食いものにする、典型的な二重人格者である。ラッフルズは表面上、リグの商売を助けるふりをして彼に金銭を出させ、母親を騙して結婚し、義理の家族になった。リグは義理の父親になったラッフルズに向かって、次のように言う。

「あんたは家に帰ってくれば、何もかも売りとばして、金は全部自分の懐へ、入れてしまい、おれ[リグ]とおふくろを見ごろしにして、またどこかへ行ってしまったがそれを忘れるとでも思うのかね？」(414-5) ([]内、筆者)

ラッフルズはこの反論を受けるきっかけとなった言葉の中で、「これ以外に君のおふくろさんを仕合せにしてやれることはないんだ。」(414-5) とか「俺は、道楽とはすっかり手を切った」、「これを最後として、まっとうな方向へ向かいたいんだ」、「君のおふくろさんが一生楽に暮らせることになるんだ。おれはいつだってあの婆さんが好きだったんだ、嘘じゃない、

このような言葉が繰り返される。「これ以外に君のおふくろさんを仕合せにしてやれることはないんだ」とか、「君のお袋さんが一生楽に暮らせることになるんだ」という発言は、相手を思い遣る「博愛」の精神。「おれは道楽とはすっかり手を切った」、「これを最後として、まっとうな方向へ向かいたいんだ。」、「嘘じゃない」は当時の社会では神に誓って言うことを意味し、「神」の教えに従って生活するということの内容を指している。道楽（今で言う博打）をしないで、「まっとうな方向」即ち「神の教えの方向」へ向かうという意味になる。表面上だけ見れば、ラッフルズは福音主義を唱えている。しかし、実際には、リッグの言う通り、女性を騙して家族に入り込んで引用文に示したことをしたりしている。そういうラッフルズをバルストロウドは使っているのであり、ラッフルズという言葉の中や行為にバルストロウドの考える福音主義というものが顕されている。

註

- (1) 'Evangelicalism', *Encyclopædia Britannica*, Volume 3, London: 1980, pp. 256-9.
- (2) 工藤、淀川(1994)は「福音主義」について、ジョージ・エリオット、工藤好美、淀川郁子訳『ジョージ・エリオット著作集』第2巻（『フロス河の水車場』、『サイラス・マーナー』所巻）（文泉堂出版、1994年），p. 348—p. 90の訳注。第二部(3)で、「聖書にある福音書の教義精神に則って信仰による救いを主張した事」と定義している。
- (3) Paris, B. J. "George Eliot's Religion of Humanity", *A Journal of English Literary History*, vol.29, London: The John Hopkins Press, 1962, p. 518.
- (4) 工藤好美 「小伝」、G・エリオット、工藤好美、淀川郁子訳『ミドルマーチ』I巻（講談社、1975年），pp. 571-6.
- (5) Paris, p. 520.
- (6) 「ロマン主義」、『広辞苑』第7版（岩波書店、2011年），pp. 1258-9。要約すると「ロマン主義とは、18世紀末から19世紀にかけて、ヨーロッパに興った芸術上の思潮で、古典主義、合理主義に反抗し、感情、個性、自由などを尊重、自然との一体感や神秘的な体験や無限なものへの憧れを表現したもの」と言い表すことができる。

I.4. 農村共同体

I.4.1. 「農村共同体」とは

これは農業及び農村組織をもって社会の基礎としようとする立場の人々の考え方である。この作品の中でエリオットは農業を中心とした社会を理想化した面が見られる。

共同体の全ての構成員が社会的、政治的、経済的に同等の権利を得ようと常に努め、指導的役割の者がそのことに気を配ることで、各々の能力や役割の向上と共同体の発展が同時に達成されて初めて、幸せな社会とする考え方とまとめられよう。エリオットはこの独自の考え方を、ドイツのゲマインシャフト⁽¹⁾の社会類型を参考に築き上げた。⁽²⁾

I.4.2. 『ミドルマーチ』における代表者——①メアリー・ガース、フレッド・ヴィンシー

『ミドルマーチ』における農村共同体の概念の代表者といえば、ガース父娘（ケイレブ・ガース、メアリー・ガース）、フレッド・ヴィンシーであろう。フレッドは、彼が著した本の題名を『緑野菜の栽培と家畜飼料の経済について』とした。「蕪や不断草」の栽培に擬えて、それらを育てる「アース」についてエリオットは第21章で「この世界は我々のこの上なく貴重な自己を養ってくれる乳房だ」と述べている。

アダムとエバにとってもそうであったように、二人の人間が完全に結ばれ、年月を経るにつれて最高潮に達し、老後は共通の楽しい思い出を刈り入れる、そうした二人の結合を徐々に獲得する勝利を、あるいは、取り返しのつかない敗北を歌う叙事詩はそこから始まる。(832)

ある者は昔の十字軍のように、輝かしい希望と情熱で堅固に武装して出発するが、夫婦間の、そしてまた世間への忍耐が欠けていた為、途中で挫折する。フレッド・ヴィンシーとメアリー・ガース・・・この二人にはそのような失敗がなかったばかりか、互いに堅実な幸福を築いた(832)

このように農業を中心とした社会に生きることを見出したフレッドとメアリー夫婦を「堅実な幸福を築いた」成功者として設定していることから、エリオットは農村共同体の生き方を理想とした一面が窺える。この引用箇所、エリオットは、農村共同体の考え方の一つを映し出している。農村共同体で夫婦として暮らしていく時、希望と情熱だけでは十分でなく、夫婦間や世間への忍耐が必要であるとの考えが含まれていることが分かる。エリオットは、フレッドとメアリー夫婦には「夫婦間の、そしてまた世間への忍耐が欠けていた」という失敗が無かったことを彼らが「堅実な幸福を築いた」理由に挙げている。また、この箇所がある章を「終曲」と題していること、「二人の結合を徐々に獲得する勝利を、或いは、取り返しのつかない敗北を歌う叙事詩」という表現から、エリオットは、人間の人生を叙事詩に擬えて登場人物を性格設定していることが窺える。

I.4.3. 『ミドルマーチ』における代表者——②ケイレブ・ガースの場合

彼については、教区長が自分達牧師に敬意を払いつつ、地主所有の土地管理をする実務を引き受けてくれる人物だと、評している箇所を読むとはっきりする。その場面ではジェイムズ卿がまず話の口火を切る。

「あちらで[ブルック氏が]ガース君を解雇してから、もう 12 年になるが、あの時から総てが旨く行かなくなったのです。僕[ジェイムズ卿]の所でもガース君に見て貰おうと考えています——長屋についてあの通り、素晴らしい案を立ててくれたのですから。・・・しかしガース君は、ブルックさんが、あの人に全部任せない限り、ティプトン[教区に属する土地]の管理をふたたび引受けることはないでしょう」「それも当然なのですよ」と教区長が言った。「ガース君というのは、自主独立の精神に富んだ男でね、独創的で、一途な所があるから。私はある日、価格査定をして貰ったのですがね、彼は単刀直入に言いましたよ、牧師さんというものは実務のことは滅多に分からないのだから、手出しをすると、とんでもないことを仕出かす、とね。しかし、あの男はこれを言うのに、まるで船乗りの話でもしているように、落ち着き払って、丁寧な言葉を使うのです。もしブルックさんがあの人に管理を任せるなら、ティプトン[教区]は見違えるようになるでしょう」(381) ([]内、筆者)

ガースは教区長を頂点とする教会関係者の収入源、10分の1税を徴収する基礎である地主の土地を管理するのが役目。教区長が「落ち着き払って、丁寧な言葉を使う」というように、彼は教会の牧師を敬う態度をとり、地主に代わって土地、小作人を管理する。つまりガースは土地差配人としてミドルマーチという農村共同体の支配層、地代や十分の一税を搾取する側の一員である。しかも搾取することを批判的に捉えている様子がない点で、彼は考え方に問題のある人物である。故に彼は、教会や地主にとっては都合の良い考えの持ち主であるが、理想的農村共同体を作るのには妨げとなる人物である。

I.4.4. 『ミドルマーチ』における代表者——③ブルック氏の場合

第38章では、ブルック氏の選挙立候補を諦めさせようと話し合いがもたれることが、この章の特徴的な「イベント」である。新聞にブルック氏についての個人的な批判記事が出ているという。彼は「時代遅れだ」と書かれた新聞記事の内容を聞く前に、挨拶に続いて次のように発言する。

「しかし皆さんにお目にかかれるとは、愉快ですな。ところで、世情をどうお考えですか？少々テンポが速すぎますな。まさにラフィット（ジャック・ラフィット、1761—1844、フランスの銀行家で大蔵大臣）の言った通りです。——昨日以来、一日にして百年が過ぎた——ですよ。全く、海の向こうでは、次の世紀に入っているんですよ。こちらより進み方が速いのですね」（382）

ブルック氏の選挙立候補を諦めさせようと教区長（カドウォラダー氏）、同夫人やチェタム卿が集まっているところに、当のブルック氏はやって来て、このように発言するのである。彼は地主であることから農村共同体機構を構成する重要な役回りである。彼はその記事の中でさらに、次のように評されている。

社会組織の改革者をもって任じておるにもかかわらず、彼が直接責任を負うべきあらゆる事業をなして衰退の一途を辿らせる男。一人の悪党をも絞首刑に処し得ない博愛

家でありながら正直な小作人が5人まで餓死線上にあっても平気である男。道徳の頹廢に悲鳴をあげるくせに、法外な地代で農場を経営する男。腐敗選挙区を真っ赤になって糾弾しながら、自分の農地内の畑の木戸という木戸が腐っていても意に介さない男。(383)

つまりブルック氏は、小作人の生活や幸せについては無関心で、彼自身の立場を良く見せることに専ら関心がある人物として描かれている。そして対外的に唱える倫理観と自らの農場経営に当たるそれとが異なる人物として彼は描かれている。言い換えれば、ブルック氏は地主としての地位の他、彼自身の利害の及ぶ範囲内の事のみを愛している。このことは、地主としての彼の姿勢を示すものである。彼が批判される新聞記事をわざわざエリオットは紹介している。このことからエリオットは、ブルック氏が立候補しようとしている選挙については、落選して欲しいというのが真の「農村共同体の考え方」だ、と見做していることになる。彼は「一人の悪党をも絞首刑に処し得ない博愛家でありながら正直な小作人が5人まで餓死線上にあっても平気である男」だと評されている。加えて教区長も小作人の生活や幸せについては無関心で、彼自身の立場を良く見せることに専ら関心がある人物として描かれている。従ってブルック氏は自己の利益だけを追求する利己主義者、農民にとっては居て欲しくない地主である。

I.4.5. 『ミドルマーチ』における代表者——④教区長（カドウォラダー氏）の場合

前項でも述べたが、第38章でブルック氏の選挙立候補を諦めさせようと、話し合いが持たれる。よって次に、この話し合いの場面の出席者の職業を見てみたい。確認の意味で再度挙げると、出席者は教区長やチェッタム卿、カドウォラダー氏、同夫人、ブルック氏であった。この中の何人かを取り上げて分析を試みたい。まず、教区長はイギリスの教会の役職者、宗教の代表である。彼の「農村共同体の考え方」を反映している箇所の一例を見てみよう。チェッタム卿がブルック氏の土地管理方法を問題にし、方針転換を希望する旨を述べたとき、彼は次のように言う。

「そうになったら、まったく嬉しいね。うちの教区で10分の1税が払えるなら、不

平を聞くことも少なくなるだろうから。もしティプトン[教区]には十分の一税の代りに払う金も無いとなったら、私は如何したら良いか判らないが」(381) ([]内、筆者)

教区長は担当教区のみドルマーチから10の1税を徴収することを義務づけられているので、彼は自分に課せられた義務を忠実に果たすことだけを考えていることが分かる。10の1税を各地から集めることで当時の教会の財源になっていたし、教区長という役職者の生活が成り立っていた、と考えることが出来る。ひいてはみドルマーチに象徴される農村共同体という財源のもとを成立、維持させる役目を彼は負っていたことになる。よって彼はこの発言によって彼の考え方というもの、教区長という役職者の立場の考え方をよく表している。よって、教区長は教会のためにはなるが、みドルマーチという農村共同体の農民のためにはならない存在と言える。加えてカドウォラダー氏は、ブルック氏の選挙立候補を諦めさせようとする話し合いの席で、当のブルック氏に向かって新聞記事を引き合いに出して説得しようとする。それはジェイムズ卿が次のように言ったのを受けて彼は批判的な新聞記事を持ち出すことを考えつく。

「それにまた、あの人は自分を攻撃する材料を掻き集められたくはないでしょう」とジェイムズ卿が言った。「地所の管理が問題です。すでにそのことで攻撃が始まっていますよ。・・・」(380-1)

この発言から、ブルック氏は批判されるのを嫌う性格であること、彼の収入源である土地の管理に問題があり、その批判がみドルマーチより広い行政単位である州の政治を見るジェイムズ卿の耳に入る位広まっていることが判別出来る。この後、姿を現したブルック氏に対して、カドウォラダー氏は次のように言う。

カドウォラダー氏は新聞を手にしたまま、目に微笑を浮かべて言った——「ごらんなさい、ここです。この記事は残らず、みドルマーチから百哩と離れぬところに住んでいて、地代だけは取る地主のことなのです。州きっての後退的地主だと言っていますよ。・・・」(382)

カドウォラダー氏は、悪い噂が立ってしまうと何をする事も出来ず、最悪の場合、町を

出ていくことになりかねないということを、言いたかった。カドウォラダー氏は、町の人なら誰でも見ることの出来る新聞の記事で批判され、悪い噂が公になったから、選挙立候補を諦めなさい、という論理が成立している、と考えている。よって、「農村共同体の考え方」に悪い噂が立ってしまうと何をすることも出来ない、という論理が含まれていることが証明された。

しかし、こんな回りくどいやり方や言い方をしなければならないところから、カドウォラダー氏は遠まわしの批判しか出来ない人物で、小作人の立場の弱さを代表している人物であることが判る。

I.4.6. 『ミドルマーチ』における代表者——⑤カドウォラダー夫人の場合

カドウォラダー夫人はブルック氏の選挙立候補を諦めさせようとするのに、ブルック氏の性格を利用して説得しようとしている。彼女は脅しの材料が乏しいことが解ると、細かいことにこだわるブルック氏の性格に訴えようとするのである。

「希望の持てることが一つありますよ——ブルックさんはご自分のお金が水が洩れるようにだんだんなくなってゆくなんてことは、嫌いだということです」とカドウォラダー夫人は言った。「選挙にはどういうことにどんなにお金がかかるか、細かいことがわたしにわかっていたら、あの方をおどしてやれるのですがね。支出だの経費だのという大ざっぱな言葉で攻めたてても無駄です。わたしなら・・・いきなり蛭を一瓶、吸いつかせてやりますよ。わたしたちけちな人間にがまんできないのは、小銭が吸いとられることですからね」(380)

農家の家計をやりくりし、農作業をしているカドウォラダー夫人は嫌いなことが二つある。一つは、農作業中に蛭に吸い付かれること。もう一つは、教会や地主に地代等、農業で稼いだお金を取り上げられることである。小作農家の一員として地主に対し、不満を持つこと、自分で稼いだお金を取り上げられるのが嫌だという考え方。両方とも、農村共同体を基礎部分で支えている人の代表的な考え方である。農村共同体を構成する、小作人の妻達の考え方を代表する見解を、カドウォラダー夫人は持っているということである。

I.4.7. 『ミドルマーチ』における代表者——⑥ヴィンシー夫人の場合

次にヴィンシー夫人の場合を見てみよう。彼女は、息子・フレッドがメアリー・ガースと結婚することについて説明を受けた。この場面から受ける印象により、母親であるヴィンシー夫人は人を判断するのに、その人の地位や階層で判断する人物であることが強調されている。

フレッドはそれからさらに多くのことを母親に語ったり、説明したりした。しかし母親は、夫が思いつきそうもないことをありありと想像して、どうにもあきらめがつかなかった。フレッドはメアリー・ガースと結婚するにちがいない。そしてこれからはガース家の者や、彼らの習慣がはいりこんできて、彼女の生活を台無しにするにきまっている。「ミドルマーチのどの息子よりもすぐれた」美貌と上品な風采をもった、いとしい息子が、あの一家の風習にならって、容姿は醜くなり、着物はだらしなくなるに違いない。こんな好ましいフレッドを擒にするについては、ガース一家の陰謀があったことと思われるが、それについてくどくど述べる勇氣は彼女にはなかった。そんなことを言葉の端に匂わせただけで、彼の息子は、かつてないほど「猛烈に食ってかかった」ことがあったのだから。ヴィンシー夫人は気立てが優しかったので、腹が立ってもそれを表に出すことはなかった。しかし自分の幸福にひびが入ったという感じがして、それからの数日は、フレッドの顔を見ただけで、この息子が何か不吉な予言をされたような気がして、思わず泣き出してしまふのであった。(569)

フレッドは母親・ヴィンシー夫人に、ガース家に婿入りし、後も継がないし牧師にもならないことを父親に認めてもらった、と告げている。それを聞いたヴィンシー夫人は、父親に理解されたと説明する息子の顔を見ただけで、悲嘆にくれている。彼女は夫・ヴィンシー氏を人間性でなく、実業家であり、市長という政治家という地位や階層に価値を見出している人間である。彼女は、息子・フレッドの結婚相手が同じ「プチ・ブルジョア」階層でなく、比較的上とはいえ、労働者階級の娘であり、しかも労働者階級に婿入りすることにショックを受けて悲しんでいる。彼女は、完全には資本家階級とは言い切れない階層に属している人物であり、かといって労働者階級よりは上である、という意識を持っていることの表れでもある。収入や容姿、来ている着物が人より勝っていることで満足感を得る

面を持っている人物である。エリオットはヴィンシー夫人が「気だてがいいから不満を表に出さない」とか労働者階級であるガース家の風習を息子・フレッドが身に着けていくであろうと思い描く、と説明している。

註

- (1) 「ゲマインシャフト」、『広辞苑』 第7版（岩波書店、2011年）pp. 1258-9、ゲマインシャフト【Gemeinschaft(ドイツ語)】ドイツの社会学者、テンニエスが設定した社会類型の一つ。人間が地縁・血縁・精神的連帯などによって自然発生的に形成した集団。家族や村落など。共同社会。対語はゲゼルシャフト。
- (2) Fleishman, Avrom. *George Eliot's Intellectual Life*, Cambridge: Cambridge University Press, 2011, p. 245.

I.5. 初期フェミニズム

I.5.1. 初期フェミニズム (Incipient feminism) とは

I.5.1.1. フェミニズムについて

この章全体を統括するアイデア (idea) である“Incipient feminism”は「初期フェミニズム」とも訳される。この Incipient feminism (以下、初期フェミニズムと記す) を定義する前に、まずはフェミニズムについての一般的な定義が必要である。これについては、以下に記述する内容を基調とする。

フェミニズムとは 1792 年、メアリ・ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』を著したことをもってフェミニズム運動の先駆けとする説がある。フェミニズムの考えは 19 世紀の文化に多大な影響を与えたとされる。第一次世界大戦の間に、女性の参政権が認められた (日本では 1945 年、戦後に認められた) ことは、この運動の成果とも言える。ジョージ・エリオット以外のフェミニストとしてはヴァージニア・ウルフやジークムント・フロイトが有名である。

フェミニズムは 18 世紀のフランス革命で採択された人権宣言に女性の権利が謳われていなかったことへの女性たちの抗議を発端とする。18 世紀以前の社会では、一部の上流階級を除き、女性も男性と同じ労働や農作業に従事していた。後の産業革命はヨーロッパ各地に都市という環境をもたらし、それによって女性達は「専業主婦」という新たな立場、社会的位置づけを得たのである。いわばフェミニズムは、思想面におけるところの産業革命がもたらした「副産物」のようなもの⁽¹⁾ である。

I.5.1.2. 初期フェミニズム

初期フェミニズムとは、1860 年代に「ウーマン・リヴ」(Woman Liberation Movement) と呼ばれた女性の奴隷的地位からの解放を求めてアメリカで起こった運動の末裔ともいう

べき主張のことを指す⁽²⁾、と一般的には定義できると考える。そして、家族史という学問領域が『母権制』(バッハオーフェン、1861年)という本の出版を契機に生まれ、やがてその潮流はマルクス主義的フェミニズムへと繋がっていくことになる。

そのマルクス主義的フェミニズムでは、資本主義と対比しながら「女性」というものがどのように定義されているかを確認することにより、初期フェミニズムについての定義を試みたい。

マルクス主義では、労働は自己実現であり人間の本質であると考えられる。しかしそれを売らなければ生きることが出来ないのが資本主義的社会における労働者である。労働が「商品」であることによって、労働者は自己の本質から疎外される。

伝統的に、女性には、家事と育児という役割が与えられてきた。家事と育児は労働を再生産する仕事である。夫の世話をし、その労働力をリフレッシュする仕事、そして新たな労働力として子供⁽³⁾を産み育てるという仕事である。しかし家事と育児は「交換価値」を持たない(任意の誰かと「交換する=売る」ことが出来ない)ので、資本主義社会においては、女性は従属的な地位に置かれざるを得ない。(そして)父権は、妻を夫の所有物とし、「女性」を「母性」へと限定⁽⁴⁾しようとする、とされている。

エリオットが生まれ育ったヴィクトリア朝後期時代のイギリスで女性たち(階級を問わず、夫人やサーヴァントと呼ばれた中流階級以上のお屋敷の女中達)は、まさに解放されるべき隷属的状态にあったとあってよい。つまり、ほとんどの女性たちはヴィクトリアニズムという時代の、そして当時の資本主義社会制度の犠牲者だった訳である。パメラ・ホーン(1975)はその著書の中で、「使用人が屋敷から食料やその類の物品を盗み出したり、その他の違法な行為をしたりすることができたように、女主人の方でも、使用人に対して正当な賃金や食料を支給しないということが可能な⁽⁵⁾状態であったと述べていることからしても、彼女達の苛酷な労働条件ぶりを窺い知ることができる。

これまで3項にわたってフェミニズムからその主な種類まで、個別具体的にそれぞれの定義を試みてきた。以上で『ミドルマーチ』に関するフェミニズム部門における、それぞれの思想についての一般的定義はできたものとする。そこで以下のページでは、小説『ミドルマーチ』の各登場人物に現されているフェミニズム、とりわけこの小説の舞台に設定されている1930年代からのイギリスの地方都市における初期フェミニズムについて、具体的場面を分析する中でその特徴を説明していきたい。

I.5.2. 『ミドルマーチ』の各登場人物に観られる初期フェミニズム思想

I.5.2.1. はじめに

『ミドルマーチ』の初版が出版されたのは1871～2年にかけてである。舞台はイギリス中東部の地方都市、コヴェントリーとナニートンという両工業小都市とされている。その当時の国家レベルでの変化といえ、1831年に選挙法第一次改正案がイギリス下院を通過したことである。それまで貴族階級の特権の1つであった選挙権が市民階級（ブルジョア階級）にまで拡大され、トーリー、ホイッグ両党による議会制民主主義が途についたことになる。イギリスは19世紀に入るまで、イングランド、スコットランド、ウェールズの三国に割れていたのが、統一なった（正式発足は1801年）「イギリス連合王国」国王の座に就いたヴィクトリア女王（在位1837～1901）の強力な指導力⁶⁾の下、世界の七つの海を支配するまでに繁栄を極めたのである。

経済的に余裕ができると、自然と市民の権利意識も高まりを見せ、産業革命以後は労働者階級を中心に女性たちの間でも急速に自分たちの権利を主張するようになった。初期フェミニズムの動きはこうした経済、社会構造の変化と密接に結びついているからこそ、生まれた考え方であると見なすことも出来る。以下の論では、初期のフェミニズムが『ミドルマーチ』の中にどのように取り入れられ、描かれているかを具体的な登場人物の動きを通して検証していきたい。

I.5.2.2. 検証①ロザモンド（分類：現実追認派、自己目的達成型）の場合

ある種の人間は、人が見ている、脅せば秘密が守られ悪事が絶対にバレないと考えるものらしい。実に自己中心的な虫のいい解釈をするものである。そういうタイプの典型と言えるのがロザモンドであると考え。彼女は結婚後何かにつけて、度々夫・リドゲイトと口論になる。口論の後、リドゲイトがとった行動を彼女は自分に都合良く解釈する。例によって夫と同姓の軍人をもてなしたいロザモンドは、賢くない人と話すのが苦痛だと訴える夫の言い分を聞き入れない。そこで彼女は夫から、好きなタイプの芸術家であるラデ

イスローを引き合いに出されて、彼の意見を聞くように求められる。先ずはその場面から見てみたい。

自分[ロザモンド]には手に取るように解っている、とロザモンドは思った。彼[ラディスロー]は嫉妬しているのだ。そしてその嫉妬しているということが、彼女には嬉しかった。(583) ([] 内、筆者)

エリオットはロザモンドが勝手に自分に都合良くその場の状況を解釈する性格であるということを、語り手として解説している。彼女は、夫や知人が自分が魅力的な女性であるが故に嫉妬しているのだ、と思えるのである。日本のフェミニストを自認しておられる小倉(2002)は「国が滅んでも人は生きていく。自分の意見は誰も代表してくれない。人は自分に必要な(都合のいい)フェミニズムを武器として」⁽⁷⁾ 生きる、ただそれだけだ、と述べている。

このようにロザモンドは決して特別変わった女性でもないが、時代の寵児ともいうべき女性でもある。いつの世にも相も変わらず女性というものは常に自己中心的な存在であり、自惚れが強く自信家であり、誰もが固有の信念を持たれているが故に、世界中を敵に回しても我が子を守り抜く強さを秘めた存在でもあり得るのだ、と考える。

I.5.2.3. 検証②ドロシア(分類:改革派、理想主義、現実無視型)の場合

『ミドルマーチ』の時代設定とされる1830年代のイギリスでは、仕事をする女性と言えば、女中として御屋敷に勤めるか工場で働く労働者階級であることを意味した。片や中流階級の家庭の子女は教養を積み、同じ階級かそれなりに相応しい階級の男性と結婚して家庭に入り子を産み(育てるのは乳母、教育は家庭教師が行う)、家事をするのが務めであった。よって経済的に女性が自立することは困難であった。加えて英国国教会で認められている筈の離婚は実際には、女性の側からは経済的な理由から言い出せず、事実上困難であったとされている。同じ結婚するにしても、ドロシアにとって魅力ある結婚についてエリオットは次のように述べている。

自らの無知に引き回されている小娘の状態から解放して、最も壮大な道⁽⁸⁾に彼女[ドロシア]を導いてくれる人に進んで従う自由を与えてくれる、そのような結び付きを言うのであった。(29) ([]内、筆者)

ナード(2003)によれば、この場面だけでなく『ミドルマーチ』作品全体が、結婚も含めた人生のあらゆる事象を扱う小説であるだけでなく、「ミルトンが語った物語の根本的な前提を問いただしてもいる」⁽⁹⁾ 作品であると位置づけて次のように述べている。

エリオットはドロシアの独りよがりや、偽りの知識への誘惑、カソーボンの復讐心(妻であるドロシアが妻の貞節を破り、自分の存命中に他の男性[ウィル・ラディスロー]と将来を誓ったことに対し、彼と結婚すれば、自分の財産の相続権を失うとの内容の遺言書を書いてやろうという心持ちのこと)を露わにしているからである。⁽¹⁰⁾ ([]内、筆者)

ナードの主張するエリオットの意図を嘲笑うかのように小説の中の主人公・ドロシアは苦悩する。夫と夫のいとこであるウィルの和解を願う心に愛が宿る。それは即ち「神」が生まれたことになる。フォイエルバッハの理論に基づいたエリオットの信仰観が現れている、その場面を紹介したい。

教会を後にしながらドロシアは、深い哀しみを覚えた。まず何をさておいても、夫[カソーボン]がいとこ[ウィル]には口をきくまいと頑なになっていることが、彼女を悲しませていた。(略)ウィルが夫の主宰する礼拝に来たのは(略)彼女自身も強く望んでいた和解へ、ウィルのほうから快く歩み寄ってくれたのだ、と理解した。(474) ([]内、筆者)

夫も神に仕える身であるからには、きっと誰との仲違いも望まないだろうとの期待をドロシアは持っていたし、好きな人と現在の夫が、良い関係であってほしいとも願っている。ドロシアは聖職者のイメージを、平和な世を望む理想社会の実現に向けて努力している人だとしている。フェミニストもまた、自分達にとって理想の社会環境実現のため、女性の立場を少しでも良くしようとしている点で、ドロシアの思い描く聖職者の目指すところと

一致している。それは時代が 1830 年代であることから、フェミニズム運動の歴史に照らし合わせて、ドロシアに初期フェミニズムの特長が見られると考える。

理想を実現しようとする意味で、彼女は理想主義者とも見なされ、夫・カソーボンの性質を知っていながら敢えて人間なら誰もが持っているはずだと性善説を信じている点で、前の節、「フォイエルバッハのヒューマニズム」で触れた「絶対信」を持っているとも見なすことができる。この節で引用した箇所を総合して見ると、人の願いや善意は得てして誤解されがちだが、より広い視野と心持ちで、より良い社会を地元、余所者と同じ人を区別することなく、その地域にご縁のあることに感謝して、みんなで築きたいとの、エリオットの願いが込められた描写になっていることが分かる。

I.5.2.4. 検証③カドウォラダー夫人、バルストロウドの妻、(分類：守旧派、現実是認型)の場合

I.5.2.4.1. 検証③-1、カドウォラダー夫人の場合

このご婦人は教区長の妻という点で、結婚後禄付牧師の妻となったドロシアにとって教区こそ違うものの、大変重要な関わりのある人物である。

もともとカドウォラダー夫人は良家の出でブルック氏の2人の姪に大層関心をもっており⁽¹¹⁾、チェッタム卿とドロシアの縁談をブルック氏に持ち掛けたのも彼女である。この縁談は貴族階級と中流階級（ジェントリー層）との間に持ち上がったもので、階級を跨いだ結婚であることを意味した。伝統的に支配層であり続けてきた貴族、英国国教会関係者側が財政面で、産業革命以後急速にその経済力を増してきたプチ・ブルジョア階級への依存度を強めざるを得なくなっていることを感じさせる組み合わせである。

一見、現支配者側の体制維持の為に動いているかに見えるカドウォラダー夫人だが、実は現状のシステムの中で最大限、弱者である女性の地位向上と権利獲得に懸命に努力している女性であることに、読者の皆さんはお気づきだろうか。

当時のヴィクトリアニズムが支配していた社会システムにおいては、女性は結婚によってしか生活の糧を得ることは難しかった。自らが働いて食べていくことは当時の上流階級には許されていなかったからである。

筆者が書かせて頂いた修士論文の第2章「福音主義」の中で、ドロシアとロザモンドを比較したように、2人は方法こそ違うものの、今でいう「キャリアアップ」を目指す女性の代表格であったと考える。個人の努力で資格を取るなど、自分を高める方法についての選択が、当時の倫理や規則の縛りのきつい世の中では大変な高いハードルであったことが容易に想像されうる。

次に、カドウォラダー夫人が初期フェミニズムの代表者である証拠の場面の一つを、紹介したい。ドロシアとカソーボンの婚約が整ったことを知ったときの反応にその兆候がよく現れている。以下はカドウォラダー夫人の考え方を述べた箇所である。

若い人達は結婚するときには、当然、一家一門のことを考えなければなりません。そう言う私がいいお手本です。——貧乏牧師と結婚して、ド・アラッシー一門の物笑いの種にされたのですからね。——炭火や薪を買うのにもやりくり算段をし、サラダ油ひとつ買うにも、神様のご加護を頂かないと何ひとつ出来ることなど無いのですから。それにしてもカソーボンさんはお金持ちです。それは認めてあげなければなりません。家柄のことを言えば、あのお宅の紋章は、黒い烏賊が3つに、[左の]後ろ足で[横向きに]立ち上がった[ライオンをあしらっていて、教会でミサの際の役割が]註釈家⁽¹²⁾ だと思うけれど。(略) うちのように、子供が4人もある貧乏世帯では、腕のいい料理人を雇う余裕がないでしょ！ (56-7) ([]内、筆者)

一見、古い価値観の代表者のような発言で始まっている。今時、一家一門のことを考えて結婚する人などいないかのように思われがちである。しかし、表に目立たないだけで、しっかりと伝統を受け継ごうとしている人達はあるのも確かである。ウィリアム王子のお相手ファーガソンさんの家に紋章が無かったため、ご結婚に際して新しく紋章を整えた話は記憶に新しい。カドウォラダー夫人は伝統的価値観の中で、新しい動きに順応しようと努力しているのであっても、決して変化を望んでいるわけではなさそうである。旧体制の維持を図りつつ、部分的に手直しで切り抜けようとの現実性を持ち合わせていると見る向きもある。料理人を雇うのが上流階級のステータスシンボルであると考えている点や紋章のあるなしを問題にするあたりは、まさしくイギリスの伝統的上流階級の人間であることの証である。

こうして見てくると、カドウォラダー夫人は当時の社会システムを最大限利用して女性

たちの地位向上と男女同権を密かに画策していた、との印象を持つことも可能になってくる。彼女のように、いつの時代でも女性は、社会的地位のある男性と結婚してみて初めて自分がどういうステータスメリットを得たのかを実感する。そこには想像を遙かに超えた優越感と孤独感、ねたみやそねみ、といった醜いものまで一緒に抱え込むことになる。しかし、一方で内助の功による幸せや充実感といったものも手に出来るのも結婚のメリットである。幸せの形は人それぞれながらも、この小説が当時の世間からは注目され、小説に描かれた数々の倫理、道徳観を巡ってケンケン諍々の議論がイギリス中でなされたことは、パブで政治の話をしたり、賭け事の話で盛り上がることの大好きな国民性を持つイギリス人なら至極当然のことであろう。

I.5.2.4.2. 検証③-2、バルストロウド夫人（旧姓：ハリエット・ヴィンシー）の場合

彼女は旧姓が示す通りミドルマーチの市長であり、実業家のヴィンシー氏の妹である。夫婦は共にキリスト教でもメソジスト派を信仰していたために、町の一流の人達とはビジネス以外での付き合いは出来なかった。

このようにバルストロウド一家は、元々四面楚歌か村八分に近い状態で暮らしていたのだから、その財産の元手が汚れたものであったと判った日には、それはもう酷い批判の嵐に晒されるのは当然の成り行きであった。

夫・バルストロウド氏が救われたのは、妻・ハリエットの最終的に行き着いた考え方によってであった。ハーノトル（1998）は、彼女の考え方についてこう述べている。

[ハリエット・バルストロウド夫人は] ……不名誉を分かち合いながら、気高く、夫を慰め、支えることが出来る⁽¹³⁾ [女性である]。([]内、筆者)

そして彼女を評している同じページで「バルストロウドは運が良かった。結婚したときの彼はハリエットに値しない人物だったのだから」⁽¹⁴⁾とも述べている。

ハーノトルが指摘によって、バルストロウド夫人は初期フェミニズム思想をもっていることが証明されると考える。なぜなら彼女は、自分の意思で夫の不名誉を分かち合いつつも、

別れずに夫と添うことを選んでいるからである。女性が、自らの意思を持つことなど出来なかったヴィクトリア朝後期の考え方（ヴィクトリアニズム）に反していることは明確である。そのことを、次に挙げる小説の具体的場面で再度検証してみたい。

〔ハリエットの〕内には、忠実な魂があった。彼女のほとんど半生に渡って、幸運を共有させてくれた人——今その人に罰が降りかかったからといって、どうして見捨てることができよう。相手を見捨てながら、見捨てられたものと、相変わらず、同じ食卓に座り、寝所を共にし、愛がないのに側近くいるため、却って相手をダメにしてしまうということもあるのだ。(749) (〔 〕内、筆者)

ドロシアがカソーボンを受け入れたところの博愛主義、即ち福音主義（Evangelicalism）がバルストロウド夫人の考え方の中にも観られる。結婚生活には love が無ければいけないとのエリオットの私見も垣間見られるが。

つまり、夫婦は対等である、との認識に立って互いを支え合わなければならないとする、男女同権の思想が入っているからこそ、彼女は夫の下に残れたのではないか。決して男に従属する存在でなく、一個の独立した意思を持った人間としてエリオットが女性、妻の立場を捉えていることが示せたものと考ええる。

I.5.2.4.5. 検証④番外編ーリドゲイト（男性側）の初期のフェミニズムへの適応具合（分類：改革派、戸惑型）

「リドゲイトはついに白髪にはならなかった。彼は僅か 50 歳で死んだ」(834) とは「終曲」と題した章に書かれているリドゲイトのその後である。医者として妻・ロザモンドの言う通りにした結果、彼は「成功者」と呼ばれた。「花とメッキに輝く素晴らしい邸宅」(835) に住み、妻専用の馬車を持つまでに裕福になったとエリオットによってその人生の終焉を大団円的に迎えたかのように描かれている。しかもこの成功をリドゲイトが「妻に反対しなくなった」「報い」(835) であるとも評されている。

リドゲイト夫婦のその後を描いたこの場面では、エリオットがロザモンドを映し手 (reflector) として用い、彼女に著者の判断を代弁させているとも考えられる。リドゲイトの死亡年齢の 50 という数字の前に「僅か」という言葉を用いていることがその証である。エリオットもまた、リドゲイトが若死にしたのは彼の自己責任だと言いたかったのだろうか。いや、セーフティーネットが機能した⁽¹⁶⁾と言いたかったのだと、考える。確かに生きた長さについて言えば、リドゲイトは短い方に入る。

しかし、ミドルマーチの町に来た当時の暮らしぶりに比べれば、彼は経済的には大変な成功者である。町の市長であり、事業も展開するヴィンシー家の娘と結婚し、医者としても社会的地位の面でも彼の能力は生かされたと言えるからである。彼が理想と違う現実には戸惑いながらも、妻の言うことを聞き医者として成功したことを以って、初期フェミニズムに適応したと見なせると考える。

とかく閉鎖的になりがちな地方の町、ミドルマーチで、リドゲイトを出身だけで排除せず、その町にとって有用な能力を持った人物なら受け入れるという寛容さが、なぜ機能したのだろうか。

この項題にも書いたように、彼は医療分野で、当時の先端であった「医薬分業」を志した改革者であり、全科診療を掲げて都会でなく地方都市のミドルマーチに赴任することを選んだ。にも拘わらず彼の初志が遂げられていなくて、お金と暮らしの安定、社会的地位の確立に留まらざるを得なかったのは初志を貫かなかつた、自分の正しいと信じることを貫けなかつた「報い」だと、エリオットが判断しているということである。

註

- (1)朝日新聞 village good 朝日新聞社編、「フェミニズム」(朝日新聞、2011) , p. 1.
- (2)上野千鶴子 小倉千加子共著『ザ・フェミニズム』(筑摩書房、2002年) , p. 130.
- (3)夏目漱石『坊ちゃん』の中では全編を通じて「こども」の漢字表記が「小供」で統一されている。
- (4)エンゲルス、F 『家族、私有財産、国家の起源』 土屋保男訳 (新日本出版社、1999年) , pp.350-368.

- (5)パメラ・ホーン、子安雅博訳『ヴィクトリアン・サーヴァント——階下の世界——』（英宝社、2005）, p. 245.
- (6)木村靖二、佐藤次高、岸本美緒『詳説世界史 B』（山川出版社、2013 年）, pp. 254-5.
- (7)上野千鶴子、小倉千加子, p. 250.
- (8)Hardy, Barbara. “*Middlemarch: Public and Private Worlds*” , *Particularities: Readings in George Eliot*. Hardy, Barbara, ed. London: Peter Owen, 1982, p. 29.
- (9)アナ・K・ナード、辻裕子・森道子・村山晴穂共訳『ミルトンと対話するジョージ・エリオット』（英宝社、2011）, p. 177.
- (10)*Ibid.*
- (11)フィリス・ハートノル、子安雅博訳『ジョージ・エリオット登場人物事典』（京都修学社、1998 年）, p. 32.
- (12)原文は ‘commentator’ となっている。注釈者とも言う。教会でのミサの際、儀式の解説をする役目の人のこと。ミサの進行をすることもある。『ランダムハウス英和大辞典』パーソナル版（小学館、1979 年）, p. 320。
- (13)ハートノル, p. 32.
- (14)*Ibid.*
- (15)内田樹『下流志向学ばない子どもたち働かない若者たち』（講談社文庫、2009 年）

I.6. プチ・ブルジョア・モラリズム

I.6.1. 「プチ・ブルジョア・モラリズム」とは

まず、「プチ・ブルジョア (petty[petit]-bourgeois)」は「プチ・ブルジョワジー (petty[petit]-bourgeoisie)」の所有格である。そして言葉の意味は次の通り⁽¹⁾である。

(「プチ・ブルジョア階級」とは)ブルジョア階級とプロレタリア階級の間中に存在し、中間的あるいはブルジョア的意識を有した階層。「プチブル」と略称し、中産階級、中間層、小市民層とも呼ばれる。ほぼ3つの形態に分けることができる。

- (1) 旧中産階級と呼ばれる層。農村の自営農、中小経営者などで、彼らは資本主義の発展とともに没落していく部分であり、小所有者意識が旺盛で自己を労働者と区別しつつ回顧する傾向を有する。
- (2) ホワイトカラー、官公吏、技術者、芸術家など。資本主義の発展とともに増大する部分であり、労働者でありながらブルジョア的意識を有し、不断に動揺する傾向を有する。
- (3) プロレタリア階層の上層部分。これは資本主義の帝国主義段階にあつて、植民地の収奪や独占利潤の獲得を基礎として、資本によって買収された部分である。彼らは労使関係を非和解的対立関係と捉えず、労使協調を信ずる傾向を有する。プチ・ブルジョアは社会変革の際には、中立的な立場に立ったり、プロレタリア階級の側に立ったりもする。

これら3つの形態(旧中産階級又は自営層、労働者かつホワイトカラー、プロレタリア階層の上層部分)の中で、『ミドルマーチ』における「プチ・ブルジョア」とは、上記(1)に挙げた旧中産階級で、ヴィンシー家の人々やドロシアを含むブルック一族の人達⁽²⁾が属する階層を指す。そして(2)の官吏ではないが、土地差配人という役目を持ち、労働者でありながらブルジョア的意識の強いガース一家がこの階層に該当する。

但し、この項ではガース一家よりも、ブルック氏と同じジェントリー (gentry) 階層に属している老フェザーストウンの兄弟に当るソロモン・フェザーストウンとソロモンの

妹・ウォール夫人を取り上げ、エリオットが彼らの性格設定に、主にこの考え方を採って描いていることを示したい。

そして「モラリズム」には「教訓」の意があり^③ ^④、『ミドルマーチ』作中に於いては、「倫理観、道德観」の意味合いで用いられているものと仮定する。

従って、『ミドルマーチ』における「プチ・ブルジョア モラリズム」（以下「プチブル倫理観」と略記する）とは、資本家階級でもないのに資本家階級的意識を持っている人々の道德観を指しているものと考えられる。この定義を前提として以下、作中の数箇所当てはめて見てみたい。

I.6.2. 『ミドルマーチ』における代表者——①ヴィンシー夫人の場合

『ミドルマーチ』における「プチブル倫理観」の代表者といえはまず、ヴィンシー夫人であろう。彼女は、息子フレッドが土地差配人ケイレブ・ガースの娘、メアリー・ガースと結婚することに反対する。なぜならば、彼女は所謂、「プチブル的倫理観」を持っているので、その事を理由に、この結婚に反対しているのである。それはヴィンシー家が牧師の家柄であることやフレッドが牧師になるべく受けた教育内容がガース家の家柄や教育とは異なる、というものである。このことについてガース夫人はヴィンシー家の考えに対する意識を、次のように語っている。

相手を諫めたい気持ちはケイレブの妻の心に動き始めていた……この紅顔の若者 [フレッド] が彼よりもずっと賢明で、この世の悲しみも知っている人達を失望させてまでも、のさばっているとは——夜鶯を食いものにしてはいるのにそれを知らずにいるとは——しかも彼の家 [ヴィンシー家] の者は、こちらの家 [ガース家]の方がこの若者にご執心なのだ、と考えているとは。(574) ([]内、筆者)

このように第57章でガース夫人が感じている、という内面描写の体を借りて、資本家階級でもないのに資本家階級的意識を持ってヴィンシー家の者が「のさばっている」ことをエリオットは述べている。彼女は、ガース夫人に自分たちのことを「ずっと賢明で、この世

の悲しみも知っている人たち」とまで言い切らせている。エリオットは、農業を中心とした社会に生きることを見出したフレッドとメアリー夫婦を成功者として設定した。エリオットは彼らに自らの理想とした人間像の一面を表象させた。では、ガス夫人はフレッドの何所にこうした「プチブル倫理観」を見たり、感じたりしたのだろうか。

「メアリーがあなた [フレッド] に自信を持たせたということですか？」とケイレブの妻はやり返した。彼女は、ヴィンシー家の者がこの問題をどう考えようとも、メアリーのためを思う者たちにとっては、もしこのことが前もって判っていたら、到底、賛成できることではなかったのだ、そのことを、フレッドにもっとはっきり感じさせたほうが彼の為になると考えたのである。(574) ([]内、筆者)

ガス夫人はメアリーとフレッドが恋仲になったのは、メアリーが階級の違い、あるいは家柄の違いを無視している、と判断している。彼女は、メアリーによってフレッドが自信を持ったら、自分たち土地差配人の上へのさぼってくるのでは、との疑いを持っていた。そして階級の違いから来る意識の差というものを、まだ若い世間知らずに見えるフレッドに彼女は、教えようと試みた。つまり、ガス夫人はフレッドにヴィンシー家の自分たちを見下すような態度に反発を感じながらも、彼が「それを知らずにいる」ことへ母親的感情が動いたのだ。そのことはフレッド自身も感じ取っていることを、筆者・エリオットは「自分に説教をしたがっているらしい相手の様子に、フレッドは少し気が昂ぶってきた。」と書いている。更に続けて、ガス夫人は、フレッドに次のように言われてしまう。

「自分に説教をしたがっているらしい相手の様子に、フレッドは少し気が昂ぶってきた。」(574)

この時のフレッドの心境、意図についてエリオットは、「この二人の男性[ケイレブ・ガスやフェアブラザー牧師] ([]内、筆者) を例にひけば、ケイレブの妻には効き目があるだろう、とフレッドが考えたのである。」と説明している。このことから分かるように、フレッドの態度から、ガス夫人らガス家の者たちは見下されているような印象を受けている。これらの点に、ガス夫人はヴィンシー夫人が内包する「プチブル倫理観」を見たり、感じたりしたのではなかろうか。

ヴィンシー夫人は息子であるフレッドに、もともと牧師の家柄であったヴィンシー家を継ぐべく教育を受けさせた。彼女は半端でない自尊心の強さを持っていて、夫・ヴィンシー氏のフレッドに対する応対とは明らかに違っている。しかし、まず始めに、ヴィンシー夫人の「プチブル的倫理観」について見てみたい。

彼女は、フレッドからガース家の婿になることで自分ひとり分の食費相当の収入しか見込めないことを父親・ヴィンシー氏に打ち明け、父親からもう聞かない、と態度や言葉で示されたことを知る。彼女は、息子の様子を見て心を痛める。彼女は、フレッドが父親のヴィンシー氏に理解して許してもらいたい、との思いに固執しすぎているから、なかなか満たされないのだ、と思っている。彼女は「プチブル的倫理観」故の固執、固定観念が招いた行動をとる。このことについて次に触れておきたい。彼女は息子のさらなる説明を受けた時の印象により、自分の内にある「プチブル的倫理観」を増幅させたのである。

フレッドはそれから更に多くのことを母親に語ったり、説明したりした。しかし母親は、夫が思い付きそうもないことをありありと想像して、どうにも諦めがつかなかった。フレッドはメアリー・ガースと結婚するに違いない。そしてこれからはガース家の者や、彼らの習慣が入り込んできて、彼女の生活を台無しにするに決まっている。

「ミドルマーチのどの息子よりもすぐれた」美貌と上品な風采を持った愛しい息子が、あの一家の風習に倣って、容姿は醜くなり、着物はだらしなくなるに違いない。こんな好ましいフレッドを擒にするについては、ガース一家の陰謀があったことと思われるが、それについてくどくど述べる勇氣は彼女には無かった。そんなことを言葉の端に匂わせただけで、彼の息子は、かつてない程「猛烈に食ってかかった」ことがあったのだから。ヴィンシー夫人は気立てが優しくかったので、腹が立ってもそれを表に出すことは無かった。しかし自分の幸福にひびが入ったという感じがして、それからの数日は、フレッドの顔を見ただけで、この息子が何か不吉な予言をされたような気がして、思わず泣き出してしまったのであった。(569)

フレッドが「更に多くのことを」母親・ヴィンシー夫人に語った理由について、彼女は後で父親・ヴィンシー氏に息子の結婚のことで彼女自身の不満を漏らすのではないかと、という不安を取り除きたかったからだ、と思っている。エリオットはそのことを次に挙げる箇所を示している。

おやじ [ヴィンシー氏] は僕 [フレッド] の決心を認めて許してくれたのだから、今更この問題を持ち出しておやじの痛い所に触れないでくれ、とフレッドから注意されたので、彼女としては普段の快活さを取り戻すのに、却って一層時間がかかったのであろう。(569) ([]内、筆者)

ヴィンシー夫人は、フレッドから彼がガース家に婿入りし、後も継がないし牧師にもならないことを父親に認めてもらった、と告げられる。彼女は、息子が父親の後も継がないし牧師にもならないことを父親に許して貰えたと思っている、との印象を受ける。ところがヴィンシー夫人は、父親に理解されたと説明する息子の顔を見ただけで、悲嘆にくれている。彼女は夫・ヴィンシー氏その人でなく、実業家であり、市長という政治家としての地位や階層に価値を見出している人間であることが分かる。結婚相手が同じ「プチブル」階層でなく、比較的上とはいえ、労働者階級の娘であり、しかも労働者階級に婿入りすることにショックを受けて悲しんでいる。彼女は完全には資本家階級とは言い切れない階層に属し、かといって労働者階級よりは上である、という意識を持っている。収入や容姿、来ている着物が人より勝っていることで満足感を得る面を持っている。彼女は気だてがいいから不満を表に出さない、とあるが果たしてそうであろうか。読み進めてみると、彼女は、気の弱さとプライドの高さとの自己矛盾に悩んでいる、という解釈も成り立つ。彼女は息子が労働者階級の人間たちに騙されている、と感じている。このことは、自分たちヴィンシー家の方が頭が良い、と思っているということである。牧師の家柄ということで、頭が良い家系である筈なのに、息子がそうではなかったことに彼女はショックを受けている。ヴィンシー夫人は、頭の良さは個人ではなく、「ヴィンシー家」という家柄・血筋にあるのだという意識を持っている。彼女は、ガース一家の風習に倣うとみにくくなる、などという考えの持ち主だが、そこには、現代の個人主義の思想が見られない。彼女は、息子が騙されて結婚させられるのは「陰謀」によるもの、と思っている。「陰謀」とは階層の上下を問わず能力的により劣る者の側が、叶わないにも拘わらず、能力的により優る上の者を貶める為に行う議論や計画^⑥だと定義付けることが可能である。このように、「陰謀」という意味は、決して良い意味を持つ熟語とは言えないのに作者・エリオットがわざわざ選んでいる点で、設定上、ヴィンシー夫人は自分達がガース家より階層的に上だ、という意識を持っている人物だということの証明になるものと考えられる。

よって、ヴィンシー夫人の「プチブル的倫理観」は、家父長制度のもとにあって家庭に

閉じ込められた、ヴィクトリア朝の女性の典型的思想を背景として出てきた観念であると言えられるかもしれない。

I.6.3. 『ミドルマーチ』における代表者——②ヴィンシー氏の場合

フレッドがガス家の婿になることを明確に意思表示した時、ヴィンシー夫人とは対照的にヴィンシー氏は息子への感情を割り切り、彼の内面においては切り替えている。エリオットはこの時のヴィンシー氏の心境を、作中で詳細に叙述している。よってこの項では、まずエリオットは語り手として、どの様にヴィンシー氏の内面を描写したのだろうか。以下にその表現方法を見てみよう。

実を言えば、ヴィンシー氏が息子にかけていた期待には、多分に自尊心や、おもいやりのなさや、自分本位な愚かしい考えがまじっていた。しかし失望した父親は利用できる強力な手段を握っていた。で、フレッドのほうは、まるで呪われて追放されるような感じがした。(568)

息子・フレッドにガス家の婿になることを言い出され、ヴィンシー氏は「失望」した。しかし「ヴィンシー氏が息子にかけていた期待」とは、「大多数の紳士階級の子弟がそうであるように」(567)の表現が示すとおり、実業家であり、今はミドルマーチの市長でもある自分の後を継ぐことが含まれている。牧師の家系であるヴィンシー家の一員である事だけで、彼は十分に紳士階級に相応しい。その上、市長という公職に就いている。しかし、フレッドの父親はそれだけでなく、更に事業をし、牧師以上の収入を得ることで、経済的にも資本家階級的意識を持つようになっている。加えて彼は市長でもあるので、職務上の交際範囲から、政治面で町の有力者や経済面でも、ブルジョワ階級と繋がりを持つ立場にある。だからこそ、息子に自尊心を傷つけられようとも、政治力や経済的繋がりによって息子一人位自分の思うように出来る、という自惚れがある。

労働者階級であるガス家に婿入りするという事は、父親の政治的、経済的庇護を断るだけでは済まない事であることを、フレッドはよく分かっているのである。彼は父親・ヴィンシー氏に、ガス家に婿入りすることが父親に逆らうとか、父親の面子を潰すことに

はならないのだ、ということを理解して貰うことが出来ないとなると、これからのガース家での生活が成り立たないであろうと思っている。つまり、自分が想像する世界の中で、非常に自らの将来の姿を思い浮かべては悲観し、恐れ慄いている。この時のフレッドの心境をエリオットは、「まるで呪われて追放されるような感じがした」という表現で示している。フレッドは自惚れとも取れる「プチブル的倫理観」から出る父親の行動の恐ろしさを骨身に染みて理解している。息子であるフレッドは、父親の影響力を肌で感じて「死」の恐怖を抱く。しかしながら、この意識こそが「プチ」に過ぎないのである。

このことを、ヴィンシー氏は自ら吐露してしまっている。その発言を見てみよう。フレッドからガース家の婿になることで自分ひとり分の食費相当の収入しか見込めないことを打ち明けられたとき、当のヴィンシー氏は、次のように答えている。

「食費だって！ばかな。」うっかりすると彼の食卓から、今後、息子の食べ物が見えなくなるかもしれないと思うと、ぞっとして、ヴィンシー氏は我に返った。「勿論お母さん〔ヴィンシー夫人〕はお前〔フレッド〕に居て貰いたいのだ。しかし、俺は、お前の馬は一頭も飼ってやらないぞ。そして自分の着るものは自分で買うがいい。今までよりも、一、二着少なくなるかもしれないな。自分の懐から出さなきゃならないとなると」(568) ([]内、筆者)

他家へ婿入りすると聞いて、彼は、自分と食卓を一緒に囲めなくなるから息子の食費が要らなくなる、とか息子専用の馬の飼い賃（えさ代や馬具等の維持費）や衣服代を合計した金額程度の経済規模を想定している。衣服代にしてもフレッドが自分で買った場合との差が「一、二着」しかないということにも驚かされる。ヴィンシー氏は親として息子に対してさえ今まで服の「一、二着」が買える程度の経済的負担をしてこなかった父親だ、ということになる。こうなってくると「ヴィンシー氏が息子にかけていた期待」とは、彼自身のヒューマニティそのものである。「思い遣りの無さや、自分本位な愚かしい考え」というものが「混じっていた」程度ではなく、彼は「思い遣りの無さや、自分本位な愚かしい考え」だけで満たされていた人物である、と言った方が正確ではないだろうか。

よってここにヴィンシー氏の「プチブル倫理観」が顕著に現れているということが証明できる。

I.6.4. 『ミドルマーチ』における代表者——③フレッドの場合

フレッドはもともと牧師の家柄であったヴィンシー家を継ぐべく教育を受けたヴィンシー夫妻の息子であることは、前にも述べた通りである。両親の「プチブル的倫理観」の違いから出るフレッドに対する対応の違いに、彼は気づいていないことも面白い。その場面を見てみよう。

実を言えば、ヴィンシー氏が息子にかけていた期待には、多分に自尊心や、思い遣りの無さや、自分本位な愚かしい考えが混じっていた。しかし失望した父親は利用出来る強力な手段を握っていた。で、フレッドの方は、まるで呪われて追放されるような感じがした。(568)

「ヴィンシー氏が息子にかけていた期待」とは、「大多数の紳士階級の子弟がそうであるように」(567)の表現が示す通り、実業家であり、今はミドルマーチの市長でもある父親の後を継ぐ事が含まれる。フレッドは自分が父親の今の地位や財産を受け継がないため、父親を怒らせてしまった、と思いついでいる。フレッドは、明らかに勘違いをしている。彼は、ガース家の婿になることで自分ひとり分の食費相当の収入しか見込めないことを父親に打ち明ける。その時、彼は、当のヴィンシー氏に「うっかりすると彼の食卓から、今後、息子の食べ物が見えなくなるかもしれない」と思わせ、「ぞっと」させ、ヴィンシー氏を我に返らせた(568 参照)のである。その後彼はすぐに続けて父親から、「馬を飼ってやれない」とか「衣服の出費が一、二枚程度分収入に食い込む」(568)とか言われて、経済的援助の打ち切りを宣言される。父親の言った言葉の意味に気付かずに、フレッドは、自分ひとり分の食費相当の収入しか見込めない旨を伝え理解して貰おうとしている。彼はガース家に婿入りすることになっても親元に住み、ガース家の仕事を手伝って得た収入を彼の食費として家に入れるつもりでいるのである。親子の意識の差がはっきり違うのにも関わらず、家を追い出されまいと彼は、弁明する。

フレッドは立ち去りかねていた。まだ言うべきことがあった。やっとそれが口に出た——「お父さん、握手して下さいませんか、お父さんを怒らせてしまったのを、許して下さいませんか」

ヴィンシー氏は腰かけたままで目をあげ、歩み寄った息子に素早い一瞥を与えた。それから手を出して、そそくさと言った。「分かった、分かった、それ以上は言うな」(568-9)

「お父さん、握手して下さるでしょうね」、「許して下さるでしょうね」という言葉の意味は、食費を入れることで父の後を継がず、期待を裏切ったことを許してもらいたい、というフレッドの気持ちの表れである。それではあまりに「許して下さるでしょうね」という言葉が哀れに感じられる。読者は思い遣りのない父親に対し、必要以上に恐れる息子の姿に同情を禁じ得ない。

ヴィンシー氏は、フレッドの必要以上に「歩み寄った」という態度や具体的に握手するという行為で父親の許しを得たことを確かめたい、という気持ちのこもった言葉の重圧に耐え切れなかったのである。だから許しを求めて言葉の次に「歩みよった息子にすばやい一瞥を与え」、「それから手を出して」冷たくこれ以上の言葉を聞きたくなくて、「そそくさと言った」ことになる。

食費を入れて親に負担をかけまいとする、大人として、フレッドは立派な自覚を持っている。生きる為に一番必要なのは食べることではある。しかし父親もそうなのだが、彼は、食費という程度の金額に非常に拘っている面がある。

親子であるから性格も似て当然なのだが、エリオットは細かい金額に拘る彼の一面を強調して描いている。フレッドは牧師の家系に生まれ、そのための教育を受けたにも関わらず、抜けきれない庶民の家庭における考え方や金銭感覚を示している。ここに、フレッドの「プチブル倫理観」が顕著に現れている。

I.6.5. 『ミドルマーチ』における代表者——④ブルック氏の場合

ブルック氏は「小地主」、ジェントリーと言われる階層に⁽⁶⁾属する。彼の場合、「年収3,000ポンドと推定される財産」(9)がある。

これだけの地代収入は、この地方の人から見れば、莫大な財産である。なにしろ、この土地の人たちは、カトリック問題について先頃[1829年]ピール氏がとった処置

[カトリック信者開放案の議会通過] を未だに話の種に論じ合っている有様で、やがて将来、金鉱が発見され、その結果、豪勢な財閥が現れて、上流階級の生活必需品がひどく値上がりすることなどは、夢にも知らなかったのだから。(9) ([]内、筆者)

このようにブルック氏は「上流階級」とまではいかない。が、ミドルマーチでは「莫大な財産」と呼ばれる地代収入があるため、「プチブル的倫理観」と言われた意識を持っていた。故に、更に彼の「プチブル倫理観」という意識が見られる箇所を挙げていきたい。

第38章で彼の選挙立候補を諦めさせようと、教区長やチェッタム卿たちが話し合っている場面を見てみよう。彼は、教区長やチェッタム卿たちとの話し合いの場で、次のように言っている。

「しかし地代が滞っていても、私と同じように、小作人を苦しめない地主がいたら、聞かせて頂きたいですね。私は昔からの小作人はそのまま置いておきます。並外れた呑気屋なんですな、私は。全く並外れた呑気屋なんですよ。」(385)

ブルック氏は地代が滞っていても取立てを催促したり、他の物を取り上げたりしない、と言っている。彼は小さい事に拘らない人間だから、地代くらいの金額に目角を立てないという意味のことを含んで話をしている。それとは反対に、彼を批判する者たちは次のように言っている。

「それに、自分が背負い込んだ勘定書を払うのは殉教とは言えませんわ」(384)

これは、農作業をしているかのような恰好をするのが好きな女性であるカドウォラダー夫人による、当のブルック氏がやって来る前の発言である。カドウォラダー夫人の発言によって、彼は「呑気屋」ではなく、地代を支払わない小作人に徴収をしないし、催促もしないで、で上に立て替えて納める、ということである。彼は其の事で善い行いをしている、という意識でいる、ということが分かる。地代くらいの金額で「並外れた」金額を待ってやり、立て替えて支払ってやっている、と大げさに表現する点、福音主義者としての「寛大さ」と「呑気さ」とを勘違いしている点で本物のブルジョワ階層の意識ではないことが

明らかである。よってブルック氏は「プチブル倫理観」の代表者といえよう。

I.6.6. 『ミドルマーチ』における代表者——⑤ソロモン・フェザーストウンとウォール夫人の場合

ソロモンは老フェザーストウンと兄弟である。エリオットは老フェザーストウンとソロモンと年齢の点でどちらが年上かを明確にしていない。何故か量しているのである。しかし、この時代の家父長制度が順当に適用されていると仮定すれば、老フェザーストウンが長男故に財産を独り占め出来ているのは、彼が男兄弟の中で一番年嵩だから、と考えるのが自然である。故にここでは、ソロモンを老フェザーストウンの弟と仮定して、話を進めたい。

次に、ウォール夫人も老フェザーストウンの妹であり、ソロモンの妹でもある。なぜ彼女が両方の妹だと断定できるのか。それは、老フェザーストウンには、ウォール夫人を含め、ジェイン、ハリエットの3人姉妹がいる。そしてエリオットは亦も、彼女達3人姉妹について、年齢による上下関係をはっきりさせていない。だから、老フェザーストウンが全ての兄弟姉妹の長子であるかどうかは、分からないのである。しかし、ウォール夫人はソロモンのことを「兄さん」(553)と呼んでいる。よって彼女は間違いなくソロモンより年下である。然るに妹である。

二人の兄妹は、共に地主階級に属している。地主という点ではブルック氏と同じである。よって、こうした二人が「プチブル倫理観」を持った登場人物で、同じ地主でもブルック氏とはどのように、その意識面で異なっているかを、定義に当てはめて検証して見たい。

ミドルマーチに鉄道が敷設されることになった時、地主たちは其々、鉄道敷設の動きに対し賛成と反対に意見が分かれた。この時ソロモンとウォール夫人の二人は、鉄道敷設には反対の立場を採る。第56章でエリオットは、彼らの鉄道建設に反対の理由をこう述べている。

「大牧場」が分断されて、二つの三角形の小さな土地になる光景はありありと目の前に描いてみるが、そうなったらもう地所とは言えたものではないので、彼らの想像はそこで止まってしまって、それから先は考えられなかったし、又、陸橋を架けるとか、

良い値で売れるとか言っただけ、それはいつのことか分かったものでなく、これ（自分達の土地が鉄道建設のお蔭で、良い値で売れるようになる）は到底信じられなかった。

「兄さん[ソロモン]、鉄道がニアクロウズ牧場の中を通るようなことになれば、牛はみんな月足らずで生まれますよ」ウォール夫人はしんみり悲しげに言った。（553-4）

（[]内、筆者）

エリオットは第 56 章のイベント（‘event’）に、ミドルマーチで行われようとしている鉄道の路線を延長してレールを敷設する工事のことを取り上げている。エリオットは、再開発事業に伴って必然的に土地の値段が高騰することが、当時のイギリスの地方では初めての経験だったと解説している。地主たち、具体的にここでは、ソロモンとウォール夫人の二人にとって、自分たちの土地が鉄道建設の所為で高く売れるようになるのはとても思えない、との彼らの素直な気持ちを、エリオットは代弁している。

地価の高騰を招く点で、現代と変わりが無い様に思われる。しかし、現代の様に、既に百年以上も前に文明開化や産業革命を経験した後の時代に、そこに住む人々が感じる感覚と、農業社会から産業化、機械化という「産業革命」と呼ばれた変革期に、想像もつかない未知の世界を体験した当時とでは、「土地」に対する認識が全く異なっている事を、エリオットは端的に言い表している。

現代の私達ならば、たとえ鉄道の線路で土地が分割されても、線路部分を除いた土地の形に応じて、その土地の有効活用法を考えればよい、と考えるだろう。しかし、当時のソロモン達は、一纏まりの状態であってこそ土地というのは意味をなすと考えている。なぜならば、農業中心の土地活用であった為、耕作にしる、ソロモン達のように牧畜を行うにしる、一括して、かなり纏まった広さが必要とされたからである。ブルック氏は工藤、淀川両氏によるこの小説を翻訳した本の中の「主な登場人物」を紹介するページで、「地主」と紹介されている。農場を経営した場合、その「地主」は年 3,000 ポンドの地代収入があったとされる。（11 参照）そうであるなら、ブルック氏、ソロモン、ウォール夫人らは、年 3,000 ポンドの収入が見込める広さの土地を所有しているということになる。その土地の面積は左程広いとは言えないが、鉄道の線路が敷ける位の規模の土地を所有していたことになる。

このように彼らは自分達を、大規模牧場主だと認識している。それは土地の広さという

よりも、ブルック氏のように、地代収入が年 3,000 ポンドあるということの方が、ミドルマーチではかなりの「財産」(11)がある、と見做されているからでもある。

ブルック氏が「地代くらいの金額を「並外れた」金額だと大袈裟に表現するという事は、大した収入でもないのに、さも大金持ちになったかのような錯覚を彼の意識の中に起こさせる。この錯覚を起こさせるのと同様のメカニズムでソロモンとウォール夫人は大金持ちであるかの様なブルジョア階級並みの意識を持っていたとしても不思議ではない。ブルック氏が年 3,000 ポンドの地代収入のある地主故に「プチブル倫理観」を持ったという事は、即ち、ソロモンとウォール夫人も必然的に同様の倫理観を持ったという事になる。

エリオットは、開発や再開発に伴って必然的に土地の値段が高騰することが、当時のイギリスの地方では初めての経験だったことを解説した後に、「鉄道がニアクロズ牧場の中を通るようなことになれば、牛はみんな月足らずで生まれますよ」と言うウォール夫人の言葉を持ってきている。この時、ウォール夫人は、当時の最先端とは言え、19 世紀後半の技術水準による鉄道というもの（蒸気機関車が走る事）によって引き起こされる騒音や大気の汚れと「牛はみんな月足らずで」生まれることとの因果関係について、特に知識や何かの科学的裏付けがあって発言している訳ではないと思われる。何故ならば、彼女は単に裕福なフェザーストウン家の娘として育った女性に過ぎない。彼女は列車の通る音を聞いた経験も無いのに、どうやって鉄道が牛に及ぼす影響を推し量る事が出来ようか。おまけに兄の老フェザーストウン氏の死後に現在の土地を相続した結果、地主になったばかりである。それ迄はウォール家に嫁に行き、家庭に入り、主婦をしていたのだから。よって彼女は、牧場の経営に詳しい筈はない。というのも、老フェザーストウン氏の死は第 33 章で描かれていて、今回の鉄道敷設の話が持ち上がるイベントについて叙述されているのは第 56 章である。章数の上ではこの小説全章 86 章の内、23 章も離れているから、相当の時間が経っているように思いがちだが、実際には章数の差程も経っていない。この事も含めてウォール夫人は、地主が高収入を得られる地位であるかのように錯覚したままである。彼女は地主になって、まるでブルジョア階級にでもなったかのような金銭感覚に戸惑いながらも、一方でそれとは対照的な家庭の主婦の持つ一般的な小市民感覚（彼女の場合、家計の遣り繰りの際に発揮され、経験を経て上手になるもの）も持っている。この小市民感覚故に、彼女は「プチブル的」だ、と言える。

一方のソロモンは、自分の土地に鉄道線路を敷かせない為に、ならず者をけしかけて妨害し、測量士たちを追い払おうとする。そして土地の明け渡し交渉で、ごねればごねる程、

線路敷設の仕事を進めたい側は、多くの金額を支払うだろうとの算段をする。このような考え方をすることによって、実は、彼は自分が「プチブル的倫理観」を持っている人間であることを証明してしまう結果になっている。真のブルジョア階級の者ならば、正規の商取引や正面切った交渉で以て、楽に大金を設けられる事を心得ているから、ならず者を必要としない。ならず者ら反社会的勢力と手を組んで儲けようとする点で、ソロモンは倫理面に於いて、遥かにブルジョア階級のそれからは、劣っている。ミドルマーチ周辺ではブルック氏同様、相当な「財産」(11)を持っている筈の彼は、交渉に臨むに当たっての意識と社会的立場とのギャップが大きい。即ち、彼はブルジョア階級並の収入も無いのに、意識だけはブルジョア階級に属しているかのように錯覚している。そうした一方で労働者並の、低俗な考え方をしている。

以上の事柄の積み重ねにより、ソロモンが「プチブル的倫理観」の持ち主であるということが証明されたと考える。

註

- (1) 「プチ・ブルジョア」、ブリタニカ国際百科事典第5巻改訂版(全6巻)(株式会社ティービーエス・ブリタニカ1988年), p. 500.
- (2) 「ブルック一族」という表現にしたのは、ドロシア、シーリアの姉妹とブルック氏とは伯父、姪の関係だからである。彼女たちの父親が亡くなった為、親類であるブルック氏が未成年であったドロシアたちを引き取った。因みにこの物語が始まる時点で、彼ら3人が一緒に暮らし始めて一年が経とうとする頃という設定が、作者エリオットによってなされている。
- (3) 「モラリズム」、『ブリタニカ国際大百科事典』1974年, pp. 765-8.
- (4) 「モラリズム」、『広辞苑』第六版(岩波書店、2008年), pp. 1450.
- (5) その理由の一つとして、パソコン上の検索エンジンシステム、Japan Knowledge+ (ジャパンレッジプラス) で引くと「陰謀」(conspiracy) とは「密かに企てるはかりごと、謀反、悪事の相談、またその相談をすること」(『日本国語大辞典』) とある。
- (6) 岩間俊彦『イギリスミドルクラスの世界——ハリファクス 1780—1850』(ミネルヴァ書房、2008年)。

Ⅱ.1. フォイエルバッハのヒューマニズム

Ⅱ.1.1. フォイエルバッハのヒューマニズム (Feuerbachian Humanism)

Ⅱ.1.1.1. ヒューマニズムとジョージ・エリオットについて

ヒューマニズムについての一般的な定義には、語義、内容は多様であるものの、人間性の尊重、人間の解放を目指す思想、態度が含まれている。ヒューマニズムは、ヨーロッパの伝統として保たれている。18世紀から19世紀にかけて特にドイツで啓蒙思想に対する反動として盛んに唱えられ、エリオットが関心を持ち、影響を受ける遠因ともなった。

また、ヒューマニズムとは、ルネッサンス期(14～16世紀)に、ギリシャ古典に直接触れることを糸口にして、腐敗していたとされる教会の一部の幹部たちによって主導された中世封建社会からの人間解放を求めた知識レベルでの潮流^②のことをも指す、ともされていることから見ても、様々な意味で従来の価値観を再検証していたエリオットが関心を持ったことは、容易に理解できよう。

Ⅱ.1.2. 『キリスト教の本質』に於ける「フォイエルバッハのヒューマニズム」と『フロス河の水車場』

先ず、フォイエルバッハが、著書『キリスト教の本質』の中に表されていることが、彼独自のヒューマニズム(人間中心主義)理論⁽³⁾である。取分け「神の意識は、人間の自己意識であり、神の認識は、人間の自己認識である」ということについての、彼の解釈に依ると、「神」を人間とは別な他の存在者と想定し、「神」を自己の外に在って尚且つ自分自身が人間として持っている、そして最も尊いものを全部「神」の所有物となし、自分は全く卑しい虚無的な存在であると位置付けている。

フォイエルバッハは、人間が「真、善、美、聖」を作り出したのであり、そんなものは実在しないと規定する、後の彼独自の唯物論的思考の確立に繋がる立場をとるようになって

いく。これを滝沢（1978）の分析に当てはめると、フォイエルバッハは著作『キリスト教の本質』の中で彼の主張したヒューマニズムがフォイエルバッハによる宗教の人間学化であり、人間を当時のキリスト教会の呪縛から救うものであったと位置づけられる。後に彼独自の唯物論を確立し、さらに信仰面に於いては、無神論的立場に移っていくことから見て、フォイエルバッハは「神」を人間が脳の中で創りだしたもの⁽⁴⁾であると認識していたと言えよう。

II.1.3. 『フロス河の水車場』 作中に於ける「フォイエルバッハのヒューマニズム」の例

II.1.3.1. 検証①——スティーヴンの場合

教会の説く、イエスを人間と見なし、彼を信仰の対象とすることを否認し、人間が救われること（人間のキリスト教会からの解放）を中心に物事を考えているのが「フォイエルバッハのヒューマニズム」である。この定義に従って『ミドルマーチ』作中に「フォイエルバッハのヒューマニズム」の見られる場面を分析しようと思えば、具体的に、例えば、聖オッグの因習的慣習から外れた「悪いこと」をしていたとしても、そもそもの基となる「善」というもの自体が、聖オッグの町に歴代住んできた人々の作り出した概念に過ぎず、実在しないのだ、と考えている、又は考えられるようになる人物の具体的な場面を探せば良いことになる。こうした条件下で真っ先に思い浮かぶのが、スティーヴンである。

彼はこの物語を通じて、非常に独善的であり、エリオットも会社経営者の御曹司らしく我が儘な性格を加味して、「真、善、美（聖）」というものが人間によって作り出されたものだ、そんなものは実在しないのだ、ということをより強調するかのよう描いている登場人物である。よってスティーヴンについて以下に、具体的な場面に於いて検証していく。

まず、彼について取り上げる場面は、聖オッグの町の「上流」階層と呼ばれる人々が集まるパーティーで、スティーヴンがマギーの肉体美を誉め接吻する印象的な場面があって、この時の感動した勢いが余って、川遊びのボートでマギーと駆け落ちを実行してしまったスティーヴンだが、たまたま通りかかった荷船に乗り換えることになる。その後で、著者エリオットが語り手（narrator-character）として登場し、解説する。そこでスティーヴンに

見られる「フォイエルバッハのヒューマニズム」についての分析を説明する為、以下の場面を引用する。

スティーヴンは勝利者のように幸福であった。マギーは必ず自分のものになるという確信は、他の思考であろうと懸念であろうと、ことごとく茫漠たる遠景へ投じてしまった。……彼は心の孤疑に苛まれてきたのだった。自分を打ち倒す程の愛情とも激しく闘ってきたのだった。躊躇してきたのだった。……二人[スティーヴンとマギー]が一つになる生活は至高の幸福に違いない。——彼女と共にあるならば、平凡なその日その日も恍惚のうちに暮らせるであろう……彼には他のあらゆる幸福にもまして、貴重である——彼女と別れることを除いては、彼女のためにすることはいかなることも、難しくはない。(489) ⁽⁵⁾

ではこの箇所の何を以って「フォイエルバッハのヒューマニズム」が具現化されていると言えるのか。まず、上記の引用内で「心の孤疑に苛まれ」、「躊躇してきた」と、エリオットはスティーヴンが彼の心の中で辿ってきた過程を解説している。この場面で使われている「心の孤疑」は「懸念」とも表現されている。

では、この場面で「懸念」と表されているのは、何に対しての「懸念」であるのか。この小説で描かれている聖オッグの町では、多くの人々は殆ど因習的に形式上、「神」を信じ、「神」に祝福されて「結婚」という制度が成り立っていることにしている。つまり、スティーヴンの駆け落ちという行動の末のマギーとの生活が、彼が育ってきた、聖オッグの町の因習に拒絶されるのではないかと、という「懸念」が彼の「心の孤疑」である。結果的にスティーヴンはマギーと駆け落ちをしてしまった。そのことで彼は、「神」を信じるのが前提で成り立っている、聖オッグの町の因習に拒絶されるようなことをしてしまったのではないかとという「疑い」を「独り」抱えていた。そうした彼の精神状態を、エリオットが、「孤疑」の状態にあると表現しているのである。ところが、実際スティーヴンが実際に駆け落ちを実行してみると、側にマギーがいて、彼女がいることで彼は、「勝利者のように幸福」であったことに気付かされるのである。

マギーとの駆け落ちを実行したスティーヴンは、彼が拒絶されるのではないかとという「懸念」、即ち「心の孤疑」状態に彼を陥らせるところの聖オッグの町の因習そのものが、人間が頭の中で作り出したものに過ぎないものであるということを確認したのである。即ち、

ここでは、スティーヴンにとって、「心の孤疑」と「懸念」が、同じ意味合いを持つものであるということが分かる。そしてスティーヴンは、自分とマギーとが「一つになる生活は至高の幸福に違いない」との結論に至った。この時点で、スティーヴンは聖オグの町の因習に拒絶されるのではないかという「懸念」を「遠景に投じて」しまうことが出来たのである。故に、「懸念」を「遠景に投じ」たスティーヴンは、「フォイエルバッハのヒューマニズム」の特徴を満たしている登場人物であると、見なすことが出来る。

II.1.3.2. 検証②——マギーの場合

マギーは自分の育ってきた社会で「善」とされることの内容に不満があった。父親や兄の言うことは、どんなに自分では「善」と思えなくても従わされることに不満だった。だから、小金（子供の小遣い程度）であってもマギーはジプシーの世界では自分が女王になれたり、女王になって自分の「理想」を実現できたりするなど、自分の育ってきた社会のより、より良い「善」がジプシーの世界にはあると思った。故にマギーは家出し、ジプシーの居留地に行ったのである。

マギー達の住む世界ではお金を他人より多く持っていれば、「女王」(118)にでもなれる。彼女は家族の中での扱われ方に不満があった。故にマギーは水車小屋所有者の家に生まれた少女の持てるお小遣い程度のお金を持ってジプシーの女王になるつもりで家出をする。先ず、マギーがジプシーの世界に飛び込んで空腹を訴え、パンに糖蜜を求めて老婆とのやり取りをしていると「二、三間向こうに行きかけていた背の高い娘が戻って」(118) 来た場面を分析することから始めたい。

老婆はマギーの空腹のことなど忘れてらしく、勢いついて焼串を鍋に突っ込み、若い方の女は天幕の下へもぐり込んで、大浅皿やスプーンを取り出したのだった。マギーは少しばかり身震いした。そして危うく涙が出そうになった。一方で、背の高い娘が甲高い叫び声をたてると、間もなく、さっきマギーが通り過ぎた時には眠っていた男の子が走ってきた。トムと同じ年頃の、見るからに粗暴らしい男の子である。

彼は、マギーをじろじろと見ていたが、続いて意味の分からぬ言葉で喋りたてた。彼

女は非常に心細かった。そしてもうすぐきっと泣き出すのではないかと思った。ジプシーたちはマギーのことなどまったく念頭にないらしい。その中にあってマギーは、自分の全く無力であることを感じた。……こういう人達の女王になろうとか、又は、彼らに興味のある有益な知識を受けようとかしても、それは不可能なことだとマギーは感じた。(118)

マギーはジプシー達の中では一番の「金持ち」である筈なのに、食事の割り当てを仕切っていると思われる女が戻って来る姿を見た途端、マギーに食べ物を勧めてくれていた老婆でさえも「マギーの空腹のことなど忘れてらしく」、他の「若いほうの女」や「男の子」たちを先頭に、自分達の空腹を満たす準備を優先してしまう。

自分の持っている「お金」でジプシー達がチャホヤしてくれなくなった無力感にマギーは襲われるのである。家族、特に父親や兄という男性から「善」についてとやかく言われるよりももっと非道い扱いを受けたのである。マギーはジプシー達から、空腹であっても、無視されたからである。

兎に角今目の前の、自分が食べる以外は構ってられない。どんなに相手が自分達よりお金や「興味のある有益な知識」も、食べて生き延びる以上のことを必要としないジプシー達にとっては必要とされないであろうことも、マギーは察知する。

マギーはお金以外にも銀の指貫をしていた為、あるジプシーの男に目をつけられる。この男はジプシーの世界では、ごく普通の労働者の一人であり、とりたてて泥棒を生業としているのではない。しかし男はマギーが女に預けたつもりの指貫を、何も言わずに自分のものにして、銀の指貫以外のものは女に渡して女を通じて返して来た。口ではマギーが自分たちとくらしに来たことを「うん、嬉しいね」(119)と言った舌の根も乾かぬうちに、である。

確かにこの人達[ここにいるジプシーたちすべて]は泥棒だ、さもなければ、あの男は間もなく、あの指貫を返してくれる筈だ。もともとあの指貫は、少しも惜しくはないのだから。欲しいと言うなら、喜んでやりましょう。しかし、泥棒の仲間に交じっていると考えると、例え、みんなが再び自分に敬意を示したり、気を遣って [いたり] してくれても、居心地良くは感じられなかった。泥棒というものは、ロビン・フッドは、別だが——みんな悪者ではないか。(119) ([] 内、筆者)

ところが、自分が育っている世界で、父親の言うことが「善である」とされることなどを息苦しいと思っていたが、ジプシーの世界に飛び込んでみて、初めてそんな程度のことで済まないと分かった。ジプシーの世界では泥棒することを「善」とされていた。マギーはその事実を目の当たりにして、「理想」とか「善」といった概念が夢、幻であることに気付かされ、自らの「無力」を悟るのである。

「こういう人達の女王になろうとか、又は、彼らに興味のある有益な知識を授けようとかしても」(118) そもそも教える前提であるはずの「善(悪)」についての認識が一致しないどころか、もともと存在していなかったかのようなジプシーの社会を見て、「不可能なことだ、とマギーは感じた」のである。

ではこの箇所を以って「フォイエルバハのヒューマニズム」が具現化されていると言えるのか。それはこの場面でもやはり、「善」というものの存在を夢、幻のように描かれているように受け取れるからではないだろうか。つまり、「悪」という概念は、「善」という概念が成立又は、実在していないと成り立たないのである。

しかし、この場面のように社会が変わると、泥棒をしないという「理想」とか「善」といった概念が夢、幻であることにマギーは気付かされ、自らの「無力」を悟るのである。

マギーが「理想」とか「善」といった概念が夢、幻であることに気付かされ、自らの「無力」を悟らされるということが、エリオットが「善」というものを否定しているように受け取れるという、この場面での効果を生み出していると言えよう。

故にこの場面では「善」や「理想」に象徴させているが、そういった概念は、人間が作り出したものであり、「真、善、美、聖、理想」といったものに絶対的な規準など、実在しないのだという考えが見られる。故にマギーの場合、彼女が少女時代の、ジプシー居留地に家出したこの場面に関し、彼女の考え方が「フォイエルバハのヒューマニズム」の考え方によって「理想」とか「善」といった概念が夢、幻であることを悟る様が具現化されていると言える。そのことを更に別の表現で言い換えれば、少女時代、ジプシー居留地に家出した時のマギーは「真、善、美、聖、理想」というものが人間によって作られた存在しないものだとする、「フォイエルバハのヒューマニズム」という、人間を中心にして物事を捉えようとする考え方になっている、とも言えよう。

註

(1) 特に影響を受けたとされる「高等批評」と G・エリオットとの関係についてだが、当時の彼女はドイツで起こっていた「高等批評」運動から強い影響を受けていた。「高等批評」運動とは、キリスト教に於いて、それまで神とされてきたイエスを人間と見なし、歴史上の他の英雄たちと同列に扱おうとする運動のこと。

(2) 「人文主義」、『小学館大百科事典』第5版、1985年, pp. 1875-6.

(3) この「フォイエルバッハのヒューマニズム」は3つの特徴に分けられる。それらの特徴を箇条書きで列挙すると、i) 人間中心に物事を見るということが、キリスト教に於いて、それまで神とされてきたイエスを人間と見なすことだとしたこと、ii) 神の意識は、人間の自己意識であり、神の認識は、人間の自己認識である、と定義付けし、そしてさらに、iii) キリスト教の教理では、神は愛である(121)⁴と「宗教的愛」について触れて、その倒錯性を批判している、といった点にある。

(4) そしてさらに、彼はキリスト教の教理では、神は愛である、と述べていて、「宗教的愛」について触れ、批判している。ルドウィッグ・フォイエルバッハ、桑田悟郎譯『キリスト教の本質』（改造社、1932年）, p. 121.

また、エリオットの英訳本、*The Essence of Christianity* の中で、フォイエルバッハが「神」と「宗教的愛」について述べている部分がある。そこでは、最も内的で最も真実な心術である愛でさえも、宗教心を通して、単に外見的幻想的な物になるからである、ということが述べられている。というのも、宗教的な愛は人間をただ神の為に愛するにすぎず、従って、単に外見的に人間を愛するに過ぎず、実際はただ、神を愛するだけ、ということになるからである。

(5) Eliot, George. *Middlemarch, Edited with an Introduction and Notes by Rosemary Ashton*, London: Penguin Books, 1994. 以下、原文からの引用を示す、括弧内の数字はこの本をテキストとし、翻訳は工藤好美、淀川郁子訳『ミドルマーチ』I、II巻（講談社、1975年）を参照させて頂いた。

II.2. ロマン主義的自己目的達成

II.2.1. 『フロス河の水車場』に於けるロマン主義的自己目的達成

II.2.1.1. ロマン主義的自己目的達成の定義とその関連事項

「ロマン主義的自己目的達成 (Romantic Self-achievement)」という語は「ロマン主義」と「自己目的達成」とを結合させた、テリー・イーグルトン (1992) の造語と言える。ロマン主義とは、18 世紀末から 19 世紀にかけて、ヨーロッパに興った芸術上の思潮で、古典主義、合理主義に反抗し、感情、個性、自由などを尊重、自然との一体感や神秘的な体験や無限なものへの憧れを表現したもの⁽¹⁾である。

そして「自己目的達成」は読んで字の如く、自分の目的を達成することである。エリオットの場合には、小説の中で、登場人物にそれぞれの目的を達成させる場合に、周りの倫理観、思考を無視して、唯ひたすら各自の持つ理想 (主義) の実現を図るところが見られる。

この自己目的達成の考え方が、単に利己的だけでない、感情、個性を尊重した神秘性や無限性の追求という特徴を併せ持っているのだということを、この作品にとって特徴的な登場人物 3 人を例に立証していく。

II.2.2. 登場人物に見られるロマン主義的自己目的達成についての具体的検証

II.2.2.1. スティーヴンに見られるロマン主義的自己目的達成

『フロス河の水車場』の登場人物の内では、スティーヴンに、ロマン主義的自己目的達成の観念が、最も典型的に見られると言えよう。スティーヴンは 19 世紀、産業革命後に、新しく興ってきた富裕層としてブルジョア階級に食い込んできた父親の息子で、いわゆる御曹司として描かれている。そのため、古典主義に反抗し、感情、個性、自由などを尊重するという点に於いて、スティーヴンの思考や行動は、ロマン主義の特徴に合致している。

彼は町の有力者の息子なので、自分の思い通りにやれば、周りも認めてくれると高をくくっているところが見られる。

「あなた [マギー] は僕 [スティーヴン] を殺そうと言うんですか？今となってそれが何になるのです？何もかも出来上がってしまったじゃありませんか？」(略)「察して下さい——僕の言うことを聞いて下さい。今日はあなたの言うとおりにになります。——あなたが十分承諾なさらなくては何もしません。」彼はもっとも効果のある懇願の言葉を選んだのであった。(494) ([] 内、筆者)

マギーと駆け落ちという行動に出て間もなく、マギーが翻意し、いよいよ乗ってきた船を降りようとする時に、スティーヴンが発する言葉の内、前半部分の抜粋が上記の引用箇所である。工藤・淀川両氏の訳が「言うんですか」と「言うのですか」ではなく、「言うんですか」となっている点に、スティーヴンが元々教養のある上流階級の出身ではない、新興の成り上がり者の出であることが仄めかされている。そして、マギーという女性側からの別れを切り出されて、「何もかも出来上がってしまったじゃありませんか？」と発する所に、彼は町の有力者の息子なので、自分の思い通りにやれば、周りも認めてくれると高をくくっているところが見られる。「今日はあなたの言うとおりにになります」ということが、普段は相手の意思など無視して、感情のまま振る舞っているか、又は、スティーヴンの自由になっているということを指している。

スティーヴンは、自分が町の有力者の息子なので、「懇願」すれば好きになった女性でも自分の願いを聞いてくれるだろう、と思っている。

彼はマギーという、自分の好きになった女性を手にいれるという、自己目的達成の為なら、聖オグの古い道徳や慣行を無視して、自分の感情、個性、自由などを尊重（優先）するという点ではロマン主義的である、と言えよう。

スティーヴンが自分の感情、個性、自由などを尊重（優先）するロマン主義的立場からマギーだけでなく、彼は出会った女性を必ず自分に振り向かせたいという自己目的がある登場人物である、と見なせる。彼は歌を含む言葉を、女性を自分に振り向かせることを第一目的に用いる傾向がある。この目的を達成しようとする際、彼はマギーを自分のものにしてと駆け落ちした時とは異なる手法、即ち歌や言葉を使っている。その特徴的場面を3つ選び、一括して並べて分析してみたいと思う。先ず、第6部第2章でスティーヴンが

婚約間近のルーシーからマギーを紹介された時の場面を例に挙げる。

ルーシーからマギーの身体的特徴について聞いていたスティーヴンは、マギーに向かって次のように言う。

あなた [マギー] のお髪は薄色で、青い眼をしていらっしゃると (ルーシーが) 言うんです。(391) ([] 内、筆者)

ここで言われている「青い眼」という表現は、19世紀当時のヨーロッパ上流階層の間で、女性に対する世辞表現の一つとして日常的に用いられていたことを、マギーのそっけない対応と発話が示している。ここでもスティーヴンは自分が発した言葉を、女性を自分に振り向かせるという自己目的の達成の為に用いている。

「まあ、あなた [スティーヴン] は、うまく言い抜けておしまいになりますのね。今の場合 (初対面の女性に接する時)、あなたとしておっしゃらなければならないことをおっしゃいましたわ」

彼女 [マギー] は彼 [スティーヴン] を挑むような眼差しで見た。(391)

マギーの「挑むような」スティーヴンへの態度に、彼は、「これは (マギーを振り向かせるには) なかなか手強そうぞ」(392) と感じる。

スティーヴンは、薄色の髪や青い眼の色 (眼が青いことはヨーロッパの人々の誇りでもある)⁽²⁾ を褒めてもマギーが自分に振り向かず、うつむいて針仕事しているので、「手強そうぞ」と感じた。原文で“amount of devil there (相当数の悪魔がいる)”と表現されており、ここでスティーヴンの言う「悪魔」とは「自分に振り向かせるための障害」の意味であると言えよう。スティーヴンにとって、マギーの中の「自分に振り向かせるための障害 (悪魔)」を取り除くことが、この時彼の当面の自己目的となった。そしてスティーヴン自身の発話の形で、次の様にマギーに対して言葉を用いる意義について、彼なりの理由が説明されている。

ただ口先だけのお世辞というものだって真実である場合もあるようですね。僕 [スティーヴン] が『ありがとう』と言うときは、しばしば感謝している場合なんです。

気に入らぬ招待を断る時に必ず用いられるのと同じ言葉を使わなければならないのですが、これは僕として相当辛いところですよ。」(392) ([]内筆者)

スティーヴンは「気に入らぬ招待を断る時に」も「ありがとう」と言う、と説明する。しかし、マギーに対しては心の底から感謝して「ありがとう」と言っている、としているのである。詭弁とも偽善とも受け取れるスティーヴンの説明の矛盾について、エリオットが言葉というものが「さまで意識していない目的に、どれ程左右されるものであるかに」(479) 気付けば、「スティーヴンのこの矛盾をも了解」(同) 出来る、と解説している。

つまりスティーヴン、ただ、ひたすら出会った女性(この場面ではマギー)を自分に振り向かせるという、彼の自己目的達成の為にだけ用いている。だから、こうした偽善的矛盾した言葉を発したのであり、彼は相手の女性に対して騙すとか、詭弁を弄する等の高度な意図を有していない、ことを意味していると言える。

以上の考察から、スティーヴンは、寧ろ純粹であり、典型的ロマン主義的自己目的達成観を持った登場人物である、と言える。

II.2.2.2. トム・タリヴァーに観られるロマン主義的自己目的達成

『フロス河の水車場』の初版(1860年)が刊行された19世紀後半のイギリスに於いて、トムが学ぶ大学も、聖職者という知的面での特殊な階級の人間になるための特別な学校(機関)ではなくなってしまうことが、小説からも読み取れる箇所がある。従ってトムにとってのラテン語学習、即ち神学を通して「神」やキリスト教について学ぶことは、文字の読み書きを学ぶことと何ら変わらない。ただ、英語より高度で聖職者という専門分野で使われる言葉である、という点だけが違う。大学で学んだというより高い学歴、ラテン語も書けることによって、より良い仕事に就くための手段を得る過程での一つに過ぎないのである。そのことが読み取れる場面を以下に例として挙げる。

[父親とグレッグ氏以外のトムの伯父の一人の発話]「やあ、お若いの、おまえさんの読み書きを役立てて貰おうかと、わしらは話していましたのさ。お前さんはすっかり

学問をしたんだから、今じゃ立派にかけなさるだろう。」「そうとも、そうとも、」グレッグ伯父は親切気から、いましめ顔に言った、「今日までに、お前さんのお父つあんは、あのおりの大金をかけなしたんだから、長らくこの学問をしたことが、どんな役にたつか、見せて貰わなきゃならん。」(223) ([]内筆者)

第3部第3章のこの場面はトムの伯父のグレッグ氏と父親とのやり取りを記している。最初の発言者である、父親とグレッグ氏以外のトムの伯父の一人の発話の部分は、工藤・淀川両氏の翻訳では、漢字の部分が殆どひらがなになっていて、このトムの伯父の一人が無学、無教養であることが示されている。それに続いて「長らくこの学問をしたことが、どんな役にたつか、見せて貰わなきゃ」とグレッグ伯父が言う。「この学問」とはラテン語を学ぶことを指す。父親を「お父つあん」と呼ぶグレッグ氏の言い方も、決して教養があるとは言い難い。水車小屋を運営する、ジェントリー層で、末端とは言え支配階級の出である一族の集まる、この場を一応の世間と見なせるとする。トムの親戚である彼等の間でさえも、聖職者という、人間の職業というよりは、神聖で特別な金銭とは無縁の存在になるための修養であった学問(ラテン語)を学ぶことが、より「大金」を稼ぐための、「一手段」という程度の認識しか得られなくなっていることを物語っている。

これは、キリスト教に於いて、神聖にして唯一絶対的存在として「特別」である筈のイエスを、歴史上の一有名人物として位置づけようとした、ドイツの「高等批評」運動の考えに基づいた物事の捉え方(解釈の仕方)の構造に酷似している。

トムにとってはラテン語を学習するところからより良い仕事に就くこと(その時点迄)が、彼の第一の「自己目的」ということになる。そして、伯父達の言う「役に立つ」ことの中には、多額の借金をした父親の役に立つ、ということ指している。父親のした借金が、トム達家族の所有していた水車小屋を手放すことに繋がっていく、小説の筋の展開を鑑みれば、トムにとっての第二の「自己目的」とは、お金を稼いで貯め、人に奪われた父の水車小屋を取り戻すことである、と言えよう。結果として小説内では、トムは一度奪われた水車小屋の新しい所有者の下で、水車小屋の管理人という屈辱に耐えてお金を貯め、水車小屋を取り戻している。トムは、お金を稼いで貯め、人に奪われた父の水車小屋を取り戻すという、第二の「自己目的」を達成している。

当時(19世紀後半)、古典主義、合理主義に反抗し、感情、個性、自由などを尊重し、自然との一体感や神秘的な体験や無限なものへの憧れを表現しつつ、自分の目的を達成す

るといふ「ロマン主義的自己目的達成」には、様々な形が存在することが、『フロス河の水車場』にも描かれている。その中で、トムの場合には、「高等批評」の考え方を伏線としたロマン主義的自己目的達成の考え方が観られると考える。

II.2.2.3. マギー・タリヴァーに観られるロマン主義的自己目的達成

ジプシーと言われ、不満を募らせていた八才のマギーは裕福なゲアラム教区にある叔母の農場に行った帰りに家出を決意する。彼女は自分達より下の階層であるジプシーの世界なら、ジェントリー階層では、子供の小遣いに過ぎない六ペンスも彼らジプシーにとっては大金だから、彼女自身はお姫様として、いやあわよくば、現ジプシーの女王の後釜になれるかもしれないとの期待を持っていた。しかし、当初はマギーの着ているものをみて「お姫さま」と呼んだジプシーの老婆も、紅茶やバターを要求するマギーの態度に見切りをつける。紅茶の葉っぱやバターといったイギリスでの生活必需品すら満足に買えない位、ジプシー達の収入は少なく、貧しいのである。マギーの持っている六ペンスのお金すら、ご多分に漏れず、ジプシー達が当時のイギリス政府の政策に対して抱いていた不満のはけ口として、マギーは彼らの妬みや怒りの身近な標的にされてしまう。マギーの育ってきた社会では盗み、妬み、貪欲といった悪い思いが人の心の中から出て来る、そしてその人を汚してしまう（マルコによる福音書 7:21-23）とされていた。故に、例えば聖オグの町の人々はそうした悪い思いが心の中から出てきそうになったら、汚れないよう、思いや行動を自制しようと努力するよう求められた。なぜなら、汚れた（又は汚れていると周囲から認定されてしまった）人は周りより一段低く見なされ、社会から虐げられ、困難と苦勞の内に生きなければならなくなるので、その様な大変な苦痛を避けようと縛られているのが、マギー等の社会の常識となっていた。

ところが、ジプシーの人々は人の物を盗んではいけない、人を妬んだり不満のはけ口の対象にしてはいけない、といった聖書の言葉（とりわけ福音書）を礎にした教えの通りに、縛られていなかった。彼等の社会が、聖書（福音書）の言葉を倫理や行動の基準としない社会であることを、マギーは体験する。周りに次々に集まってくる怪しげな人たちに対し、自分の判断の甘さを悟ったマギーは通りかかった驢馬をつれたジプシーに家への道を尋ね

る。実家の製粉場と小麦粉運搬のため、出入りしたことのあるその男が途中まで親切にも驢馬に乗せてくれた。珍しく普段は気弱い父親のタリヴァー氏が娘可愛さの余り、妻や悪戯っ子の長男にマギーの家出の事を咎めさせない、強い制止の行動に出た。この時の彼の行動にマギーが、周りから家出のことを叱られなくても自ら反省する場面（第1部第11章）が特徴的である。その中で、以下、マギーの家出騒ぎ当日夜のタリヴァー家の様子を描写した部分を取り上げてみたい。

その夜家に帰ってから、タリヴァー氏は自分の意見を強く述べた、で、その効き目は、ジプシーの所へ逃げ出したという、この愚かしい行いについて（マギーは）母親から、ひとくちも小言を聞かなかつたし、又トムからは一言も罵られなかつた、という異常な事実となって表れた。日頃と打って変わったこの仕打ちに、マギーは寧ろ空恐ろしい気がした。それで、自分のあの行いは口に出せないほど悪いことだったのだろう、と折々考えるのであった。(123)

「折々考える」マギーは一人で自問自答している。これは、自分の感性に任せて突っ走った良心の咎めによる自省の過程を説明している場面である。感性や自由に振る舞うことに任せたロマン主義的行動による、ジプシーの所で「自分が中心的に愛される居場所を確保したい」という「自己目的達成」の挫折である。

しかし最終章で、スティーヴンとの駆け落ち騒動から帰ってきて、町で冷遇されるマギーに牧師（ケン博士）が牧師仲間に手紙を書いてあげようと申し出る。もしかすると、家庭教師としてその牧師仲間の館に住めるかもしれない、と言う。これを心から有り難いと感じるマギーの心の内をエリオットが次のように綴っている。

彼女 [マギー] には [スティーヴンとの駆け落ち騒動から帰って来てからの] 毎日毎日が、少しも楽しく思われないのだから、変な目で見られても仕方がないのだ。生活を一変しなければならぬのだ——こんなに、言い様もなく、胸が悪くなる程疲れているのに。心得違いをした者 [聖オグの町の因習や道徳といったものに背いた彼女] には家もなく、助けてくれる人もない、同情した人達までが余儀なく余所余所しくしている。しかし、彼女は愚痴を言うべきであろうか。長い苦行の生活から、こんな風に、尻込みしていいのだろうか。その苦行の生活にこそ、苦しんでいる他の人々の背負う

重荷を幾分なりと軽くし、そうすることによって情熱に駆られて犯した過ち（スティーヴンとの駆け落ち騒動）を、私情を棄てて人を愛し得る新しい力に変えるすべての可能性が含まれているではないか。その翌日は一日中、彼女は寂しい部屋に座って、雲と、吹きつける雨に暗く閉ざされた窓に向かって、そうした未来を考えた。(533)
〔 〕内、筆者)

「苦しんでいる他の人々」についてマギーの意識の中では、兄、トムも含まれている。マギーの眼に窮屈で古くて退廃していると映る聖オグの町の道徳を、必死に自分に説き聞かせよう、守らせようと信じ切っている、兄、トムの姿は彼女には「苦しんでいる」と思えるのである。それをマギーは、敢えて「私情を棄てて人を愛し得る新しい力に」変えようとする。そうした心の内には、駆け落ち騒動などを起こしてしまい、失敗してしまったけれども、「自分が中心的に愛される居場所を確保したい」という「自己目的達成」を目指し、兄、トムとの理想的な世界（関係）を構築しようとしたマギーの願いが込められているのではないか。故に、イーグルトンが主張している「ロマン主義的自己目的の達成が見られる」という指摘については、マギーの場合、以下のような表現でも言い換えられるのではないか。

『フロス河の水車場』はエリオットの作品の共通の特徴である、倫理、道徳を説くスタイルは変わっていないものの、『フロス河の水車場』では結婚後の家庭、とりわけ「育児書」的な自己目的の達成という側面が観られる。男の子、女の子それぞれの成長や発達過程の違いによって、各々の登場人物の抱くロマン主義的自己目的が異なってくる。それ故、それらが違って当たり前であり、マギーの場合、彼女の「ロマン主義的自己目的達成」は「福音主義」によって抑えこまれたかに見えてしまいがちである。それどころか、「自分を中心的に愛して欲しい」と願い、ジプシーの所へ行くということが、他の登場人物のスティーヴンや兄トム等の男性の自己目的と違っている。しかし、マギーの行動には彼女なりの「桃源郷」（理想郷）を追い求めているだけの意味しか込められていないのだと、エリオットが描きたがっているようにも解釈できる。マギーが女性なのを理由に、彼女の感性や自由に訴えたロマン主義的自己目的が達成されなかったと見なされることに反発している心理状態を描写した上記引用箇所には、それだけ、エリオットが細心の注意を払っていると見えよう。

註

(1) 「ロマン主義」、広辞苑第7版（岩波書店、2011年）、pp. 258-9.

(2) 『フロス河の水車場』という作品自体が、主にヨーロッパで読まれてきた小説であり、ヨーロッパ社会に於ける19世紀当時のジェントリー層や舞台となった仮想の「聖オグ」というところで、町の有力者や上流階層の人達が集まるパーティーの場面が描かれている等、支配階層の世界での出来事を主な小説内のイベントとしている。その為、こうした「青い眼」という表現はヨーロッパの支配階層の人間としては、持っている当然のことであった。尚、見過ごされがちであるが、アメリカの小説家、トニ・モリソン作『青い眼がほしい』（1990）という小説の題名が示すように、青い眼を持っていることは、血統が純粋な白人種（ヨーロッパ人種）即ち上流（支配）階層の人間であることの証でもあった。

II.3. 福音主義

II.3.1. 『フロス河の水車場』における「福音主義」

II.3.1.1. 「福音主義」の定義とその関連事項

工藤、淀川(1994)による「福音主義」の定義は以下の通りである。

聖書にある福音書の教義精神に則って信仰による救いを主張した事⁽¹⁾

このように福音主義は聖書に書かれた「神」の言葉は絶対である為、キリスト教世界で重要視される自己の確立とも深く関わりを持っている。福音主義の考え方を象徴するのが家父長制度だと言えよう。自分が男性であるか、女性であるかで、家父長制度の下で位置づけられる「自己」というものが異なってくる。そして『フロス河の水車場』という小説の中で、主にマギーが自分という存在を社会又は世間にどう位置づけていくのかが、この節では福音主義によって方向づけられていくということを論じていく。『フロス河の水車場』という小説内に限り、ジョージ・エリオットが各登場人物をどの様に設定しているかについての分析に特化するにしても、一個人がその一生を掛けても果たして見出せるかどうか分からない壮大な命題である。

上記の引用にある工藤、淀川両氏による福音主義についての定義に基づけば、「福音」とは「聖書にある福音書の教義精神に則って、信仰による救い」を意味していることと理解出来る。そこで小説内の場面分析に当たっては、人間が自己を確立出来たと一応見なすことが出来ると考えられるその時点が「社会又は世間に対し何らかの働きかけがなされ、その行為の結果生じる人間としての意識上の誇りや自信によって得られる精神的他者依存からの脱却が計られてから完了したと、エリオットが判断したと見なすことの出来る時点」と仮定することとする。

この仮定に基づき、以降『フロス河の水車場』という小説内の分析については、マギー・タリヴァーと彼女が真の福音主義者として自己確立するに至る過程を支える人達（スティーヴン・ゲスト、フィリップ・ウェイケム、トム・タリヴァー）を例に示していく。

II.3.2. 『フロス河の水車場』の登場人物に観られる「福音主義」についての具体的検証

II.3.2.1. マギーに観られる福音主義

II.3.2.1.1. マギーの場合①

『フロス河の水車場』という小説を分析する上でマギーについて考えるとき、兄であるトムを抜きには語れない側面がある。それは二人の兄妹の絡みがこの小説の主軸的縦糸の役割を担っている、というだけではない。マギーが兄、トムとの家父長制度に基づく関係を通じて、同じ福音主義とはいえ、聖オッグの町の特殊な雰囲気、自分の考える福音主義との間に違和感を覚えているという設定で描かれているせいでもあると思われる。

トムが福音主義の具現的制度である家父長制度の施行者にもなっていく一方で、マギーは父親が生きていても亡くなくても、常にこの制度に対しての従属者の立場から逃れられないままである。トムはタリヴァー氏が亡くなった後は、家の跡継ぎとして更にマギーに対して支配的態度をとることになる。

例えば聖オッグの町では、婚約していなかったり、交際を家族なり、それなりの範囲の町の人々に承認されていない男女が密かに逢ったりすることは福音主義の倫理に反するとされていた。それ故、マギーは兄、トムからフィリップと密かに逢っていたことを注意された。彼女はフィリップ・ウェイケムとはもう会わないと決めたとトムに対して懸命に弁明に努め、トムは彼女が「家長の気に沿わない相手とは男女の交際をしない」と、反省する「自己否定」の態度は当然のことと是認する。

家長としてマギーを福音主義に基づいた「正しい」道に導いてやらないといけないとする純真な善意からの義務感を帯びた兄の態度に、兄に見放されては生きていけないほど、自立出来ていないのだと気付かされる。両親のいなくなった状況では、もう自分にはトムしか頼る人がいないのだと遅蒔きながら身に沁みて解ったマギーは「福音主義」の教えの中でフィリップを愛そうと考えた彼女の思いの内には、兄、トムが認めてくれるのではないかと、との期待があったのではないかと。

しかし、実際の小説における筋の展開に於いては、自己を否定する方向に、マギーは、その思考を向かわせる。そこではフィリップと福音主義との関わりで、一つの理想郷の世界へ入っていけないのかとの思いを彼女は兄トムに止められてしまう。結果として、

マギーは自分の意思とは裏腹に、最も理想的福音主義の根本理念である「隣人愛」とは程遠い、家父長制度の下、強制的に家長である兄に従わされている。

「父権は隣人愛を具現化したものである家族愛を実現している」とする聖オグの町を支配するものは、形骸化した因習的道德と言ってよい。それでも尚、トムに理想郷への憧れを止められることで却って、福音主義と合わさった理想郷の世界もまた存在するのではないかとの期待感が生まれる。小説のサブ・プロットの視点から見ると、マギーの理想郷への憧れと福音主義の調和への試みは、トムによるフィリップと会うことを止められることによって、彼女の理想実現への期待感がより一層高まるという副次的効果をももたらしていると考えられることを可能にしている。

『フロス河の水車場』に観られる「福音主義」もまた、基本的に「信仰者を精神的に豊かにする(又は信仰者本人に名誉を与える)」という考え方を踏襲しているものと考えられる。

よってマギー一人が好きであるフィリップとの交際は、トムという兄、即ち家族の他の者の気持ちを無視した形になっていて、トムは、精神的に豊かな状態にはない。何故ならば、単なるマギーがこの小説内で一貫して求め続けている「誰かを愛し、愛されたい」という隣人愛の実践、聖書の教え通りに実践したいという、理想主義的願望との調和が、結果としてトムの不快によって、達成されなかったからである。行為当事者であるマギーも又、名誉を得られていないばかりか、トムの意向に添えなかった点に悔いが見られ、心の中でしてしまった事に対する自己を否定している。

更にマギーは、フィリップとの交際を断念することによって、隣人愛による寛容(許容)の精神からトムの言うことを赦し、受けいれている一方で、トムの意向に縛られてもいる。即ち、聖書の教えに忠実であろうとすることを第一義にしているところからくる理想主義と「女性家族は父権に従うべし」という聖オグの町の形骸化された因習的福音主義の中の一つの考え方とを調和したいとの思いに、マギー自身が縛られてもいることになる。

II.3.2.1.2. マギーの場合②

これまでの分析の積み重ねにより、『フロス河の水車場』でマギーの思考様式として描かれているところの「福音主義」とは、聖書の教えに基づいた、他人や家族の考え方、及び

聖書の言葉自体に「縛られる」ことであり、必ず「反省」という自己否定を伴うという形になっている。これを数学(又は理科)の公式風に表記すると、
福音主義 = 救いの道に至る為の縛り + 自己否定
このように定義づけられるのではないか。

トムに対してフィリップとの交際を断念する時、マギーの自己否定のメカニズムがこのようにして働き出すのである。つまり、この場合、マギーが、自分の理想とする福音主義にではなく、聖オグの町の因習に従うという状態になる。

但し、上記の福音主義の定義には、一面では、その人は外から「自分で自分を縛っているように見える」という意味を含んでいる。然るにその反面では、キリスト教の「神」の言葉(聖書、又は教え)やキリスト教会やキリスト教の教えに基づいて構築されているとされる社会での決まり事や倫理観等といったものによって、実際の行為をしている本人がその思考や行動を「縛られて」いるという感覚を持っているという二面性を抱えているのも事実である。

エリオットが以下の場面に、この時のマギーの心底に「愛されたいという要求」があると解説している。このことは、聖書の教えに忠実であろうとすることを第一義にしているところからくる理想主義とトムに代表させている聖オグの町の因習的道德との調和を目指すマギーの心の内での葛藤が描かれていることを意味する。マギーはしつこく兄に食い下がるのだが、その時に彼女はこう打ち明ける。

どうしてそんなことおっしゃるの、トム？随分酷いわ。私[マギー]は自分に出来るだけのことは全部してきたつもりだし、又、我慢してきたじゃないの。そして、私は兄さん[トム]にあのとき——あのとき、お約束した言葉を守ってきたじゃないの。私の生活だって兄さんと同じように幸せじゃなかったわ。(408)⁽²⁾([]内、筆者)

エリオットが、この時のマギーの心底に聖書に隣人愛の精神に基づいた家族間の「愛し愛される関係」を、説いている(マタイの福音書、22:39)こと、聖書(とりわけ福音書)の教えの通りに、縛られ実行するのが福音主義だとするならば、当然自分も「愛されたいという要求」があると読者に対して解説しようとする。そうした作者の意図とは裏腹に読者には、マギーはいい大人をして、まだ兄から自立出来ていないかのように映る。マギーは、トムに愛され続けたい、聖書(とりわけ福音書)の教えの通りに行動できる人間であると

神に認められたい(なぜなら神に認められることが救われることに繋がるから)、ただそれだけの想いなのであろうか。故に、愛されたいという、マギーの自己探し⁽³⁾ 的要素を帯びた理想主義と福音主義に基づいた生き方を模索することとは最終目的は同じと考えて良いのではないか。

物語の後半で、兄、トムにすぎる彼女の姿が描かれる。結局、彼女は常に自分の外に福音主義に基づいた世界、愛されるためにはこちらから進んで相手を愛するという、聖書の言葉に忠実に生きることを求めることを捨てなかったということだ。このことから、マギーは福音主義の考え方との調和を目指していると言える。彼女もある意味、独特で自分勝手にも思えるものの、彼女なりに福音主義を実践していた。マギーは、より高い境地を目指していた筈だった。彼女にとっては、フィリップとの付き合いを断念しなければならなくなったことを、この上もない「敗北」を意味すると受け取ったとしても、無理もないと言えよう。

マギーは福音主義の精神や倫理、価値、道徳観で成り立っている彼女の住む町社会との調和を願いつつ、福音主義が純粹に通用する社会や、人間関係を理想の形としているところが見られる。彼女はこうした第一章『ミドルマーチ』でドロシアに見られたのと同様の理想主義と兄、トムにすぎる為に彼の考え方に完全に服従しようとする彼女の姿に見られる「自己否定」との間を行ったり来たりする。エリオットは、福音主義をいかにして理想主義と調和させようかと、マギーとフィリップに描きだそうとした。小説全体を通して、マギーという人間は兄、トムを始め、家族からも、彼女の住む社会からも、信用されていない。それは、トム等が唱える、聖オグの町で倫理的だと評される考え方なり道徳の基準なりが、マギーの目指す聖書の教えに忠実であろうとする理想的姿と違って、ただキリスト教的雰囲気を持つだけの、硬直した因習主義になってしまっていたからである。

よってエリオットが『フロス河の水車場』でも、本来「福音主義」というものを「信用」(の基準)と見なしていたことが、マギーという登場人物の分析を通じて証明されていると言える。

更に、トムに観られる因習的聖オグの町の慣習が、教育にも表れている。『フロス河の水車場』が書かれた、19世紀当時、既にイギリスの上流階層の家庭では、ラテン語を始め、文字が読めることによる、聖書の知識と(その是非や、古い新しいかは別とした)礼儀作法等の教養が、各家個別に雇われている家庭教師により教育され、男子には更にその上の高等教育で当時の聖書が読めるよう、神学校や私学校でラテン語の教育を受ける伝統が確立

され、受け継がれていた。他方、『フロス河の水車場』のマギーはトムと違い、学校(当時のイギリスで学校とは神学校か私立校)に行かせても貰っていない上に、彼女自ら知識や信仰を求めることを放棄し、自らの思うがままに振る舞いたいの、行動する際に家父長制度の下で、家族(父親存命中は父親に、父親の死後は兄、トム)の言うことに従わなければならない、加えて福音主義を重んじる当時の社会の制約に非常に窮屈なまでに縛られているという性格設定にされている登場人物である。

故にマギーは、私学校でラテン語を学び聖書の福音書を読んではいるが、周りの古くて因習的な考え方に触れて一応の理解を持っているトムの言うことを正しく理解できるはずもなく、都度間違いを犯してはトムの顔色を伺い、言うことを鵜呑みにしながら徐々に彼女なりの福音主義についての理解を進化、発展させていくのである。

つまり著者であるエリオットは『フロス河の水車場』という小説に於ける「聖オググ的福音主義」というものを、一見キリスト教的雰囲気には則っているかのように、思考停止の如く無条件に従わせるだけの、古い因習的な道徳になっているとの観点から描いていると見なすことが出来る。理想主義的に聖書(殊に福音書)に書かれてある教えの真の実行を目指すマギーと、彼女の行動や考えを改めさせるのが、聖オググの町の正しい道徳であると信じ切り、家父長制度の名の下にマギーに強制的に従わせているように、エリオットが、トムを描いているからである。

彼ら死して離れざりき(544)

上記引用の言葉は、旧約聖書のサムエル記(1:23)の一文を基にした(工藤・淀川、1994)と言われる。この聖書の表現が使われている箇所が、小説の最後でフロス河が氾濫し、兄トムと抱き合うマギーを一気に呑み込んでしまう場面に於いてである。氾濫した河の中でもトムを離さなかったマギーの行為は、まさしく、聖書の言葉に忠実に従い、(隣人)愛の教えの実践であると思なすことが出来よう。マギーは自分の命の危険を顧みず、身勝手だと思ってきた兄を、「隣人を愛せよ」(マタイの福音書、22:39)との教えを実践し、兄トムを許し、彼女の目指す理想を達成した積もりになっているのである。

II.3.2.1.3. マギーの場合③

氾濫した河の中でもトムを離さなかったマギーの行為が、まさしく、聖書の言葉に忠実に従い、「隣人愛」の教え(マタイの福音書、22:39)の実践であると見なす。且つ、彼女の行為が、彼女の目指す福音主義と理想主義との調和を目指していると思なした場合でもある。故にマギーのこうした行動の背景(要因)となった、彼女の福音主義についての理解を成り立たせた背景について、この項では述べることになる。その背景となる考え方に、ドイツの神学者、トマス・ア・ケンピスが著者であるとの説がある『キリストにならいて』(15世紀前半)に記された内面性、情動性、禁欲、中庸からなる、近代敬虔の思想が見られるとした場合について、以下に論証を試みる。

このように見てくると、二人の兄妹が洪水で押し流される場面については既述の通り、トムがずっと自分を導いてくれようとした気持ちに答えて、マギーがすべてを許しトムを受け容れたかのように見える。一見、マギーが、トムの因習的な道徳や家父長主義に同調した様に見えるが、当の彼女自身はそうは思っていない。これはマギーが教化され、理想主義的福音主義者になったことを意味するものと言えよう。

以下の項では、福音主義という「縛り」(「反省」という自己否定)との調和と理想主義との行き来を繰り返すマギーに関わる登場人物を分析することによって、彼女の内面的成長の過程(度合い)についての分析を更に進めていくこととする。

II.3.2.2. マギーに見られる福音主義に関わった登場人物について1——スティーヴン

II.3.2.2.1. ①スティーヴンが、マギーを選んだ時の彼の「基準」とは何か

スティーヴンは19世紀、産業革命後に新しく興ってきた、富裕層としてブルジョア階級に食い込んできた父親の息子、いわゆる御曹司として描かれている。その為、スティーヴンの福音主義に対する意識を検証、分析する際の一つとして、彼の結婚相手を選ぶ「基準」という視点からの考察が挙げられる。

例えば第6部第2章の章題は「第一印象」となっている。ここでいう「第一印象」とは、

ルーシーがスティーヴンに対して抱いた印象である。前の第1章の最後でスティーヴンはルーシーを結婚相手に選んだことが書かれている。「まさに、日頃彼が絶賛していた類の女性である」(385)と絶賛している。その賞賛に値する中身についてまず、エリオットが定義している。

男性は妻の美しいのを喜ぶものである。成る程ルーシーは美しい、が、こちら [エリオット] を含む読者一般を指すと類推出来る] を夢中にさせるほどのものではない。男性は妻に対して教養があり、優しく、愛情深く、愚かでないのを願うものである。そしてルーシーはこのすべての美点を具えている。(385) ([]内、筆者)

スティーヴンは、妻を「自分を幸福にしてくれそうな」(385) といった判断基準以外に「直接関係のないことに気を揉んだり、気兼ねしたりせずに」(385)「分別と独立心」(385) で以って選んだことに気付いたとエリオットが解説している。スティーヴンの考えに依れば、妻という存在が「自分を幸福にしてくれそうな」、「直接関係のないことに気を揉んだり、気兼ねしたり」しない存在ということは、何をしても何処までも自分に寄り添ってくれるのだという。これは、彼が彼自身の頭の中で女性に求めている、要求内容(彼の妻としての必要条件)であり、女性としての魅力等の、男性の女性に対して求める本能ではなく、こうした論理でもってスティーヴンがルーシーを妻に選んだことが伺える表現であると言える。妻に夫に対して無干渉であることを求めるスティーヴンの論理の出所として、彼が会社経営者の二代目であること、ルーシーがスティーヴンの父親の経営する会社の従業員であるという、社会的立場上の差異に起因するものと推察出来る。当時の会社経営者はブルジョア階級の中に台頭し食い込んできていた新しい階層を指しているものと思われる。スティーヴンとルーシーの組み合わせは、使用者の御曹司と使用人との婚姻である。スティーヴンの方が、ルーシーに対して一方的、絶対的に強い立場である。謂わば、経済的な優位性でもって妻になる女性を選ぶようなものである。スティーヴンは彼の性格上、結婚後も家庭に於いて自分の思い通りにしたいという自分の要求を満たすには、自分から見て、被支配層に属しているという条件を備えた女性でなくてははいけなかった。それ故に、労働者階級で自分の父親の経営する会社の従業員、そういう娘であるルーシーを結婚相手に選んだのではないか。

相手の女性に気を遣わないで済む、つまり、スティーヴン自身が相手の女性の前で自然

体の本来の自分でいさせてくれるマギーの方が、因習的道德に縛られ行動しなければならないルーシーより魅力的だったということではないか。

II.3.2.2.2. スティーヴンの場合②

この項では、「スティーヴンがマギーと駆け落ちまでした時の、彼の「基準」とは何か」、そして「マギーが駆け落ちの途中で、スティーヴンと別れようとしたのは何故か」の二点を中心に分析し、論じる。

ではまず、スティーヴンがマギーを選び駆け落ちまでした時の彼の「基準」とは何か。第6部第9章から描かれる聖オグの町で開催された舞踏会の場面で、スティーヴンはマギーの手首に接吻を何度もしてしまうほどの本能的欲求に襲われる。

マギーは彼女の注意を惹いた半開きの大輪のバラのほうへ、やや上向きにその腕を曲げた。女性の腕の美を感じないものがあつたらうか？ふっくらとしなやかに小さなくぼみを持った肘、そして、はりのある柔らかさの中に、目にも止まらぬ小さな刻みめを持つほっそりした腕首へと、次第に細くなっていく曲線のあらゆる変化に表れた言い様もない優しさ。一人の女性の腕は、二千年の昔、偉大な彫刻家の魂に触れた、それ故彼はパルテノンの女神像にその姿を刻んだ、歳月の為、傷み損なわれた大理石の頭の無い胴体を愛しげにつかむその腕に、我々は今尚感動する。マギーの腕は丁度この様な腕である。しかもそこには生命の暖かな色合いがある。

狂うばかりの衝動がスティーヴンを捉えた。彼はその腕に飛びかかり、手首を握って、接吻を雨と降らせた。(460)

彼は女性の腕という、肉体の一部に触れたいという誘惑に負けてしまったかのようである。しかし、大事なのは男性が女性を自分の物にしたい、という動物的、本能的な中の「女性の身体面での美を愛でる」といった官能的な印象でもある。それはマギーの腕を愛でることは、ギリシャのパルテノン神殿にあった女神像の腕に感動するのと同じことであることが、説明されているからである。そしてマギーの腕に「生命の暖かな色合い」をスティー

ヴンが感じた故であるとも既述し、官能的な印象づけを繰り返しているかのような描き方である。これら2つの理由から、スティーヴンのマギーの手首への接吻は、一度ならば文化（教養）人の振る舞いであると、正当化（マナーとされた振る舞い）されるが、複数回ともなると非常に人間的で、本能的振る舞いになっていることが判る。相手女性の頬等、親しい間でなされる挨拶ではなく、女性に特有の身体的美を愛で、手首を取っての連続した接吻は、教養ある上流階級の人間の行いではない。しかも接吻を集中して何度もしたり、接吻の時点で、ルーシーという半ば特定の女性と付き合っていたスティーヴンは、儀礼的挨拶以外の女性への接吻をすることが、聖オッグの町の道徳に反する行為であることは明らかである。故に、スティーヴンがマギーを選んだときの行動の「基準」は本能であり、キリスト教的雰囲気の名残を留めてはいるが、聖オッグの因習的道徳にさえ背く。

スティーヴンは、会社社長の息子で、産業革命後の経済的新興階級に属する。彼の父親が既存の社会に「経済（お金）による価値基準」という新しい基準をもたらした階層の育ちである。その為か、交際相手以外の、そして階級の異なる他の女性に儀礼以上の好意を示さない、という、聖オッグの町の道徳という「縛り」から離れて、交際相手以外の他の、そして階級の異なる（ジェントリー層の）マギーの手首に何度もキスをし、マギーを愛したい、という彼の目的又は望みを「自己肯定」している。自分の感情の赴くままではあるが、その行為の現出が、高貴な階層の振る舞いの慣習（女性への好意を手首へのキスで表現する）をスティーヴンは実行した。他方、フィリップはマギーへの思慕の情を持ちながらも、彼女が、家父長制度に逆らい勝手な振る舞いで家族に迷惑をかけ、家族愛に欠ける反道徳主義者だ、とトム等家族から見なされ萎縮している状態から、彼女を解放してあげることが優先しようと計画する。彼はマギーの気持ちに寄り添おうとする理論上の倫理観に縛られ、スティーヴンのマギーへの接触を傍で見ているながら具体的行動に移せない。マギーの精神的な苦しみに対するスティーヴンの取った行動は、フィリップとは対照的である。これも会社経営者の階層の一員であるという、社会的地位の優越感、階級意識の違いがもたらしていると考えられる。故に、上流階級の人達が集まるパーティーでスティーヴンのとった行動は、聖オッグの道徳に反している。彼が愛でたマギーの腕が、ギリシャの異教のパルテノン神殿にある女神像に例えられ、彼は、キリスト教成立以前の「人間の持つ美」に魅力を感じて行動した、と理由づけられていることから、彼の行動が聖オッグののみならず、真のキリスト教的価値観、倫理観に反していることが判る。

それならば何故、マギーがスティーヴンに惹かれ、そして駆け落ちの途中で、スティー

ヴンと別れようとしたのか。それは自分の愛する人を手に入れたいという場合、マギーは、隣人愛を説いたマタイの福音書（22:39）の言葉に忠実に従って実行（実際の生活を送る）すること、即ち障害を持っているフィリップを愛することによる、真の福音主義と理想主義との調和という条件が彼女にとって必要であると、一時は考えた。しかしフィリップより健常者で男性らしいスティーヴンと片時も離れたくないという、女性の男性に対する本能的欲求が、マギーにもあることに気付かされる。異性を競争に勝って得るといふ、人間を動物の一種とみなした場合に見られる本能的欲求である。スティーヴンに惹かれた上に、駆け落ちの途中までの彼女には、例え親友であるルーシーを裏切っても愛する人を手に入れたいとの思いがあった。そのことを示す場面が、第6部第14章にある。この場面では、二人が駆け落ち途中の船底で、正式に駆け落ちを迫るスティーヴンに対し、マギーが聖オグの町に戻ると言い出して争いになる。

「ちえっ、マギー。」スティーヴンもまた立ち上がって、彼女の腕を掴んで言った。「何を寝言を言うんです。僕と結婚しないでどうしてあなたは帰れます？ねえ、マギー、これから先なにを言われるかあなたにはわかっていません。」

[マギー] 「いえ、解っています。私は何もかも告白します。そうすれば、ルーシーは私を信じてくれるでしょう。あなた[スティーヴン]のことも許すでしょう。正しいことに縋っていれば、何かいいことがありますわ。私は一度も魂の底から[スティーヴンとの駆け落ち、結婚に]同意したのではなかったのです。今だって同意いたしません。」

(499) ([]内、筆者)

この場面でスティーヴンは、マギーの豹変ぶりに、「行っておしまいなさい——去って下さい」(500) と言うのだが、かといって彼は、マギーに対して非常に腹を立てているのではない。マギーに苦しめられているとまで、感じてしまっている、諦めに近い、説得の努力に疲れた心理状態である。なぜなら、そこでスティーヴンは「ちえっ」(原文では“Good God”となっている箇所だが) という言葉を発しているからである。富裕層の経営者の子息として正規の教育も受け、社交界で弁護士の息子のフィリップを始め、聖オグの町の上流階級の人達が集まるパーティーにも出席出来る立場にいるとの自負から来る義務感から、スティーヴンは子供のような我が儘を言っているマギーを諭すような心境なのであろう。

ただし、マギーに対しての呼称が“baby”とかではなく“God”とした所に、スティー

ヴンの真面目さ、紳士の振る舞いであることをエリオットが仄めかしている。しかしその真面目さ、紳士的であることの本来の意味が「神」の名のもとにマギーへの説得行為を行うとの、「神」に対する宣誓の意味が含まれていることに由来しているとの意識をステイーヴンは持っていない。工藤・淀川両氏が訳された“Good God”に対する日本語に「ちえっ」という言葉が充てられていることが、ステイーヴンの真面目さが、聖オッグの町で因習化した道徳に対しての真面目さであること、紳士の振る舞いも、彼が真に紳士であるからではなく、由来や紳士の真の意味もわからないまま、ただ、町の他の男性がしている仕草、態度を単に真似ているに過ぎなかったことを露呈していることを意味する。この“God”は、マギーに対する呼び掛けに続く説得に際しての場面で発せられた。この語が例え無意識の、聖オッグの町で因習的に発せられた言葉であっても、ステイーヴンは本能的に、諦めに近い、説得の努力に疲れたという本心を吐露していると思わせるからである。

この様に因習的な考えを持つ聖オッグの町の大多数が反因習的道徳と考える、駆け落ちというマギーの行動にステイーヴンは付き合ってしまう。彼は、最初は反因習的であっても、結果的に結婚すれば町の大多数は許してくれるとの思いがあったからである。(502) マギーの方は船底で考える内に、自分の行動は本能的で、自分の考える理想主義的福音主義に反すると思直した。マギーは隣人愛の観点からも考えて、ルーシーの気持ちに思いを巡らせ、散々思い悩んだ末に、ステイーヴンとの別れを決めた。マギーに駆け落ち(結婚)を迫る時のステイーヴンは、女性の肉体的魅力に溺れた自分が、結婚という最終的な形に拘る聖オッグの町の因習的な考えになっている。

ステイーヴンは聖オッグの町に住む上流階級の人達が集まるパーティーの時点では、マギーの手に接吻し、キリスト教成立以前のギリシャ世界で讃美された人間本来の持つ肉体的な魅力や本能や感情に従うことを良しとした、本能的価値観に染まり、そしてマギーに結婚を迫った時には、パーティー以前の、因習的な聖オッグの町の考えに再び戻る、という思考過程を辿っている。その結果浮き彫りになるのが、聖オッグの町の因習的な考え方について、ステイーヴンとフィリップとでは考え方に違いがあるということである。フィリップは聖オッグの町の因習的道徳について、真の福音主義の立場から批判できる。ステイーヴンは批判するだけの、自分なりの意見は持っていないし、むしろ、聖オッグの町の因習的道徳について、無視したところがある。彼は町の有力者の息子なので、自分の思い通りにやれば、町も認めてくれる、と高をくくっているところが見られる。

ステイーヴンにとっては、口をきき、一緒に二人きりで行動した男女は、婚約したのも

同然であり、故にいずれは結婚するもの、との判断がある。しかも男性側に婚姻の意思決定権があることも暗に示されている。これは、考え方が因習的になっている聖オグの町にも見られる。スティーヴンもまた、いずれ自分がマギーに対して家長の位置に立つとの思いから、「家族を正しい道に導いてやる」とする家父長制度の考え方に因習的に当然の如く沿っている。また、「正しい行動（この場合、神がするように、どこまでも相手の人に寄り添ってあげること）をしていれば、死後必ず、神の救い（恩寵）があるもの」とのマギーの考える、本来の理想的な福音主義の倫理観からは離れている。

しかし、聖オグの町の因習的倫理観では、婚約、付き合う（男女が口をきく）そして結婚という順序（形）の方が、何処までも相手に寄り添う（自らの本心）ことより重んじられている。そのことは、スティーヴンの「僕と結婚しないでどうしてあなた [マギー] は帰れます？」という言葉から読み取れる。更にこの表現に込められているスティーヴンの判断では、例え、マギーがもう、本心から彼のことを愛していないと変心したとしても、一旦、駆け落ちまでしたからには、婚約は抜かしても、結婚という最終的な形は守らなければ聖オグの町に居られない、との考えがあると見なせる。

スティーヴンは船を降りたマギーが自分を残して立ち去るのを啞然かつ茫然として見送る。この引用箇所にはマギーとスティーヴン、二人の依って立つ「福音主義」の理解度の差、倫理基準の違いが際だって描かれていると思われる。マギーの「家族を正しい道に導いてやる」とする家父長制度の考え方の本来理想とする根拠が、「正しい行動（この場合、神がするように、どこまでも相手の人に寄り添ってあげること）をしていれば、死後必ず、神の救い（恩寵）があるもの」という隣人愛（マタイの福音書、22:39）にあると、見なせる。それに対し、スティーヴンは、ただ住んでいる町の因習的（支配的）考え方だから、無条件的服従を男性が女性に対して行える、といった程度の浅い家父長的考え方への理解しか持っていない、と言えよう。そして彼がゆくゆく、一旦、外国（オランダとも）⁽⁴⁾へと逃亡することに繋がる、このマギーとの駆け落ち行動が、「婚約もしていない男女が密かに会ってはならない」とした聖オグの町の道徳からもかけ離れていることを改めて認識し直し、「行っておしまいなさい——去って下さい」（500）という発話に行き着くこととなったのではないか。故に、マギーが駆け落ちの途中で、スティーヴンと別れようとした最大の理由の一つが、真の福音主義の実践上、自分の行為を過去から未来を見るとき、隣人愛という一貫性だと言えよう。マギーの突然の翻意で困惑するスティーヴンの描写が非常に滑稽でもあり、印象的な場面である。

エリオットがスティーヴンに、「彼女[マギー]の性質がひたすら求めたもの」(478) ([]内、筆者)である「愛、富、安楽、高雅」(同)をマギー以上に求めていない他の女性に、(物語のこの時点では、マギーはそう考えているように設定されているのだが)最愛のスティーヴンを譲らなければならないのか、と読者に問いかけている場面に当てはめてみると、マギーが駆け落ちの途中で、スティーヴンと別れようとした理由として成り立つことが判る。

この問いに対する答えも真の福音主義である。何故ならば小説内で、マギーがスティーヴンを諦めようとした因を「魂の奥底からの声」(477)に従ったからであると、エリオットが説明しているからである。故に、この「魂の奥底からの声」がマギーにとっての「縛り」であり、その声即ち縛りによって、彼女はスティーヴンを自分だけのものとし、充実した生活を手に入りたいとの「利己心」(同)を自分で否定しているという構図が読み取れる。

結局マギーは、スティーヴンもフィリップも「同じ町に住む人間として愛しみ、受け入れる」という、広い意味での隣人愛の実践という理想主義との調和を根拠として、スティーヴンとの駆け落ち逃避行から引き返し、聖オグの町に戻るのである。

一方、スティーヴンは聖オグの町で暮らしていけるように表面上を取り繕った道徳的振る舞いをしているだけで、本当は官能(本能)主義者である。この点に関して、テリー・イーグルトンはエリオットの作品には「福音主義が見られる」と指摘する。故に『フロス河の水車場』に於けるスティーヴンの場合には、エリオットが官能(本能)主義者である彼を、マギーと照らし合わせて読者に見せるという構図にすることで、マギーの考え方の映し手(reflector)としての役割を果たさせ、マギーの目指す真の福音主義がどのようなものかを見せている。

II.3.2.3. マギーに観られる福音主義に関わった登場人物について2——フィリップ

II.3.2.3.1. フィリップの場合①——身体に障害を持つことに起因した福音主義的思考

フィリップは身体に障害を持っている。小説内での設定で彼は、子供の時に事故で脊柱後湾症となった⁽⁵⁾とされている。脊柱後湾症のせいで、脊髓に通っている神経の一部を傷つ

けた為に、脳からの指令を足に伝えることが出来なくなった。それでフィリップは足が不自由で、走ることが出来ず、他の子供達との様々な遊びに支障がある為に思うように遊べない。そうした彼が身体に負った障害と典型的（救いに向けての縛りと自己否定を併せ持つ）福音主義者であることとの間にどのような因果関係があるのか。

福永（1995）⁽⁶⁾による登場人物分析とは異なるが、フィリップは真の福音主義を理解している。彼はマギーの目指す真の福音主義の行く末を予感し、それ故に傍観者とならざるを得ない位置に置かれている。第5部第2章で、フィリップはマギーに歌を歌ってくれるよう頼まれて「彼女の瞳に愛は戯れて」を歌った。マギーは以前ロートンでフィリップが歌っていたのを隠れて聞いていて楽しかったことを思い出して、素直な本来の自由で明るい性格に戻っていたから、歌ってくれるよう頼んだ。しかし、フィリップが歌った歌の題名、内容が男女の愛についてであった為、マギーは本能のまま行動してしまったと反省した。欲望のまま、勝手に林檎を食べてしまい、エデンを追放され、原罪を負った聖書のアダムとイヴと同質のことを自分はフィリップとしようとしている、とマギーは考えた。これでは真の福音主義に反する、ここで自分の煩惱（本能）を縛らなければいけない、せめてこの場だけは離れなければいけないとして、彼女は立ち上がる。フィリップは急に帰ろうとするマギーに向かって、次のように言う。

「マギー、」彼[フィリップ]は抗議するような口調で言った。「こんな片意地な不自由を押し通すのはおよしなさい。こんな風にしてあなたがあなたの天性を麻痺させ、拘束するのを見るのは僕には悲惨です。（略）さぞ異彩を放つ婦人になることとと思っていました——知恵と明るい想像力に満ち満ちた。そして、いまだにそれはあなたの顔に閃いています。」（342）（[]内、筆者）

この場面でフィリップには、マギーが真の福音主義を目指す為に、彼女の振る舞いが「片意地な不自由を押し通」していると映る。そしてフィリップはマギーにその天性の明るさを無理に押さえつけないように忠告しながらも、マギーの自己否定が悲しい結果しか生まないとも感じている。第5部第3章に於いてフィリップはマギーとの交際に距離を置くような言葉を数多く発する。この場面で描かれている彼の姿にも、「縛り＋自己否定」の行く先が悲劇である為、マギーを愛するから、彼女の抑圧から受ける辛い心情に何処までも寄り添うつもりでいる。トマス・ア・ケンピスの本をマギーに与えるのも、マギーを想う自

分の感情を否定した上で彼女を見守らざるを得ないという、フィリップの思いが垣間見られる。

フィリップが、彼女自身の心には誤魔化しを導き入れ、また彼女に対して第一位の要求権を持つ人々には新しい不幸を与えるかもしれない隠し立てを、拒もうとしたマギーの心の正しい命令に打ち勝とうとあれこれ手を尽くして説き奨め、その努力を正しいとしたのは、こうした（行為の結果を取り纏める神のごとき見解とか、（行為の）結果を跡づける哲学者のごとき観点とかといった）考え方に依ったからである。しかしフィリップの心には満ち溢れる情熱があったので、動機を正当づけようなどということ、半ば超越していた。マギーに逢いたい、そして彼女の生活の一要素となりたいという憧れには、差し出された喜びに掴みかかろうとする、あの野性的な衝動が—— [フィリップの] 心にも体にも苦痛が優位を占めているような生活から生じる、あの衝動がふくまれていた。(343) ([]内、筆者)

フィリップは、聖書に示された福音主義思想（道徳的倫理観念）をマギーに説く。引用部分の「フィリップの心には満ち溢れる情熱があった」や「野性的な衝動」といった言葉や表現から、説かずにはいられなかったことが伺い知れる。それと自分の、トムの考えに反して(否定し)マギーにトマス・ア・ケンピスの書物を与える等して教養をつけさせ「このようなつまらぬ家庭内の障害が無くなった暁には、彼女[マギー]の生活に役立つに違いない」(343) ([]内、筆者) という、「神のごとき見解」(同)と小説内で表現されている聖書の言葉を「救い」の言葉と見なし、それに従おうとしている面もある。以上、二つの面で、フィリップは「自己否定」を行っていることになる、と言える。マギーが書物により教養を「身につけ、正当な根拠に基づき主張出来るようにすることが、「彼女に対して第一位の要求権を持つ人々には新しい不幸を与えるかもしれない隠しだて」であることが言える。

因みにここで言う「隠しだて」とは、最終的にフィリップがマギーと一緒に暮らすようになる状態のことを指す。フィリップがマギーにトマス・ア・ケンピスの本を与えることで、マギーにトム等の理論を学ばせ、彼らに対抗できるように考えた。

又「彼女に対して第一位の要求権を持つ人々には新しい不幸」という表現の指す内容が、マギーが真の福音主義を書物により正式に学び、トム等の理論(家父長制の思想等)に対抗、又は打ち破る理論を身に付けたり、それから自由になったりすることであると見なされる。

フィリップは聖オグの町の道徳が因習化、形骸化していると見なしており、真の福音主義を追求するマギーの姿を見ても、彼はただ、傍観者にならざるを得ない。それを示すフィリップの発話とエリオットの解説を次の例に挙げる。

フィリップは因習化した町の道徳に気付きつつも、マギーに聖書の福音主義を教えて、彼女が真の福音主義と理想主義との調和を求める究極に、彼女に悲劇的結末、最悪の場合には「死」しかなくなることを、予感する。以下はフィリップがマギーに悲劇的結末を予感したことを伺わせる、彼自身の発話とエリオットの解説文である。

それは、そういうこと [真の福音主義を求めること] はよくない結果になることがわかっているからです。あなたは、決して、そんなふうに自分を苦しめ続けることはできませんよ (342) ([]内、筆者)

フィリップはマギーが真の福音主義を求め続けることで「自分を苦しめ続けることはできません」と言って、いずれ「よくない結果」、つまり死のような悲惨な結末が暗示されている表現で、マギーに忠告している場面と見られる。これに対してフィリップとの幾つかのやり取りの中でマギーが感じたことをエリオットが解説している。

我々は幾時間もかけて明確な推理によって固い信念を得ていながらも、(中略) 勝利よりも好ましい敗北をもたらすどんな抗弁[ここでは「逃げ口上」の意味]にでもとりつこうとする。

マギーはフィリップのこの逃げ口上を聞くと、心の躍るのを覚えた。そして安堵につきもののほっとした気配が、ほとんど目にはとまらぬくらいに、彼女の顔を掠めてすぎた。(343) ([]内、筆者)

フィリップにはマギーが真の福音主義追求の結末が死のような悲惨であると思えた。だから彼がマギーを断念するという「敗北」者であり、傍観者でしかいられないこと(「逃げ口上」)を「敗北をもたらすどんな抗弁(ここでは「逃げ口上」の意味)にでもとりつこうとする」という表現でエリオットが示し解説している。この時のマギーの心境を表す「安堵」し、「ほっとした」という、エリオットの説明箇所に使われた表現から、マギー自身も、真の福音主義追求の結末が死のような悲惨であることを、何処か予感していたことが言える

のではないか。

また、イギリスにおけるキリスト教の特徴が「聖書」、「伝統」、「理性」であり、中でも「伝統」が生命線とされている。⁽⁷⁾ その「伝統」が因習化、形骸化するなか、フィリップやマギーを描くことで、エリオットが聖オグの町の道徳の矛盾や欠陥を描いていると言える。故に、フィリップは先の仮に定義した内容の福音主義者である、と言える。彼はトマス・ア・ケンピスの思想を体現する福音主義者として設定されているので、そのことは福音主義者としての行動の理想体がフィリップであることを指している。彼は理想的な福音主義者なのに、余りに自己否定過ぎるので、フィリップは「自分」というものを周りから一段低くしてしまう結果、即ち自己否定の悪い面が良く理解出来る描写になっている。

II.3.2.3.2. フィリップの場合②——隣人愛の実践という点から来るキリスト教的雰囲気の名残としての道徳的思考及び行動

フィリップはマギーが自身の感情を押しえ込まないように配慮し、却ってフィリップ自身の欲望である、マギーと会って一緒に時を過ごしたいという気持ちを抑え込んでしまう。マギー、スティーヴン、ルーシーと四人で舟遊びに出かけようという時に、フィリップは病気になってしまい、運悪くルーシーも都合で行けなくなりマギーとスティーヴンを二人きりにさせてしまうことになる、と一人気を揉む場面がある。

朝になってみると、フィリップは舟遊びに出かける約束を果たせそうもなく気分が悪かった。掻き乱された今の心持では何をしようとも決めかねた、二つの相反した考えの間を往きつ戻りつするに過ぎなかった。第一に彼はマギーに会って、[フィリップのことが好きだと]打ち明けてくれと頼まねばならないと思ったら、自分のこのお節介に自信が持てなかった。……自分[フィリップ]を愛するというのはずっと以前、彼女[マギー]が何も知らぬ幼心に言ったことなのだ。利己的な焦燥からではなく、彼女を気遣う純情からの行動であるという確信がつくまでは、彼女に会う自信が持てそうもなかった。

彼はスティーヴン宛に、気分が悪いので、ディーン嬢との約束が果たせぬからと、一筆

したためて、朝早く召使に持たせてやった。ステイーヴンはこの口実[フィリップが気分が悪いという理由]を聞き入れて、自分の代わりに務めてくれるだろう。(482) ([]内、筆者)

ここにもフィリップが真の福音主義を理解していることを伺わせる表現が見られる。マギーが好きだという自分の感情が「利己的な焦燥からではなく、彼女を気遣う純情からの行動であるという確信」がなければ、「相手の心にどこまでも寄り添う」という「隣人愛」の真の実践でない、と分かっているからである。「彼はマギーに会って、[フィリップのことが好きだと]打ち明けてくれと頼まねばならない」と考えることが、「利己的な焦燥」ではないか、という考えにとらわれ、苦しむフィリップの姿が描かれている。([]内、筆者)

フィリップがこのように、マギーへの愛の告白、交際申し込みが、真の福音主義かどうかで思い悩むのとは対照的に、兄、トムによってフィリップとの交際を禁じられると、マギーはいとも容易くトムの意向を汲み取り、理解しその考えを受け入れる。但し、トムに屈服した訳ではない。マギー自身が「キリストに倣いて」の教え通りに自己否定をしたからに他ならない。そして「どこまでも人間に寄り添ってくれる」存在という、「絶対的あるもの」による「救い」をエリオットがフィリップがマギーに手を差し延べる際の思考様式を設定する際に採り入れた経緯が観られる。故にフィリップの道徳的思考が、「どこまでも人間に寄り添ってくれる、絶対的」存在による救いが、超自然的介在物を前提とした上での「縛り+自己否定」という内容になることがわかる。というのも、もし、エリオットの思考が小説内に現されていると仮定するとすれば、この場合、マギーが自己否定によって、福音主義と彼女のフィリップとの交際によって実現出きるかも知れないと夢見た「理想郷」の幻影とが、入り交じったことになると言えるからである。

以上の分析の積み重ねによっても、マギーに真の福音主義を教えたのがフィリップであるということが言える。言い換えればフィリップがマギーを福音主義者に導く行いは、信仰の実践に他ならない。新約聖書には、「信仰は、望んでいる事柄を確信し、見えないものを確認することである(別の版では、見ぬ物を真実<まこと>とするなり)」(ヘブライ人への手紙、11:1)と記されている。キリスト教では、「神」の一人であるイエスに倣って他人を赦

す等先人のしてきたことを無条件に「是」と信じることを求められる一面を持つとされる。そこで、前述の引用部分に繋がる場面で、同じく第5部第3章に於いてフィリップがマギーとの交際に距離を置くような言葉を連発する場面を取り上げる。

直感力はしばしば矛盾します。まあ、聞いて下さい——あなたに書物を用立てさせて下さい、時々お目にかかせて下さい——あなたがロートンで言ったように、兄さんとも、先生ともならせてください、あなたがこうして長い自殺の状態を続けるのに比べたら、僕に会って下さる方がまだ間違っていない。(342)

この場面に於けるフィリップの思いの中に慈悲の精神が観られる。彼はマギーと時々逢うのに、書物を用意しなければならなかったり、逢う時の立場を、「兄さんとも先生とも」と縛っているからである。女性であるマギーに逢うためには、本を用意する慈善活動という名目とか、独身男女の交際でないことを明確にし、家庭教師的立場か年上が年少者の面倒を見る、といった理由でなければ、真の福音主義に反すると考えている。そしてフィリップが用意する書物が、彼が真の福音主義の精神を記していると思なして、「聖書に次いで最も読まれた本とさえ言われる」⁽⁸⁾ トマス・ア・ケンピスの著作『キリストに倣いて』⁽⁹⁾ である。そこに記された「内面性、情動性、禁欲、中庸」からなる四つの近代敬虔の思想に多大な影響を受けた考え方に由来していることが、フィリップが真の福音主義を分かっていることを象徴的に示していると思なせる。

フィリップはマギーに書物の用立てをする名目で、常時でなく、時々逢うことにし、恋人としてではなく、兄のように、又は先生としての立場で、お互いにとって好ましい関係としたい、と申し出る。これも、マギーにとってみれば都合の悪い（事実、この場面では直ぐには納得していない）ことに当たる。しかし彼は更に条件を出して、自分の主張が通る境界線を見極めようと発言していることに示されている、と考える。

このことが前述の、フィリップが「求めよ、されば与えられん」という、祈りを通して「救い」を求める内面性、情動性を持つ福音主義の教えとマギーへの接し方に見られる「禁欲、中庸」的な態度で、「マギーの目指す真の福音主義」との調和を計っていると見なせる理由である。また、トマス・ア・ケンピスにより唱えられた「祈り」を通じて「救い」を求める「内面性」の考え方も大きく「聖オグの町」の人々の道徳に（最初の内は）影響を及ぼしたと思なせる。

よってフィリップは、「神」による許し無しに救いはないという超自然的介在物を前提とした救いを求める彼の姿勢を、聖オグの因習的道德を持つ彼らが羨むということも心得ている。そして自分の考えが因習的聖オグの町の道德と異なる場合には、自分の考えや欲望（自己）の方を、聖書の説く「隣人愛」の教えに照らして修正（否定）しているという点でも、フィリップは非常に「福音主義」的考えの持ち主であると言えよう。

II.3.2.4. マギーに見られる福音主義に関わった登場人物3——トム・タリヴァー

第3部第2章に於いて著者でもあるエリオットは、トム・タリヴァーの「自己」について直接的表現による解説者として作中に登場⁽¹⁰⁾する。以下はその場面である。

……父親はトム・タリヴァーの父であるという、ただそれだけの理由で、ともすれば、常に正しい人間であると考えがちであったので、今日まで父親に対しては、そういう（父親を非難するという）気持は全然働いてはいなかったのだが（中略）一家をこのように零落させ、世間で物笑いの種にされたのは、恐らく父親にその責があったのだろう。……彼の性質である持ち前の力と剛毅は、……一人前の男として振る舞って、母親の世話を看なければならぬという意識との二重の刺戟に駆られて、己を主張し始めていた。(215)

「父親はトム・タリヴァーの父である」という理由だけで「常に正しい人間であると考えられる」という表現はトムに、タリヴァー家の跡継ぎとして「一人前の男」の自覚（「氏素性」）、即ち家父長としての自覚が芽生えつつある⁽¹¹⁾証拠でもある。元来聖書、とりわけ福音主義の教えを制度化したことに由来はしていても、既に、古くて因習化し形骸化していた家父長制度とそれを肯定し服従することを是とする因習が支配する聖オグの町が『フロス河の水車場』の舞台である。加えて、この『フロス河の水車場』（1860年初版本発行）が書かれた19世紀後半の社会基盤の根底を支えていたものの一つが、既に形骸化した因習的な道德が挙げられる。他方制度面でも家父長制度が、福音主義を具体的形にしているといった宗教的雰囲気だけの、形骸化した象徴的存在であった。

トムの場合、彼は父親の代でタリヴァー家が「零落」し「世間で物笑いの種」になったのだから、父親のタリヴァー氏が「正しい」人でない、という考えを持ち始めた。トムのこうした判断の基準が、家父長制度の肯定とプロテスタンティズムの「規律」⁽¹²⁾の中の「勤勉」、「蓄財」という概念にある。一応の支配階層であるジェントリー層に属しているトムにとって、そうした階層の家父長にふさわしいラテン語や上流階層のみの中で使われる英語の文章が書ければ、より良い仕事に就け、「勤勉」であれば「蓄財」が出来る。これは「節約し、神から借りている金（と時間）を無駄にしない」プロテスタンティズムの「規律」を守ることである。そうして得られる家の繁栄が「規律」の実践者、トムの魂の「救い」に繋がるとする考え方である。

やがて仕事に就くことを考え始めたトムは、ディーン叔父に相談する。そしてディーン氏から、たとえ親戚であっても、能力と資格⁽¹³⁾が無ければ援助しないと告げられる。その場面を見てみたい。

「……ある口（仕事）につけてやるとすれば、わし[ディーン氏]にはお前[トム] に対して責任のあることを心に留めてもらわにゃならん。それもお前がわしの甥だという理由の他には、これという理由は、いいかな、一つも無いんだからな。お前が何かの役に立つかどうかは、まだこれから分かることなんだからな」

「叔父さん、僕は叔父さんの面目を傷つけるようなことは、決して、しないつもりです。」とトムは、世間がお前達を信用する理由が無いという不愉快な事実を聞かされた時、全ての少年が感じると同じように、気を悪くした。(244) ([]内、筆者)

トムが私学校で学びながら同時に仕事を探す段になるまで、家が経済的に困窮するようになっても、父親のタリヴァー氏のすることを正しいとして疑わなかったのも、彼は怒りを抑えて「名誉」(244)を重んじるから信用して欲しいとディーン氏に頼む。つまり、この場面では「名誉」はプロテスタンティズムの「規律」の「誠実」を意味すると見なされ、「名誉＝信用」の等式が成り立っている。トムは立派に血縁であること（伝統）以外に世間が信用するだけの理由を挙げる事が出来たので、ディーン氏の「面接試験」に「合格」したのである。

トムは、マギーを形骸化した因習的な聖オッグの町の道徳に従わせるまで何度でも教え諭すことが、タリヴァー家の長としての正しい振る舞いであることを、何処までも信じて、

疑わない。タリヴァー家の長としての正しい振る舞いを強く意識している点で家父長制度の考え、そしてマギーを何度でも教え諭すことを厭わない点で、プロテスタント主義の「まじめ」と「誠実」の特徴がトムに表れている、と見なせる。但し、マギーを何度でも教え諭すことから、妹の説得に時間をかけることが、プロテスタント主義の「神から借りている時間を無駄にしないこと」には背かない、とトムは思っていると見なせる。更にトムがマギーを聖オグの町の道徳に教化するために努力することについて、別の様相を呈している。それは、死後の「救い」に向けてプロテスタント主義の2大特徴である、聖書主義と信仰主義の実践だと見なせることである。

「トムがマギーに対し終始、支配的で」⁽⁴⁾いられるのは、マギーが隣人愛の教えを説いた福音書（マタイの福音書、22:39）にどこまでも忠実であろうとする、真の福音主義を目指して実践しているからこそ、可能な振る舞いである。マギーがトムの因習的な道徳とか家父長主義に同調しているかのように見えるが、決して彼女自身はそう思っていないところが見られる。それは、マギーが理想主義と福音主義の調和という、彼女なりの「真の福音主義」を求めようとしているからではないだろうか。

註

- (1) ジョージ・エリオット 『ジョージ・エリオット著作集』第2巻（『フロス河の水車場』、『サイラス・マーナー』）工藤好美・淀川郁子訳（文泉堂出版、1994年），p. 358.
- (2) Eliot, George. *Mill on the Floss, Edited with an Introduction and Notes by A. S. Byatt*, London: Penguin Books, 2003.以下、括弧内の数字はこの本をテキストとし、翻訳は『ジョージ・エリオット著作集』第2巻（『フロス河の水車場』、『サイラス・マーナー』）工藤好美・淀川郁子訳（文泉堂出版、1994年）を参照させて頂いた。
- (3) 大塚由美子 『マーガレット・アトウッド論 サバイバルの重層性「個人・国家・地球環境」』（彩流社、2011年），pp. 44-45.

著者は氏の著書の中でマーガレット・アトウッドの『浮かびあがる』という作品を、小説の主人公のアイデンティティ探究の物語であると同時に、作者自身が属しているカナダ人という「アイデンティティ」探究の物語である、と論じている。

- (4) フィリップ・ハートノル、子安雅博訳『ジョージ・エリオット登場人物事典』（京都修学社、1998年）、p. 102.
- (5) フィリップ・ハートノル、子安雅博訳『ジョージ・エリオット登場人物事典』（京都修学社、1998年）、p. 243.
- (6) 福永信哲『絆と断絶』——ジョージ・エリオットとイングランドの伝統（松籟社、1995年）、pp. 141-2. 福永による登場人物分析では、フィリップは「繊細な感受性と鋭い人間洞察力を持った人物として描かれて」いるという見方である。
- (7) 西原廉太『聖公会が大切にしてきたもの』（聖公会出版、2010年）、p. 45. 因みにイギリスのキリスト教の特徴を定義づけたとされるリチャード・フッカー（1553/1554～1600）はイギリスの法学者、聖職者。
- (8) 『『キリストに倣いて』』、『ブリタニカ国際大百科事典』第2巻（Edinburgh、1980年）、p. 258.
- (9) *Ibid.*
- (10) 小説の中で語り手の採る技法の1つ、“narrator-character”と呼ばれる。ちなみに小説を書く際、ジョージ・エリオットを手本にしたとされる後生の作家、ヘンリー・ジェイムズは作中の登場人物を「語り手」として用いる創作手法を特徴としている。例えば『巨匠の教え』では、彼は‘narrator-character’として3度しか作中に登場していない。
- (11) 大嶋浩「*The Mill on the Floss* における Tom Tulliver と自己改革」（兵庫教育大学第2部 言語系教育講座、1998年）、pp. 23-37.
- (12) 「規律」、『広辞苑』第7版（岩波書店、2011年）、p. 101. 西原廉太『聖公会が大切にしてきたもの』（聖公会出版、2010年）。リチャード・フッカーは、イギリスに於けるキリスト教の特徴を「聖書（主義）、伝統、理性」だと定義している。プロテスタンティズムは信仰主義、聖書主義の2点に要約される。プロテスタンティズムの「倫理（規律）」の概念を簡潔にまとめると、救済される人間とそうでない人間とを、神が一方的に選択する（予定説—聖書の教理の一つ）に基づいた日常生活に深く根を下ろした説と言えよう。具体的な倫理（規律）として、正直、勤勉、節約、まじめ、謙虚、誠実、そして神から借りている金（蓄財）と時間を無駄にしないことが、挙げられる。
- (13) 19世紀後半当時、「その人がどういう人であるか（英単語では‘identity’の訳語の1つとして考えられる）」を定義するものとして、血筋（血統）、資質、能力の3要素から成り立っているとしていることがエリオットにより紹介されている。そしてトムは、

ディーン氏とのやり取りから「自分は何者であるか」を意識していくことになる。

(14) L・クーパー、土井治訳『英米文学ハンドブック』（研究社、1965）, p. 30.

II.4. 農村共同体

II.4.1. 『フロス河の水車場』に於ける農村共同体

II.4.1.1. 農村共同体の定義と『フロス河の水車場』に見られる農村共同体的概念の変貌

「農村共同体 (Rural organization)」という倫理的観念を形作る基礎となった概念がエリオットの作品には見られる、とテリー・イーグルトン (1992) ⁽¹⁾ は述べている。

農村共同体は、人間が地縁、血縁、精神的連帯によって自然発生的に形成した集団のことを意味している。家族や村落など共同体 ⁽²⁾ を形作ってきた礎となる人の集合体の一形態とも言える。

しかしイギリスでは産業革命後、土地を媒介として持ちつ持たれつの関係や、地縁、血縁を基にした農村共同体が、貨幣のやり取りを礎にすることが中心になっていく。それにつれ、農村共同体を成り立たせていた概念や価値観も、自ずと変貌を遂げていくこととなる。

そうした共同体の中心を成す観念の移行期に生きた人々の様子を、エリオットが『フロス河の水車場』の中で描いている。彼女は『フロス河の水車場』の登場人物に、農村共同体、変貌した農村共同体的概念、それぞれの価値観を代表させている。『フロス河の水車場』の場合、農村共同体の価値観を代表する登場人物も、変貌した農村共同体的概念を代表する登場人物も、共に周りの倫理観、思考を無視して、ただひたすら各自の持つ理想 (主義) の実現を図るところが観られる。

以上これまで見てきたような、農村共同体を成り立たせていた概念や価値観や農村共同体的価値観の変貌した概念や価値観も含めて、『フロス河の水車場』に農村共同体的、変貌した農村共同体的概念両方の概念や価値観も描かれていることを、以下の特徴的な登場人物3人を例に、立証していく。

II.4.2. 登場人物に見られる農村共同体的概念とその変貌についての具体的検証

II.4.2.1. ウェイクムに見られる農村共同体的概念とその変貌した概念

『フロス河の水車場』でウェイクムは、農村共同体的概念の変貌した姿が見られる登場人物たちの内の一人と言えよう。ウェイクムは19世紀後半に新しく興ってきた知識階層の職業の一つである、弁護士という、聖職者階層に対抗する階層を構成する職業に就いている者として描かれている。しかし水車小屋と土地を手に入れた後、タリヴァー氏に仕事口を紹介する仕方に、「農村共同体」的概念が見られる。第三部第8章の冒頭から程近い場面を以下に見てみる。

そしてウェイクムは家屋敷を見まわってからディーン氏とグレッグにタリヴァー夫人の面前で、タリヴァーが恢復したあかつきには、こちらはすすんでこの仕事の支配人に雇いたいと腹蔵なく意見を述べたのである。この提案は親族一同に多くの論議を引き起こした。伯父も伯母もほとんど言い合わせたように、タリヴァーの胸ひとつにある感情のほかには妨げになるものがないとすれば、これほどまでの申し出は拒げるべきではないという意見であった。そして、このタリヴァーの感情には、伯父も伯母も共鳴できないばかりか、全く理屈に合わない子供じみたものとみなされた——(268)

「タリヴァーが恢復したあかつき」とあるのは、タリヴァー氏が馬から落ちた為に「間隔をおいて繰り返される痙攣性強直の発作」(232)が治まって、落馬による怪我からも恢復して働けるまでに動けるようになることが前提であるということを示している。ウェイクムは、収入を得る手段を失うことになった裁判の相手であったタリヴァー氏に、自分が手に入れた水車小屋の支配人の仕事口を世話することを申し出た。ウェイクムのこの申し出が、裁判で負かした相手への温情と受け取られたことが、「これほどまでの」という言葉に込められている。しかも申し出の仕事が始めるのは、馬から落ちた外傷の上に「痙攣性強直の発作」を抱えて寝込んでいるタリヴァー氏が恢復してからでよい、とまで申し出ているからである。そしてこの場面はトム視点から語られている場面なので、トムにとって親類に当たる「伯父や伯母」となっている。親類の彼らから見れば、タリヴァー氏が裁判相手に対して良くない感情を抱いていることなど、仕事口を断る理由として「共鳴できないばかりか、全く理屈に合わない子供じみたものと」見なされていたという状況も加わっていたのである。故にウェイクムの仕事口の申し出自体が地縁を重んじ、同じ地域に住む人間同士という観点から手を差し伸べるという、農村共同体的概念に沿っている、とタリ

ヴァー氏の親類に受け取られた。その申し出もウェイケムは、直接タリヴァー氏に言うのではなく、親類のディーン氏とグレッグ氏に対して行っている。また、この行為も、仕事口の申し出対象であるタリヴァー氏の血縁を尊重したものとなっており、血縁関係を大事に考える農村共同体的概念に合致している。

よって、ウェイケムがタリヴァー氏に仕事口を申し出ている、この場面にウェイケムの農村共同体的概念が表れていると言える。

しかし、ウェイケムは一方でタリヴァー氏の所有である水車小屋や地所の問題に対して、冷徹な見方をしていた。第三部第7章の以下の場面を見てみる。

彼は個人個人を観察するたちではあっても、箴言に従って人を判断するたちではなかった。そして、人はみな自分と同じではないということを彼ほどよく心得ているものはなかった。そのうえ、彼は地所や水車の問題については、全てに亘ってかなり綿密に監視しようと考えていた。こういう実際的な農事関係の事柄が彼は好きであった。しかし、ドールコウト水車場を買うについては、水車場の持主に恩恵ある復讐を加えようということとは全く別に、れっきとした理由があったのだ。投資として、これは全く素晴らしいものである。その上、ゲスト商会が入札しようとしている。ゲスト氏とウェイケムは食事を共にするほどの親しい仲であった。

で、ウェイケムは、食卓でもそうであるが、町の仕事についても声が高すぎるこの船主兼水車場の持主よりも優秀になりたかった。(266)

この引用箇所、エリオットが、ウェイケムの人物的特徴やタリヴァー氏の所有である地所や水車小屋に対する彼の考えていることを解説している場面である。「投資」、「入札」という語が用いられており、ウェイケムが地縁血縁関係を大事にする「農村共同体」的概念と対照的な冷徹な見方をする人物であることが描かれている。

水車小屋の所有者としての立場を誇示するのではなく、親類の薦めという形でタリヴァー氏に仕事口を勧めて、タリヴァー氏の血縁関係を大事にする考え方を尊重するという点で、この場面でのウェイケムスの思考や行動は、農村共同体の特徴に合致している。しかし、彼は「水車場の持主」であるタリヴァー氏に「復讐を加えよう」としているので、「恩恵に見せ掛け」れば、周りも認めてくれる、と高をくくっているところが見られる。

以上のことから、この2ヶ所の引用箇所に、ウェイケムが「農村共同体」的考え方も出来

るし、変貌した農村共同体的概念にも順応していることが示されていると言える。但し、彼の各々の考え方の中に、例えば水車小屋を買うのは「投資」だ、という冷徹な面が変貌した農村共同体的概念が見られる一方で、「農村共同体」的概念の方には「復讐」という個人的思惑を帯びた地縁に拘る一面も覗かせている。

II.4.2.2. タリヴァー氏に観られる農村共同体的概念とその変貌

タリヴァー氏は「近所の人たちを相手取っては訴訟を起こし、最後には負けてしまうという悪い癖」⁽³⁾がある登場人物として『フロス河の水車場』に描かれている。タリヴァー氏のこの性格が『フロス河の水車場』では最も典型的に農村共同体的概念の変貌に直面し、混乱の極みにある姿を象徴するものとして描かれている。

そのことが読み取れる第三部第8章の場面を以下に例として挙げる。まず、以下の場面で、タリヴァー家が代々の当主が所有し、受け継いできた水車小屋が競売にかかったことを、タリヴァー氏が嘆くところから始まる。

ゆっくりと自分の椅子の方へ足を運びながら「ああ！競売にされてしまったんだな、競売にされてしまったんだな」と言った。

それから腰をおろすと杖を下に置いて、再び辺りを見まわした。・・・「大きな聖書は置いてあったな。あれには何もかもが書きいれてある——わしの生まれた日、結婚した日——トム、持って来なさい。」と彼は言った。(273)

タリヴァー氏が農村共同体的概念の変貌に直面し、混乱の極みに陥った時、彼は息子のトムに命じて、これもやはり代々受け継いできた、「何もかもが書きいれてある」、「大きな聖書」を持ってこさせる。彼は「大きな聖書」に自分の「生まれた日、結婚した日」が書き込まれてあることを思い出し、タリヴァー家の歴史を懐かしもうとする態度を見せている。そして次の箇所、水車小屋(製粉所)も地所もウェイケムの所有になってしまったにも拘わらず、尚、ウェイケムに対して負けを認めようとしないので、タリヴァー氏が妻から責められている場面である。

「ベッシー、お前はわたしをお前の気の済むようにするがいい。わたしはおまえを貧乏に
してしまったのだ。……この娑場はわしの手には負えない。わたしはほんに、
破産した男に過ぎない——今となっては何を言い張っても無駄だ」と彼は声を落として
言った。(275)

前出の二か所の引用した場面以外のところで、タリヴァー氏は「何もかもが書きいれてあ
る」と言って「わしの生まれた日、結婚した日」が書いてある「大きな聖書」に、他に彼の
母親の名前や亡くなった年齢まで書いてあることを、妻や息子の前で語っている。タリ
ヴァー氏にとって家族の歴史があることが自慢であり、誇りであるのだ。妻や息子のいる
タリヴァー氏の母親の亡くなった年齢が書かれているくらいだから、「大きな聖書」が相当
の古い、年代物であることが分かる。

この場面を引用した理由の一つに、聖書がタリヴァー家の当主に代々受け継がれてきたこ
と、その辞書に血縁関係が記されていることから、血縁関係によって構成される「農村共
同体」の考え方を象徴するものとして、この「大きな聖書」が描かれていることが挙げら
れる。そしてタリヴァー氏が、血縁関係の記されている聖書をトムに持ってこさせた理由
として「農村共同体」の考え方を改めて妻や息子の前で示し、彼等に理解してほしいと願
ったからそうしたのではないかと見る事が出来るからでもある。

タリヴァー氏はこうした自分の意図や願いに反して、ウェイケムが引続きタリヴァー氏
が元の地所に住むことや紹介した仕事口に就けば週 30 シリング出すこと、市場へ乗って
ゆく馬も提供する用意があることを妻から聞かされる。タリヴァー氏の、誰かれ見境なく
反抗せずにはいられない性格のせいで、家族全員が落ちぶれたのだと、彼が妻から責めら
れたりする。

これに対して妻を「貧乏にってしまった」とか「わたしは破産した男にすぎない」と言う
タリヴァー氏の発話に用いられた表現が、「農村共同体」の概念が、もはや、聖オグの町
の中心的概念を成し得なくなったことを物語っている。

そしてタリヴァー氏が「ああ！」と感嘆した後に、「競売にされてしまったんだな、」と二
度も繰り返している。加えて彼はこの引用した場面でウェイケムが台頭し、幅を利かせて
いる状態のことを「娑場」と呼んでいる。「娑場」という語は刑務所などにいる人たちが外
の自由な世界をさしている語⁽⁴⁾とされている。この小説の翻訳者であられる工藤、淀川
(1993) が、タリヴァー氏が自らの心境を吐露する発話に「娑場」という語を用いている。

このことから、「農村共同体」的概念から地縁血縁関係を大事にするタリヴァー氏にとっては、ウェイケム（の持つ意識）に逆らって「刑務所」等に入れられているかのような、「苦しみの多い世の中」（仏教語で言う「娑場」の場合の意味）にいるような心持ちであったことが窺い知れる。

加えて「競売」という、およそ地縁血縁関係を大事にする「農村共同体」の概念では考えられない制度が出来たことに感嘆したり、「競売」制度のある状態を「娑場」と呼んでいたたりするこれらの言葉に、タリヴァー氏が「農村共同体」の概念の変遷を自覚したことが表現されている、と言えよう。故に、「大きな聖書」に記された母親や妻や自分の歴史が示すものが、今までタリヴァー氏が生きてきたことの証である。と同時に血縁を大事にしているという、彼に見られる農村共同体的概念である。そして、タリヴァー氏が第三部第8章のこの場面で「大きな聖書」に記された母親や妻や自分の歴史を懐かしむという行為に出たことで、彼が「農村共同体」の概念の変遷を自覚したことが、示されていることになる。

II.4.2.3. トム・タリヴァーに観られる農村共同体的概念とその変貌

トムの場合、血の繋がった伯母たちが「母親の為にもっと何かしてくれるのが当然だと思いつながら」（236）、それでいて、伯母たちが「優しくしてくれなかつたり、情ある仕打ちをしてくれなくなっても」、「恨み」に思わないでいられる点が描かれている場面（第三部第5章）が特徴的である。そこで以下に、このようなトムの性格を示している文章を含む、ウェイケムとの裁判後のタリヴァー家の様子に対する、トムの心理を描写しているエリオットの解説部分を取り上げてみたい。

そして、トムは非常に不幸せであった。屈辱はもとよりのこと、我が運命の行く先の苦難をも、誇り高い性質であるだけに、ひとしお鋭く感じた。そして、父親に対する決然たる孝心にも拘わらず、そこには、父親に対する抑えがたい憤りがまざっていて、その為、我が身の不幸が一層堪え難く、不当なものと思わせられるのであった。これらのことは、父親が裁判に訴えた結果であってみれば、日頃、伯母や伯父が口癖

に言ったように、確かに父親には責めるべきところがある。そして、伯母たちは母親の為にもっと何かしてくれるのが当然だと思いながらも、伯母たちが本気になって優しくしてくれなかったり、情ある仕打ちをしてくれなくなっても、マギーのような激しい恨みは何も感じないのであった。このことはトムを意味深く示していた。要求すべき権利として自分の心に考えられないことを他に期待する衝動は、トムにはなかった。自分の金の締めくくりもしなかった人に、惜しみなく金をやらねばならぬ理由がどこにある？ 苛酷な仕打ちにも道理のあることを、トムは心得ていた。彼自身にはそういう道理にかなった苛酷な仕打ちを受ける手は、決して無いという確信があるので、尚更、そう考えられた。父親に、思慮が足りなかったばかりに、人生のこのような不利な立場に置かれねばならないとは彼[トム]には真に辛いことであった。しかし、彼は、何もかも自分にやり易いようにしてくれなかったからといって、愚痴を言ったり、それを他の人たちの落ち度にしたりしようというのではない。人に助力を乞おうというのではない。職を与え、その仕事の報酬を払ってくれと頼むだけである。(236-7) ([]内、筆者)

但し上記の引用文で「金の締めくくりもしなかった人」とは、タリヴァー氏のことである。そして「金の締めくくりもしなかった」とは、タリヴァー氏が裁判に負けて、抵当に入っている水車小屋や地所に加え、裁判にかかった費用まで借財が上乗せされ、タリヴァー家の収支の「帳尻」が合わなくなった、という意味である。

第三部第5章のこの場面に、トムの農村共同体的意識への拘りと「変貌した」農村共同体的概念に対しても順応しようという意識が見られる。「仕事の報酬を払ってくれと頼むだけである」という表現に、トムが仕事というものが対価というもので評価されるようになったという認識を持っているということを示している。故に、農村共同体的意識を持っていることで屈辱を感じていなければならないと周囲から見なされることに、トムは反発を感じている。その一方で、トムは父親のタリヴァー氏に、「ウェイケムの下になってもらいたくなかった」(268)という、矛盾を抱えている。裁判に訴えた父親の行為の結果、お金でタリヴァー家代々の地所と仕事場であった水車小屋を取られ、仕事は金銭で与えるといった態度を見せているウェイケムに屈して欲しくないという、トムの意識に、トムは地縁血縁を大事に考えているということが窺える。トムはタリヴァー氏に、農村共同体的意識を守って欲しいという願いはあるものの、仕事というものを、タリヴァー家代々専有のもの

だからするのでなく、対価を得るからするものだという認識に変えなければならないとも考えている。ここにトムの中で血縁が仕事を決めていた農村共同体的意識から、切り替えなければならないと思っている心の内の葛藤が見られる。故に、この場面の引用箇所におけるトムの心理描写に、エリオットが細心の注意を払っていることが窺える。

註

- (1)Eagleton, Terry. “George Eliot: Ideology and Literary Form”, edited by John Peck, *Contemporary Critical Essays, New Casebooks Middlemarch*, London: MacMillan Education, 1992, pp. 318-9.
- (2)「ゲマインシャフト (Gemeinschaft)」、広辞苑第7版 (岩波書店、2011年) , p. 1385.
ドイツ語。ドイツの社会学者、テンニエスが設定した社会類型の一つ。
- (3) フィリス・ハートノル、子安雅博訳『ジョージ・エリオット登場人物事典』(京都修学社、1998年) , p. 140.
- (4)「娑婆」、広辞苑第7版 (岩波書店、2011年) , p. 941.

II.5. 初期フェミニズム

II.5.1. フェミニズムについて

II.5.1.1. フェミニズムと初期フェミニズム(概論)

フェミニズムとは1792年、メアリ・ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』を出版したことが運動の始まりとする説がある。このようにフェミニズムとは女性の権利の確立、ひいては今日の男女共同参画政策に繋がる、男女同権を目指そうとする主義を指すものと一般的には定義されるものと考えられる。

フェミニズムは18世紀のフランス革命で採択された人権宣言に女性の権利が謳われていなかったことへの女性たちの抗議を発端とする。18世紀以前の社会では、一部の上流階級を除き、女性も男性と同じ労働や農作業に従事していた。後の産業革命はヨーロッパ各地に都市という環境をもたらし、それによって女性達は「専業主婦」という新たな立場、社会的地位づけを得たのである。いわばフェミニズムは、思想面におけるところの産業革命がもたらした「副産物」のようなもの⁽¹⁾とも言い替えられよう。

II.5.1.2. 『フロス河の水車場』に見られるフェミニズムが生まれた背景等について

『フロス河の水車場』の初版(1860)が世に出された19世紀当時、産業革命がイギリス国内の内陸や地方にまで浸透し始め、科学技術によるそれまでの迷信などが少しずつ解き明かされ始めた。しかし地方社会を実際に支配、運営していた大多数の人間の思考に於いては、摂理や運命といった、旧態依然とした観念が人間の心理を左右しているところがあったように見受けられる。あるキリスト教の視点からの女性の立場社会的矛盾と「社会的悪」について、ピーター・ミルワールド(1969)⁽²⁾は、フェミニズムが生じた背景となった女性に関する事柄を含めた社会に存在する様々な矛盾を包括して「悪の問題」と呼び、そのことについて1つの啓示を私達に与えてくれている。その部分を以下に紹介する。

ミルワールドが「悪の問題」と呼ぶものの本質である「さきわいなる罪」という逆説は、英国文学でもなかなかの主題となっていて、15世紀初頭、ノーウィッジのジュリアン夫人が書いた『神の愛の証』まで遡ることが出来る。その「証（あかし）」の中心的主題は、アダム以来世に罪が蔓延しているけれども「すべてが良くなる」ということで、今日に至っている。⁽³⁾

ミルワールドは、この論理でシェイクスピアの悲劇的性格を持つ戯曲の主題が「恵み深い『摂理』の計画の中では、『悪』からも善が引き出される」ことに在る⁽⁴⁾と解析する。『悪』から善が引き出されるという主題が、ひいてはミルトンの『失楽園』に受け継がれているとしている。

「人間に対する神の様々なやり方を義とする」深い願いを持たしめるに至ったのだろう。サタンと反逆した霊たちの墮地獄に続いて、「悪から善を生ぜしめる知恵を持つ者」を讃える善天使の賛美の歌があらわれる⁽⁵⁾

「悪から善を生ぜしめる知恵を持つ者」を讃える、という考え方が家父長制度を不当に長く正当化してきた側面を持つ。殊に女性たちにとっては耐え難い忍従を強いるこの制度は、正に「女性たちにとっての悪」とでも言い表すことの出来る制度でしかなかった。聖書の黙示録(5:11、7:11-12)の言葉からは、天使達が神の栄光を讃えるだけでなく、神に忠誠心を持っていたことが分かる。天使たちは単に役目を果たしている僕であったわけではなく、神に対する愛や信念を抱いている。このことを踏まえて、引用の「人間」を「女性たち」に置き換えてみると、ミルワールドが、悪の問題を考える際に、彼がここで対象とする人間が「女性達」であったと仮定した方が、理解がし易い⁽⁶⁾と思われる。更にミルワールドによる、彼の言葉の根拠となった聖パウロの言葉を見てみると、上記の引用と同じ内容の記述が、新約聖書「コリントへの書」の第12章と新訳聖書「ローマ人への手紙」の第12章に見受けられる。

そこで以下の引用では、新訳聖書「ローマ人への手紙」(12:4-5)の記述の方を、2つの書を代表して取り上げる。

人は1つ体に多くの枝あれども、凡ての枝その運用をおなじうせぬ如く、我らも多く

あれど、キリストに在りて一つの体にして、各人たがひ（互い）に枝たるなり。

この一節は、教会を人間の体に例えて、信仰の拠としての教会の健全性を願った言葉との解釈がある⁽⁷⁾という。まさにミルワールドのいう「摂理の信仰」の世界は人間が主体ではなく、「神」が中心（幹）で人間は「各人たがひに」枝であるとの、一つの見方が示されている。人間が枝であるということについて、更に聖書に拠った解釈に依ると、とりわけ、女性は、最初の男性、アダムの肋骨から作られたと表現されてもいる。（「創世記」、2：21－22）この様に前頁の引用の文章は、この観点からも女性に受難を強いる文章であるとも言える。そうするとフェミニズムというのは、その考え方のどこかに反男権優位の考え方や反王権神授説という性格を、幾何かは帯びていると言えることができるのかもしれない。

この物語の最後で主人公のマギーとトム兄妹（きょうだい）は、抱き合ったまま、最期の時を迎えている。マギーは自由な男女の交際（ウェイケムとの場合）も、本当に好きな男性（スティーヴンとの場合）と添う希望も叶えられず、教育の面に於いても、19世紀当時、教養人と言われるのに必要な素養のラテン語等を学べていない。兄、トムが私学校に通わせて貰っているのに比べると、教養面一つとっても、女性の男性に対する格差の付けられ方が著しいという19世紀当時の現実が小説内に盛り込まれていると言える。エリオットの視点のある種の偏りを明らかにするという本論の研究目的に照らしてみても、小説の最後の場面であり、結び句に聖書の一節をそのまま転記したエリオットに、フェミニズムの観点からどのような意図があったのか、という考察を試みる。研究の目的及びフェミニズムの観点からの考察という点では、『ミドルマーチ』を論じた章と同様である。よって、この項で「初期フェミニズム」による「社会悪に対する解決策」を考える際には、明らかに犯罪と呼べるものの他に、法律では裁かれないが、明らかにその行為や動機が女性たちに悪影響を及ぼしている場合には、社会や集団（組織）として何らかの具体的措置を講じて罰しなければならないことが起きてくる、ということ踏まえた上で論じる必要がある。それを欠いた議論は、単なる自己主張の押し付け合いにしかならない可能性が大きいからでもある。

つまり、この聖書の一節である結び句を含む、トムとマギーがフロス河の洪水によって最後を迎える場面を考察することが、社会に存在する女性たちの大多数にとって迷惑な人や行為、彼女たちにとって「悪」以外の何物でもない、これらの障害をいかに克服し、彼女たちの為の自由と権利を如何に勝ち取っていくのかという命題に取り組むことに繋がる。

以上の視点を踏まえた上で、イーグルトンの指摘する「初期フェミニズム」と、その考え方に沿った「社会悪に対する解決策」について以下に検証する。

II.5.2. 『フロス河の水車場』に見られる初期フェミニズム

II.5.2.1. 旧来の価値観（福音主義）、体制（家父長制度）の対極にある考え方として

フェミニズムは 18 世紀後半まで永らく社会的基盤を形作ってきた価値観や体制としての福音主義や家父長制度の対極的考え方を持つ。それ故に、その運動を動かす原動力的精神的支えとして、福音主義や家父長制度の持つ様々な偽善に対する憤怒や、それらの考え方や制度の抱える矛盾や問題点に気付いたが為に大きく世界的な運動へと発展し得た。

II.5.3. トムとマギーがフロス河の洪水により最後を迎える場面についての考察

II.5.3.1. 具体的検証①

この小説では、トムとマギーの兄妹の関係性をどう観るかによって、初期フェミニズムの考え方の中で、「社会の悪」に対する各登場人物の対応が変わってくるのではないかと仮定して分析を試みている。そしてこの項では、トムとマギーの兄妹の関係性を、旧来の価値観の転覆を意図する「悪魔」という視点から、分析してみることとしたい。

土井治氏（1965）の訳による、この兄妹の関係について記述されている箇所を見ると、トムはマギーを一方向的に支配していて、二人の間には支配と被支配の関係が見られる⁽⁸⁾としている。その様に読み進めていく場合、また、何度か読み返せば、トムは、身体だけでなく、心をも清らかにするという意で用いられてきた、「垢離」⁽⁹⁾というものを取る必要があったのではないか。彼が体の垢離よりも「心の垢離」を取っていかなかったことが、社会の悪に立ち向かう時、彼の一番身近にいてくれて、相棒とも頼むべき妹マギーの信頼を

勝ち得ることが出来なかった。トムはそれが為に、社会の悪と呼ばれるものに敗れたのではないかと見ることもできよう。

この場面では、マギーが根底からひっくり返そうとしているトムが持っている考え方である、当時の家父長制度を「心の垢離」と表現した。ではマギーにとっての「心の垢離」、即ち障害となるものとは何か。一つは、トムのタリヴァー家を維持、発展していくという使命感である。マギーがスティーヴンと別れて帰ってきたのに、トムは怒っている。それはマギーの男性との駆け落ちという行為が、当時の男女のする行為として倫理的、道徳的に反している行為に当たるため、家としての社会的信用の失墜を招いたからでもある。そのことはトムの発話に明確に示されている。

父さんが生きてらした頃は、君 [マギー] が父さんはもとより、君自身の、また家中のものすべての不名誉になることをしないように、僕は出来る限り君を押さえたいなければならぬと思った。(408) ([]内、筆者)

トムにとっては、妹の気持ちよりタリヴァー家としての世間体の方が大切だったということになる。加えて、この当時の家父長制度に基づいた考え方による「世間体」といった基準で、男女の自由な恋愛感情まで縛られるのは、マギーのような、女性の自立、女性の「自由な権利」意識に目覚めた者にとっては、覆さなければ、自分が生きていけない程の重大な障害であったことが分かる。

ウェイケムのみならず、スティーブン・ゲストの時も同様、トムはマギーがいかなる男性と行動しても、付き合っても、ひいては密かに会って話すことすら許さない。そのことは常にトムの行動や会話にも顕著に顕れていて、物語の後半でマギーはしつこく兄に食い下がる場面がある。その時に彼女はこう打ち明ける。

どうしてそんなことおっしゃるの、トム？随分酷いわ。私[マギー]は自分に出来るだけのことは全部してきたつもりだし、また、我慢してきたじゃないの。そして、私は兄さん[トム]にあの時——あのおとき、お約束した言葉を守ってきたじゃないの。私の生活だって兄さんと同じように幸せじゃなかったわ。(408) ([]内、筆者)

マギーは家族の皆から見張られていた理由が、家族の不名誉になることをしないように」

ということだという。一番信頼出来る筈の家族との関係が見張る見張られる関係というのが悲しいことのように思われる。それでもマギーはトムを慕い続ける。フィリップとの別れもトムが彼と付き合うこと自体を嫌ったからである。マギーはフロス河が氾濫したときトムのことが気になってひきかえし、それが為に荒れる水に吞まれてしまう。自分が助かる道もあったのに、マギーは何故戻ってトムの様子を見に行っただろうか。それを裏付けるのが以下の部分である。エリオットは彼女なりにマギーがフロス河に引き返した理由を述べている。

非常な災難（フロス河の氾濫で水車場付近一帯が浸水）に直面して、我々の生活にある人為的な衣のすべてをかなぐり捨て、人間としての原始的な要求に各自が一体となる時にも、尚居残ろうとする不和が、冷淡が、不信があるだろうか？ぼんやりとマギーはこうしたことを思い浮かべた。[兄、トムがマギーにした]慈愛の無い[仕打ちに対する]冷淡な怒りや誤解から受けた最近の全ての印象。(539) ([]内、筆者)

まず、この引用箇所では、マギーが持つ人間の原始的な欲求に対してトムによる否定の行為の事実が書かれている。この場面に於いても、トムとマギーが、洪水から助かりたい、生きたい、と思っているということである。人間は生きている間は、見えもせず、存在に対する確信が持てない「神」というものに代わりに最も尊敬する人間の姿にその御姿を重ね合わせ、その人から受ける愛情でもって、生きているという実感を得て心の安寧にしようとするところがある。

しかし、そのような気持（姿勢）が小説内に於いて、いつしかマギーの心から消えてしまうという一面を見せるようになる。彼女にしてみれば、人間の持つ原始的な欲求、命が惜しい、という時にも尚、トムに対して「不信」、「冷淡」、「不和」が気持ちに入り込む、所謂、復讐の意図が入り込んで来てしまう、そういった余地があるのかということである。マギーは、命の存亡に関わるような、洪水に飲み込まれそうな、この場面にあって、それでもトムが自分にしてきた服従や忍従を強いてきたことに対して和解すらしない。それどころか復讐を企てる、そんな恐ろしい想像をしていたのである。

II.5.3.2. 具体的検証②

19世紀当時のイギリス社会にはまだ家父長制のように、教会の世界でも、男性に優る論理や能力を持つ女性を「魔女」と呼び、教会社会のような信仰世界から排除しようとする風潮⁽¹⁰⁾が残っていた。前項で論じたように、マギーが自分をずっと虐げてきたトムを、この機会に殺してやろうという感情に駆られたとした時、マギーの場合、教養は男性並みではなかったものの、自分なりの考え方を持って立ち（ある意味で自立した女性であり）、主張する女性であった。その為にトム・タリヴァーは彼女を、水の中の「魔女」であると考え、彼女を悪く評し忌み嫌う描写の部分に、19世紀（小説が発表されたのは19世紀後半）当時の風潮が現されている。

『フロス河の水車場』の中でも、歩行に障害のあるフィリップと逢って話していることをトムから咎められたことに、マギーがトムの悪口を心の中でつぶやいたりするのだが、そのくらいのことでは、マギーがスティーヴンとの仲を進展させることなど出来はしない。まるで嫉妬がマイナスの波動で不幸を引き寄せる⁽¹¹⁾「力」に恋の進展を邪魔されているかのようなのである。この法則は決してイギリスを含めたキリスト教圏に特有のものではないようである。⁽¹²⁾ フェミニズム運動が18世紀のフランス革命で採択された人権宣言に女性の権利が謳われていなかったことへの女性たちの抗議を発端として認められていったように、具体的に表立った行動を起こすことによって初めて、彼女たちの不満が改善されている。フェミニズム運動が様々な行動様式で現代の心理学で定説的法則とされていることに繋がっていることの一部が、マギーのスティーヴンとの交際を遮られた事への不満に対する、対処の仕方の中に示されているとも言える。そしてまた、悪口を言う（嫉妬するという）行為は、マギーの置かれている社会や制度、支配的思想や概念に対して不満を持ち、いずれは打ち破りたいとする願望の裏返しとも解釈出来る。特にマギーに見られる当時の女性達のこうした不満や願望はやがて「初期フェミニズム」⁽¹³⁾ 運動として、社会に対する具体的な働きかけとして顕れてくることになる。

『フロス河の水車場』の中でも、トムが仕事を頼みに行って、逆にディーン氏から説教され、簿記やそろばんを習うよう言われたとマギーに話した時に彼女は、ディーン氏らの表面だけを取り繕った優しさでなく、本物の優しさを見せるのだという、この方法で以てディーン氏らの悪企みを乗り越えようと試みている。即ち、寛大さで以て悪巧みを丸ごと包み込んでしまおうというのであろう。エリオットがマギーのそうした考え方を解説している場面で、上記のことを検証してみたい。

彼女[マギー]が自分だけの考えの中で、新しくこの世界を創り変える時に想像するよ
うな、あの寛大さも、優しさもない。書物の中には、何時でも、気持の良い人、思い
やりのある人、また、他の人をしあわせにすることを行って喜ぶ人が出て来る。そし
て、そういう人達は、人のあら探しをして親切ぶったりはしない。書物の外の世界が
幸福であるとは、マギーには思われない。自分が愛そうともしない人達や、身内でも
ない人達に鄭重に振る舞う様な人達の住む世界らしい。(247) ([]内、筆者)

前頁の引用箇所では、まず、エリオットは書物の中の世界は虚構ではないか、と疑いたく
なっているマギーの気持を代弁している。「他の人を幸福にすることを行って喜ぶ」、即
ち「利他」の精神を持った人が書物には登場する。「人のあら探しをして親切ぶったりは
しない」のが本来の人間というものの姿ではないのかと言いたいの、マギーの正直な気
持ちであると解説を加えている所であると解釈出来る。

既に述べたように「批判、悪口、嫉妬はマイナスの波動で不幸」を招くとは「天に唾す
る（唾を吐く）と自分の顔にかかってくる」と一緒の意味である。マギーの言うように、
「人のあら探し」をする人達は、結局自分たちも他の人達から足を引っ張られ、悪口を言
われ、ますます不幸の連鎖から抜けられなくなってしまふ。だから、フェミニズム運動を
する際にはこの点に注意を払うようにとのエリオットの忠告めいた気持が、設定したマギ
ーという登場人物（こうした登場人物を「映し手」と呼ぶ）の台詞を通じて⁽¹⁴⁾、法則とし
て小説の中で証明されていくこととなる。故に前頁からの引用箇所が、社会的に法律や制
度等を制定する術を持てなかった当時の女性たちによる「初期フェミニズム」運動精神の
萌芽が窺い知れるエリオットによる記述だとも解釈出来るのではないか。そのことは、物
語の後半でしつこく兄に食い下がるマギーに対して、トムも負けずに反論する場面によく
顕されている。そこで彼は次のように激しく、妹を糾弾している。この場面に於けるマギ
ーはトムにとって、社会的倫理観を破壊しようとする類の人間と同類のように見えていて、
人を惑わす「悪人」だと決めつけている面が観られる。とりわけ、当時はこうした類の女
性に関しては「魔女」とのレッテルが貼られ、処刑や追放もなされた時代の末期でもあつ
たからである。

世間に出て、他人の間で暮らす兄というものは、妹のためにはどういうことが正しい
か、どういうことが恥ずかしくないかということ、妹が自分で解ったつもりで居る

以上に心得ているのは当然だということを、君 [マギー] だって解るだけの分別があってくれてもよかりそうなものだ。君は僕 [トム] が親切でないと思っている。しかし、君の為になると信ずることをすることが、君に対する僕の一番の親切というものなのだよ。(408-9) ([]内筆者)

上記の引用に於いて、言葉の端々に顕れている、彼の持っている考え方を見ても、トムが家父長制度の象徴的存在であると判断できる。例えば、「世間に出て、他人の間で暮らす兄というもの」という表現では、兄、即ち男性で家を継いだりする者が、「どういうことが正しいか、どういうことが恥ずかしくないかということ」家の中の女性たちに代わって判断するとしている点に於いてである。この場面における家父長制度の考え方とは、女性は世間知らずで、男性にその判断力において服従すべき存在であるとみなす考え方だと言える。マギーのように、自ら考え、判断し行動する女性は「悪」、即ち「魔女」とさえ見なされた、ということをもトムの発話が示していると考えられる。このような、一見女性蔑視の考え方を面と向かって言った兄トムに対してマギーは相当な怒りと反発を感じている。エリオットはそうしたマギーの言い様を「なお半ば啜り上げながらも、努めて涙を抑えて言った」(409) と記している。

兄さん [トム] がいつも私の為にいろいろしてくださろうとしてらっしゃるお気持ち、よく解ってますわ。兄さんがどんなに働いていらっしゃるか、どんなに骨身を惜しまずにしてらっしゃるかも解ってますわ。ありがたいと思っています。でも兄さんには、どうすれば私の為になるのかお分かりにならないのよ——私達の性質はとても違うんですもの。兄さんと私 [マギー] とではいろいろなことから受ける影響がどんなに違っているかご存じないのよ。(409) ([]内筆者)

マギーには、相当、家父長の位置にある男性に対する悔しさの感情があったことが窺える。彼女は、女性というものが感情に流される者だ、との(当時もそうだったようだが) 一般的評価をよく心得て、時には武器ともなる「涙」を抑えたり、啜っていることを見抜かれて、子供だと馬鹿にされないように努めている。尚も言い合う兄妹だが、やがてマギーが次のように話し始める。

私は何を言っても、トム兄さんには良く思っただけでないのねえ。でも私は兄さんがそう思いこんでいらっしゃるほど、兄さんの心から閉め出されているわけではなくってよ。私だって兄さんと同じように解っていますわ。フィリップのお父さんに対する私達の立場から言って——ただその立場からだけですけど——私達 [マギーとフィリップ] が結婚したいなどと考えるのは不合理だということが——私達にとって間違っているってことが。そして、私はあの人 [フィリップ] を愛人と考えることも思い切っています。私は兄さんに本当のことを言っているのよ。そして兄さんは私を疑う法はなくてよ。私は兄さんとの約束を守ってきました。そして一度だって嘘を言ったことはなかったでしょう。私は、静かな友情という立場を外してまでも、フィリップと付き合いたいとは考えもしなかったわ。いえ、そればかりか、気をつけてそれは避けてるわ。兄さんは私がこの決心を守り切れやしないとお思いになるんでしょう。でも、少なくとも兄さんは、私がまだしたこともない過ちを咎めだてて、意地悪く軽蔑なざるものじゃないわ。(410) ([]内筆者)

エリオットがこの様に訴えるマギーの心底に「愛されたいという要求」があると解説していることは、別の項でも述べた。更に筆者である彼女は、マギーを「トムがかつての日にも虫食いだらけの屋根裏部屋で彼女 [マギー] を屈服させた」([]内筆者) ように、今回のフィリップとの逢瀬の場合もトムによって屈服させられたのと同様だと、説明をつけ加えている。

このことを示す例として、第1部第3章で、顔色が悪い所為か、蒼白く見える紳士で、マギーの父親タリヴァー氏の友人であり、競売人兼鑑定人という職業のライリー氏という人物が登場する。マギー達が住んでいる田園地方では、学問のある階級に属している人物として、小説内では位置づけられている。弁護士であるフィリップの父親に対する対抗意識からタリヴァー氏はこのライリー氏と親しく付き合っている様子が窺い知れる記述をエリオットもしている。弁護士であるウェイケムは「悪魔が弁護士というものをつくりさえしなければ、堰の高さについてはいかなる争いも決して起こるまいに」(17) という表現によって、エリオットはタリヴァー氏のウェイケムに対して抱いている感情を記している。弁護士という職業自体にまで普遍化され、しかも悪魔が創りだしたものに含めている点では、かなりの悪印象であると言えよう。

このように、まだ 10 代で上流とは言え、下の方のジェントリー階層に属する女の子に

過ぎないマギーが、女性というものの一面をいかにも極めてしまった、或いは知り尽くしてしまったかのように、知識階層に属する大人の男性に向かって話す場面がある。このように下の階層の者が上の階層に向かい、しかも女性が男性に向かって自分の主張を述べるという行為自体が、立派にフェミニズムの発現であると言える。その時マギーが発言した内容が以下の引用箇所である。

水の中にいる女は魔女なのよ——魔女だかどうだか試そうと思ってみんなで水の中へ入れたのよ。そしてもし泳げば魔女だけれど、溺れれば——ね、死んでしまうでしょう——そうすれば、罪がなくて、魔女ではないの。(略) けれど、もし溺れてしまえば、ねえ、そうでしょう。証がたったって何の役にも立たないじゃないの。まあ、そうねえ、天国へ行くかもしれないわ、そして神様がその埋め合わせをしてくださるかもしれないわ。(20)

この物語の最後で主人公のマギーとトムの兄妹は抱き合ったまま、最期の時を迎えている。中世「魔女裁判」が行われて以来、キリスト教の一部で、教会の方針に異を唱えたり、行動をしたと見なされ、実際に女性の手足を縛って水に沈め、浮いてきたら魔女だとする、女性をとりわけ見せしめのように扱った。この場面を美しい兄妹愛として捉える見方と同時に、マギーが自分自身を中世の「魔女裁判」での行いを源とする「水の中の魔女」とする判断基準を用いて、溺れるかどうかで、自分が魔女であるか否かを試した、悪質な行為であるとする見方も出来る場面である。この場面を上記の引用にあるように、「水の中にいる女は魔女」だという考えを、マギーが年少の頃から持っていたという設定になっていることの証としても挙げられよう。彼女は「水の中の魔女」として、洪水で氾濫している河という「水」の中でトムにしがみつ়くことによって、自分が魔女であるか否かを試す他に、トムが助かれば、それは神様がトムの考えを認めるのかどうかをも計った可能性があるとも考えられる。トムが純粹に自分や家族のことを心配し、より良い人生をおくらせたいからこそ、マギーの男性との付き合い方にもうるさく口を出すのだということは、感情面では理解できても、理論上というか、頭では激しく反発している。こうしたトムの考え方は、トム個人が悪いとも一概に言い切れず、当時の家父長制度の考え方に照らせば、至極当たり前で、むしろ正しいとされていた。例え自分が溺れて死んだとしても、魔女でない証を立てられるだけで、命を捨てるだけ無駄なことだとの考え方も見られる。つまり、マギー

は自分が魔女でないことの証を立てるために、兄を道連れにして、その兄が死んだとしても、天国に行き、神様がマギーがしたことへの埋め合わせをしてくれるかもしれないと考えている。この点に於いては、マギーの考え方は非常に女性である彼女にのみ都合の良い解釈で、男女同権（または、平等）を唱えた初期フェミニズムの理念から外れてはいないだろうか。⁽¹⁶⁾

その反対に、マギーが自ら、自分が魔女であることを証明しようとしたという解釈も成り立ち得る。それは、引用文中で、彼女自ら「水の中にいる女は魔女なのよ」と発言している点が、その根拠の一つに挙げられる。マギーはトムが溺れかけているフロス河（水）の中に入ることで、水の中にいる女を実際に演じて見せる描写の手法をエリオットがとっていることが第2のポイントとも思われる。このように「水の中の魔女」という考え方が19世紀当時にもその名残を留めていた。こうした立場で以って、マギーによるその持っている考え方において家父長制度の象徴的存在である兄、トムを溺死させることによって、家父長制度を打破しようとした彼女の試みであったと受け取れる場面ではないか。

トムを家父長制度の考え方を象徴する人物と見なし、家父長制度を打ち壊そうとする。次のように、彼に激しく喰って掛かった場面は、ただ家父長制度の打破に止まらない。マギーが自分は「兄さんとの約束を守ってきました。意地悪く軽蔑なざるものじゃないわ。」(410)と抗議する部分で彼女は、当時の福音主義的考え方（当時の聖書解釈方）に基づき、且つ社会の根幹ともいべき家父長制度を、「兄、トムとの約束」として守ってきたと主張している。それでいて、トムの判断は、彼女が「まだしたこともない過ちを咎めだてて、意地悪く軽蔑」するものだとして批判する。この様なマギーの態度は、当時、家族の、それも女性が家長に対してとる態度としては異例であったはずである。故に彼女の姿勢は、キリスト教の「神」の概念に基づいて作られた家父長制度への反発であるとしか、トムには理解できていない。エリオットの場合は、どちらかと言うと、一見、フェミニズムに反するようなことを言ったりして、むしろアンチフェミニスト的であるために、他の批評家も因習的だという人が多い中、たとえばマギーにさえも、女性の自己主張をしっかりとさせているという点などから、イーグルトンはそのような女性の自己表現の萌芽をすでにエリオットの中に見出していた、というように評価してみるとかが出来そうであると、まったく言えなくもないかもしれない。

しかし、マギーはキリスト教の「神」の概念そのものを否定しているのではない。彼女は理想主義と福音主義を調和させようとしていると解釈するならば、男女同権を目指す、

初期フェミニズム的思考は理想の女性の生きる環境でもある。だからこそ、当時の福音主義に基づく制度であり且つ聖オグの町社会の根幹ともいべき家父長制度に従うことを、マギーは「兄トムとの約束」を守ってきた、即ち神の御言葉と思って実践してきたのだと主張している。女性が意見を言う（主張する）こと自体が、当時あり得ないことである。マギーはどこまでも神の言葉通りに行動するのが福音主義だと考えているからこそ、家長であるトムの言葉も神の言葉のつもりで、厳しく自らを縛ってきたのだと主張しているのである。彼女は、どこまでも相手の人（ここではトムのことを指している。より厳密に言えば「トムの考え方」）に寄り添ってあげる「隣人愛」の理念に忠実に従い実践していることをトムに理解してほしいが為に、主張した。しかし、女性が主張すること、その行為自体が、幾ら当時、既に形骸化し因習的になっていたとは言え、聖オグの町に住む女性の取る態度ではないと、周りからは見なされる。マギーとしては、女性である自分にとって、理想的な状況の実現と、お釈迦様の言葉を収めた仏典を崇めることと同様に、神の言葉である聖書に忠実であろうとすることとの融合を目指す故に、トムの言葉に対し、反発とまではいかずとも、自分の取った態度への弁明の意味で発言したというのが、本当のところではなかったか。どちらにせよ、女性であるマギーが意見を述べることそのものが、周りから（仏様の言葉と同じくらい大切な）神の言葉を否定したとも受け取られかねない状況であるとも読み取れる場面である。

マギーがトムへ意見した事象を悪い意味に解釈すれば、これぞ正に社会転換目的の行動であり、過激ともいえる、初期フェミニストとしての性格（反抗的である点等）をマギーが備えていることをエリオットが描こうとしていたのではないかと考えられる。故にマギーは、水の中で溺れないことで魔女でないと自分を証明しようとするという、一方の解釈とは異なって、逆に自分が魔女であることを証明しようとしている場面であるとも考えられる。

更に言えばこの場面は、旧約聖書の『ユーディット記』という物語を思い起こさせる。ユーディットは寡婦でありながら、多くの財産を持ちながら「神」に対する強い信仰を持っていたことにより、人々の尊敬を集めていたが、街の民を守るためにアッシリア王ネブカドネツアルが征服のために派遣した司令官・ホロフェルネスを四日にも亘る酒宴の末に、機会を得てその首を切り落とすのである。その主人公ユーディットに『フロス河の水車場』の女性主人公であるマギーを重ね合わせて検証することも可能になってくる。

また、聖書の別の側面から検証するとするならば、ヤエルや『新約聖書』のサロメをも

連想させる側面を、このマギーという登場人物はその性格面、小説内での行動面において、持ち合わせていることも今後、具体的に検証していく上での課題としたい。

「寛大さ」を持つことによって、19世紀までの女性たちは家父長制度の下の窮屈さや不自由さ（彼女たちにとって「悪」と映る状況）を現実的に個々人の内面において解決してきた様子が推察出来ると見る。所謂エリオットの主要な思想である「寛容の精神」を表す「人」、「優しさ」や「笑み」といった言葉で表されているところの「福音主義」精神という名の「知恵」でもって家父長制度の下の窮屈さ、不自由さを打ち破ろうとしたのではないか。この一節は、そのように読者に思わせる所がある。こうしたエリオットの描写に見られる言葉の使い方などを通じて、普遍の法則とか、物事の本質を常に追い求める姿勢を採っていた作者の小説内に於ける実験的試みを評して、イーグルトンは「初期フェミニズム」の概念が見られるとしたのではないかと推測される。

II.5.3.3. 具体的検証③

マギーに代表されるフェミニスト的立場の女性から観られるとき、フロス河で兄妹が溺死する場面を「悲劇」と位置づける場合、トムにとっての「悪」とは何か、ということについて定義しなければならない。彼にとっての「優れた美德」(361)と考える中味が「暗闇みたいなもの」(361)とマギーには映っていることが、彼女自身の口から明かされる場面がある。即ち、トムの「優れた美德」が「暗闇」であり「悪」なのである。⁽¹⁵⁾そこで、マギーが自分に隠れてフィリップと逢う瀬を重ねていた、という過ちをトムが責める場面で、トムの叱責に対するマギーの反論の仕方を分析してみたい。

確かに私 [マギー] は間違っていました。——時々、いいえ、絶えず。でも私が時々間違ったことをして来たのは、もし、兄さん [トム] にもそれがあつたら、兄さんはもっと良い人になっていらしたような感情が、私にあつたからですわ。もし、兄さんでも時には過ちをなさるようなことがあれば——もし、大変間違ったことをなさったとしたら、その為に兄さんがつらい思いをなさることを、私はお気の毒に思うでしょう。兄さんに罰が当たればよいなどとは願わないでしょう。でも兄さんはいつも私を罰して喜んでいらしたわ——いつでも私に厳しく、酷くなさったわ。私が子供の頃で

さえ、そして私が世界中の誰よりも兄さんを愛していた時でさえ、兄さんは私が泣きなき寝床に入っても、放って於いて許そうとはなさらなかったわ。兄さんは情け知らずです。ご自分の不完全なことも、ご自分に罪のあることも、お感じにならないのです。厳しくすることは1つの罪です。人間らしくないことです——キリスト教徒らしくないことです。兄さんはパリサイの徒にすぎません。兄さんはご自分の美德にだけ、神に感謝しているのです。それは兄さんにとって他のあらゆるものに優る程大したものだと考えていらっしゃる。兄さんはあの貴重な感情の幻影さえも持っていらっしゃらない。それに比べたら、兄さんのその優れた美德など、たかが暗闇みたいなものですわ。(360-1) ([]内、筆者)

マギーが言っているところの、「美德」が「悪」であるという論理の出拠は、作者エリオットの生い立ちから来る考え方の反映されたものではないか。それは、作者エリオットの少女時代にその根拠が観られる。彼女は「馬の鬣のような髪型」のため、周囲から忌み嫌われて遠ざけられてきた。本が唯一の友達だった。しかしそんな不遇とも呼べる時代のことを彼女は著詩の中で「私のすべての善の種子」⁽¹⁷⁾とまで言い切っているからである。故に、トム的美徳が女性たちにとっての「悪」であるという理論が、エリオットの少女時代の経験をひっくり返したそのままの論理だということが示されているものとする。この論理で以って、エリオットは当時の彼女の住む社会に存在した、彼女にとっての「悪(好ましからざる状況)」を解決していった。そしてマギーにもフェミニズム思想を加えた同じ論理で、フィリップとの純粋な「愛」を貫いただけなのに、駆け落ちを「悪」とする社会の代表、トムの責めを「解決」させている、とも解釈出来る。

II.5.3.4. 具体的検証④

第6部第3章で、マギーと精神的に距離を置こうとするフィリップの言動に対し不安がる彼女の様子を見て、ルーシーが、マギーとフィリップが二人きりでボートに乗れるよう計画を立てる。ルーシーは自分で買い物に行きたいと思っていた町に、父親が偶々用事で出掛けるのに便乗すれば、マギーとフィリップが二人きりでボートに乗れるだろうとの、

軽い思いつきだった。そして計画の当日、フィリップを待っていたマギーだったが、丁度そこへ、家人のいないことを聞きつけたスティーヴンがやって来て、強引にマギーをボート遊びに誘い出す。物語のこの時点で、ルーシーの婚約者然⁽¹⁷⁾と周囲に思われていた筈のスティーヴンが、簡単に引き返せない程の所に来てしまった時、ボートの上でマギーに愛を囁く。この時のスティーヴンの言葉から彼女が思い描いた事に対してエリオットが解説している場面を見てみる。

あわれにも、マギーにとっては、それ[スティーヴンによるマギーの心の中にある若い情熱の琴線を初めて搔きならした囁き声]は極めて身近なもの、渴いた唇に突き付けられた天来の美酒にも等しかった。それが叶えられれば、困難もなく、冷ややかさも無い生活——愛情が自己犠牲を必要とするともなくなる生活が、地上の人間に開かれるのだ、開かれるに違いないのだ。スティーヴンの情熱に溢れた言葉はそうした生活の幻を、これまでであったよりも更にありありと描いてみせた。(489) ([]内、筆者)

エリオットが解説しているこの上記の箇所が、マギーの内に抑制してきた「初期フェミニズム」的考え方が頭をもたげてきた場面であると言える。何故ならば、「愛情が自己犠牲を必要とするともなくなる」という部分に、女性の側だけが一方的に男性に服従を強いられている、というマギーの認識が表れているとも見なすことができるからである。故にマギーは、女性の側だけが一方的に男性に愛情を注ぐことを求められている現状を不平等であると感じている。上記の引用が男女の愛情面の関係についての意識を説明している記述箇所であり、男女は対等な関係が望ましいと考えていた、当時の「初期フェミニズム」の考え方も見られる。既に婚約者然とした女性がいるスティーヴンから、彼のその時点での、自分(マギー)のことが本当に好きだという思いに素直に行動され、告白されている場面が上記の引用箇所である。マギーにとって、男女間の交際に纏わる形式化していると感じている倫理的基準に縛られないで、お互いが対等の立場で互いの意思を打ち明け、打ち明けられた方も、自らの気持ち(意思)で選択する。そのような男女間の交際に於ける、理想的な姿(関係)をマギーはスティーヴンの言葉に思い描いたのかもしれない。そして自分の意思次第で、男女間に於ける相手を選ぶ権利、または自由を獲得できるかもしれないという誘惑を、マギーはとても魅力的に感じていることが「美酒」や「地上の人間に開かれる」

と表現されていることから判る。言い換えれば、マギーが家長であるトムと同等の権利を一つでも獲得出来るなどということが、彼女の死後の「天国」か「神の国」でないと叶わないとしか思えないくらい、実現困難な望みだという当時の女性達の置かれた状況を反映していると言うことが出来よう。どれだけマギーのような、女性の家族内や社会での地位に問題意識を持つ女性にとって、女性が自分の意思で何かを選択したり、決定できたりする機会に飢えていたか、また、如何に、そういった時を待ち望んでいたかという心情が、エリオットの記述によって「唇の渴き」に喩えられている箇所であると言えよう。

註

- (1) 「朝日新 village good」、朝日新聞社編『フェミニズム』（朝日新聞、2011）, p. 1、上野千鶴子、小倉千加子共著『ザ・フェミニズム』（筑摩書房、2002年）, pp. 123-8. イギリスの思想家であり、批評家のテリー・イーグルトン（1992）は、ジョージ・エリオットには‘Incipient feminism’の考え方が見られると指摘した。よって、この節の題に彼の使用した表現を和訳して「初期フェミニズム」とした。
- (2) ピーター・ミルワールド、別宮貞徳訳『キリスト教と英文学』（中央出版社、1969年）。
- (3) *Ibid.*, p. 58. 引用の前頁で「ミルワールドは」となっていて、引用の冒頭で「ミルワールドが」となっているのは、引用が、訳者別宮氏の解説文であり、引用の前頁部分が、論文筆者による説明の形を採っている為。
- (4) *Ibid.*, p. 59.
- (5) *Ibid.*, pp. 60-1. ミルワールドによると、こうした考え方は17、8世紀のピューリタンの文学に強調されているところの「摂理への信仰」であり、ピューリタンは「その良心のために多くの苦しみに堪えなければならなかった」としている。
- (6) ジョージ・エリオットは『ミドルマーチ』の「序文」を詩人ワーズワースに依頼した。彼は「序文」の中で、「創造主が女性というものを、数字で3以上は数えることが出来ない[人間である]と明確に規定してくれていたなら、今日までの女性達の多くは[しなくていい]苦勞をしなくて済んだかもしれない」と、述べている。(iii) ([]内、筆者) 又、聖書で「神」にあたる主語の位置に‘He’という「男性」を指す代名詞を使っていること等から。

- (7)R・アイスラー、浅野敏夫訳『聖なる快樂性、神話、身体の政治』（法政大学出版局、1998年）, pp. 985-990.
- (8) Cooper, Lettice. *GEORGE ELIOT* (研究社出版、1956年) , pp. 10-11.
- (9)「垢」という字は「あか」とも読まれる。「こり」、『広辞苑』第7版（岩波書店、2011年） p. 538、「垢」、『字源』第3版（岩波書店、1967年） p. 2356.
- (10)木村靖二、佐藤次高、岸本美緒『詳説世界史 B』（山川出版社、2013年）, pp. 210-2.
- (11)のさかれいこ『「私らしい」 幸せが必ず見つかる笑顔の魔法』（青春出版社、2011年）, pp. 153-185.
- (12)トムが旧来の価値観（福音主義）、体制（家父長制度）を代表する登場人物であり、マギーがトム・タリヴァーにとって水の中の「魔女」であるという視点に立った、論文筆者による論証の項。日本でもこれと同時期の江戸時代最晩年期、岡山県吉備地方、当時「大谷村」と呼ばれていた地域で人助けに従事していた元農業、赤沢文治（あかざわぶんじ）の言葉として伝承されている。これらの記録曰く、「人の悪口を言うものがあつたらなるだけ（その場合は）逃げよ。陰で人を助けよ」と記されていたという（伝聞）。
- (13)上野千鶴子、小倉千加子共著『ザ・フェミニズム』（筑摩書房、2002年） pp. 384-5、フリードリッヒ・エンゲルス、土屋保男訳『家族、私有財産、国家の起源』（新日本出版社、1999年） pp. 138-155、パメラ・ホーン、子安雅博訳『ヴィクトリアン・サーヴァント——階下の世界——』（英宝社、2005）, p. 245.
- (14)小説の技法として‘reflector’と呼ばれている。木下善貞『英国小説の「語り」の構造』（開文社、1999年）, p. 9.
- (15)西欧では、歴史的に「夜は悪いもの」との観念が定着してきた。ヘンゼルとグレーテルが森で道に迷うのも、昼間であっても太陽の光が地上まで届かない「暗闇」に近い状況。「暗い森」には「悪魔」がいたり、魔女が出てきたりして、「暗闇」即ち「悪」という印象が固定化している面が見られる。
- (16)この場面に限って言えば、マギーは利己的ロマン主義的自己目的達成の考え方を持った登場人物ではないか、とも考えられる所である。
- (17)Cooper, p. 51.
- (18)婚約者同然という意。スティーヴンとの関わりの中で、マギーの中に観られる「初期フェミニズム」的考え方について、論文筆者が分析している箇所。

Ⅱ. 6. プチ・ブルジョア・モラリズム

Ⅱ.6.1. 「プチ・ブルジョア」階級とは

「プチ・ブルジョア」という言葉について、改めて要約するとした場合、先ず「プチ」とは規模が小さい、という意味を有している。この接頭語が「階級」を表す語についた時には、「その階級ほどの規模ではないが、似た性質を有する」という様にも解釈し直すことが出来よう。又、規模について複数の意味が存在し得るが、この節では「性質面での」規模即ちその階級に属する人達の大多数に共通する「(人間としての) 器」の意味を採ることとする。

従って、「プチ・ブルジョア (petty[petit]-bourgeois)」階級は、ブルジョア階級とプロレタリア階級の間中に存在し、中間的あるいはブルジョア的意識を有した階層である。「プチブル」と略称し、中産階級、中間層、小市民層とも呼ばれる⁽¹⁾ ことがある階級のことである、と表現することが出来る。

Ⅱ.6.2. プチ・ブルジョアの倫理観から派生したとみなされる行動と思考様式

上記の過程を踏まえた上で、テリー・イーグルトン (1992) が称しているプチ・ブルジョアモラリズム (以下「プチ・ブル的倫理観」と表記する) とは、プチ・ブルジョア階級が持つ倫理観のことを指しているものと定義づけられる。

つまり『フロス河の水車場』の登場人物の中で、ブルジョア (資本) 階級程の伝統や資産も持たないのに、ブルジョア (資本) 階級並みの意識を持つ様な人々である。言い換えれば、ブルジョア (資本) 階級の間からすれば、自分達より階級が低いのに自分達と同じ意識を持つ人達の道徳観を有する登場人物を探せば良い、ということになる。

これまでの「プチブル倫理観」についての定義条件に基づいて、以下作中の数ヶ所に当て嵌まる、2人の代表的人物について、分析を進めていく。

II.6.3.1. 具体的検証①——ディーン氏の場合

『フロス河の水車場』の登場人物の中で、ブルジョア（資本）階級程の伝統や資産も持たないのに、ブルジョア（資本）階級並みの意識を持つ様な、ブルジョア（資本）階級の人間からすれば、自分達より階級が低いのに自分達と同じ意識を持つ人達の道德観を有する登場人物、ということで、先ず、ディーン氏を挙げる。

ディーン氏は生まれつきタリヴァー家の家長になれない為か性格故にか、タリヴァー氏が水車小屋を相続したことを妬んでいる。タリヴァー氏が水車を廻して、その付近の土地の農民が育てた小麦を挽いて粉にしてやり、彼らが外へ売れるようにしてやっているのだが、そのこと自体が面白くない。自分がタリヴァー氏の立場に取って代わりたい願望を包み隠すかのように、自分の気持ちとは正反対のことを、言っているかに受け取れる場面がある。ディーン氏は、「鳩肉入りのパイ」（437）を食べ終わると、次のように言う。

農業というものは相当なものだということがお分かりになりますよ——金のかかる道楽で。わし[ディーン氏]にはついぞ今まで道楽というものがありませんでしてな。ま、あってもそういうことに嵌ることはありますまい。それに道楽の中でも殊にいけないのは、儲け仕事と思ってやる道楽ですな。そうするとまるで袋から小麦をあけるように、どうっと金を注ぎこみますから。（437）（[]内、筆者）

ディーン氏は農業を「金のかかる道楽」と見ている。このことは、産業や仕事を、実際に行った場合、使った労力に対してどのくらい利益が出るかどうかで判断する、ものの見方が登場してきたことを指している。ディーン氏の農業についての「金のかかる道楽」という発話が、農業が代々家長が受け継ぐ「家業」ではなく、「産業」として見られるようになった19世紀後半には、事業家達が農業を事業として（十分な利益が見込める産業として）見なさなくなっていることを示している。

実業家達が農業で十分な利益が出なくなっているのを見て、タリヴァー氏が水車を廻してタリヴァー家の生計を立てられていると自負している。それは、水車小屋でタリヴァー氏が「袋から小麦をあける」こと程度の、農業で作物を育てる労力に比べたら圧倒的に少ない労力であるのに、生計を立てるのに十分な収入が入ってくるからには、きっと「ぼろ儲け」になっているからに違いないとディーン氏は見なしている。ディーン氏は、

タリヴァー氏の水車による粉挽きの仕事を「道楽だ」と言っているのである。彼は水車を廻し小麦を挽いて粉にしてやって手間賃を得ている「家業」を、タリヴァー氏が「儲け仕事」だという意識でやっていると思っている。タリヴァー氏は、水車を廻して小麦を挽いて粉にしてやって、水車小屋付近の土地の農民たちが外に売れるようにしてやっているのに、ディーンは十分な利益が出なくなっているから、「家業の業という道楽だ」、と言っているのである。このディーン氏の言い回しぶりだけでなく、道楽を「袋から小麦をあけるように」の例えを用いて表現している。このことから、小麦を挽いて粉にすることが農業の生産過程の一環と見なされているのに、ディーンはただただ、十分な利益が出ないという理由だけで、タリヴァー氏の行っている「家業」を「道楽だ」と見なしているのである。

この様にディーン氏は、金銭的価値観を重視して、従来あった階層社会の中で、事業で上げた利益を背景に成り上がってきた新しい階層の人間が持つ感覚を代表している登場人物として描かれている。タリヴァー家の傍系であるので、ディーン氏には（ジェントリーという）ブルジョア階級であるタリヴァー氏ほどの地所と呼ばれる土地財産等はない。しかし、周りに対してちょっとした金銭的優越感を抱いている程度の低い意識で、ディーン氏が上から目線でタリヴァー氏を見下ろす見方が、正に「プチ・ブル」的である、と言える。

II.6.3.2. 具体的検証②——ウェイケムの場合

『フロス河の水車場』の登場人物の中で、ブルジョア（資本）階級程の伝統や資産も持たないのに、ブルジョア（資本）階級並みの意識を持つ様な、ブルジョア（資本）階級の人間からすれば、自分達より階級が低いのに自分達と同じ意識を持つ人達の道徳観を有する登場人物の第2番目ということになると、それはウェイケムであろう。

この登場人物の分析に当たって、彼は所属階級の倫理観にふさわしからぬ行動と思考様式の持ち主であるという点で、「プチ・ブル倫理観」というものを明らかにする役目を負った登場人物と見なすことが出来るのかもしれない。

ウェイケムが「プチ・ブル倫理観」というものを明らかにするイベントとして挙げられるのが、裁判に勝ったウェイケムが、タリヴァー氏の親類であるグレッグ氏とディーン氏を通じて、タリヴァーの仕事口の紹介を申し出る、第三部第8章の場面である。この場面は以下のように描かれている。

水車場と土地は二つながらウェイケムの手に残ったのであった。そしてウェイケムは家屋敷を見回ってから、ディーンとグレッグに(略)タリヴァー氏が恢復した暁には、こちら[ウェイケム]はすすんでこの仕事[水車小屋]の支配人に雇いたいと腹藏なく意見を述べたのである。・・・日頃から喧嘩好きで、訴訟をしてまでも喧嘩好きを示そうという念のいった彼[タリヴァー氏]のやり方にこそ憤りと憎悪を向けるのが正しいのに、ウェイケムにそれをなすり付けるとは。この事件[水車小屋と土地がウェイケムの所有になったこと]についてウェイケムが示した感情は正当なものだと[ディーン氏とグレッグ氏は]考えた。トムは、この申し出を受けるのに反対であった。トムは父親にウェイケムの下になってももらいたくなかった。(268) ([]内、筆者)

「父親にウェイケムの下になってももらいたく」ないトムはこれをウェイケムによる偽善行為だと見抜き反対したい。しかし、タリヴァー氏の人となりだけを単に短気で堪え性のない男としか見なしていない親類のグレッグ氏とディーン氏の2人は、水車小屋と土地が、ウェイケムの所有になった後、タリヴァー氏に元の水車小屋で働ける支配人の仕事を斡旋するという「ウェイケムが示した感情は正当なものだ」というように考えるようである。

混沌として価値観が多様化しつつあり、まさに何を信じて良いか分からなくなりつつあった19世紀半ばから後半にかけてのイギリスを象徴するかのよう、ウェイケムは土地を媒介とした封建社会の秩序が徐々に崩壊しつつある情勢に乗った。

ウェイケムはタリヴァー氏から訴訟を起こされる。タリヴァー氏が、従来の考え方に基づいた倫理観に依った伝統的物事の処理方法を法律にも反映して欲しいと願ったから裁判に訴えたのに、教養を身に付けられなかったタリヴァー氏が、そのことに負目を感じて焦るのを、ウェイケムは逆手にとった。法律の知識や裁判で物事を決める慣習の無いタリヴァー氏が、法律の知識もあり、裁判を幾つも経験している弁護士ウェイケムの考え方(倫理観)に無理して合わせた。ウェイケムは自分の得意とする分野(法律の知識、裁判をすること)に、うかうかと乗ってきたタリヴァー氏を嘲笑い、それまであった信義を重んじた解決法でなく、利益を優先し、ウェイケムが弁護士という職業柄、知識のある法律の名の下に勝ち負けを明確にする裁判制度を利用して水車小屋の所有権を奪ってしまう。

ウェイケムは自分が水車小屋や地所を持つタリヴァー氏(ジェントリー層というブルジョア階級)以上に知識があることを根拠に、ブルジョア階級としての価値観、倫理観を備えていると思い込み、自分の利益になるように、タリヴァー氏を裁判で負かして彼を没落

させて、彼より社会的地位に於いて、上に立とうといるのである、と言える。なぜならば、ウェイケムは形上、裁判という解決を目指したのであれば、直接、タリヴァー氏を見舞った上で、彼の仕事口を斡旋する申し出をすることをしたであろう。それなのにウェイケムは、タリヴァー氏を直接見舞うことをせずに、彼の仕事口を斡旋する申し出を、タリヴァー氏の無教養を冷淡に扱っているグレッグ氏、水車小屋を手に入れたいと狙っているディーン氏の2人に代わりに言わせている。彼らの妻はタリヴァー氏の妻の姉であるので、どうしても彼らは、タリヴァー氏に対し、上から物を言う姿勢になる。水車小屋の主として、また、タリヴァー家当主としての知的水準等の点でも、彼らに対抗意識のあるタリヴァー氏が素直に聞ける相手ではない。故にウェイケムによる第三部第8章におけるタリヴァー氏への仕事口斡旋の申し出は、プチ・ブル的ではあるが、偽善の様相を帯びている、と言えよう。

ウェイケムのタリヴァー氏への仕事斡旋の申し出が偽善であることを示した箇所が第四部第9章に見られる。以下の引用箇所はタリヴァー氏の発話ながら、その時の様子にウェイケムのプチブル倫理観が顕著に物語られているので、例として挙げる。

だが、わしはあいつを許しはしないぞ。世間の言いぐさは分かっとる——向こうは決して儂をひどい目にあわせるつもりじゃなかった、とな——それが悪魔が悪人腹の肩を持つ、手、なんだ。それでもあいつは立派な紳士だと——そうだとも、そうだとも。わしは、訴訟など、起こすんじゃなかった、と世間は言う。しかし、仲裁するものもなく、正義を勝ち取ることも、出来ないように、誰がしたんだ？あいつは法律なんかには捕まらないほどの大悪党だ。エドワード・タリヴァーは彼を破産させる糸をあやつった男、ジョン・ウェイケムに雇われた。

(280-1)

上記の引用の中で、タリヴァー氏の発話であるのに、自分のことをフルネームで「彼」と呼んでいるのは、トムに筆記させるために自らを三人称にしているからである。

そして「あいつ」、「向こう」と呼んでいるウェイケムを「許しはしないぞ」と、彼への怒りを口にされ、続けて「悪魔が悪人の肩を持つ」とタリヴァー氏により述べられていることから、上記の場面で、ウェイケムは「悪人」だ、と言われている。タリヴァー氏の「悪魔が悪人の肩を持つ」という言い回しが、「決して」タリヴァー氏を「ひどい目にあわせるつもりじゃなかった」と、世間に思わせるような悪知恵を働かせた「手」を、ウェイケムは裁判で使ったということを示している。その「手」を使った

ウェイケムのことが「悪人腹」という言葉で表され、タリヴァー氏を「破産させる糸を操った男」と非難されている。ウェイケムが「法律なんかには捕まらないほどの大悪党」だということが、ウェイケムの意識である、プチブル倫理観がタリヴァー氏の持つ旧来の倫理意識では、どうにも出来ない状態であることを示している。

よって、プチブル倫理観の持ち主である、ウェイケムの申し出故に、タリヴァー氏への仕事斡旋の申し出が偽善だとタリヴァー氏に受け取られてしまうのである。

ウェイケムは弁護士という設定だが、本当に頭が良いのならば、そこまでムキになってタリヴァー氏のような文字も満足に書けない男を破滅させる正当な理由が見当たらない。小説ではタリヴァーの水車小屋を手に入れたいが為の画策となっているが、今一つしっくり来ないのは何故か。弁護士という職業は土地を持たない職業として台頭し始めたところである。当時は、土地財産を持つブルジョア階級の方が階級が上位であると見なされていた。よってタリヴァー氏はウェイケムから見れば、旧価値観、自分から見て上位階級側の代表と映っていたのではなかったのか。しかも圧倒的に手の届かない階級の人間ではなく、落ち目になった人間であり、知識に於いては自分の方が上だという優越感があるのである。

彼[タリヴァー氏]は自分のまことに望ましい世襲享有不動産が2千ポンドの抵当に入っている ことなど、実際忘れてしまったであろう。これは悉く彼ひとりの手落ちという訳ではなかった。・・・それに自分[タリヴァー氏]を相手取って訴訟を起こしたがる隣人を持っていれば、抵当の決済などは出来そうもない。ことに羊皮紙の借用書では代表しえないような高尚な担保——つまり信用だけで百ポンドも借りたがる知人から悪くおもわれまいとすれば、尚更である。わが親愛なるタリヴァー氏には善良な素質がある。(83) ([]内、筆者)

上記引用箇所「世襲享有不動産」と表現されているように、タリヴァー氏は水車小屋の建っている面積の土地を所有しているが、先祖代々受け継いできた。彼は土地と水車で近隣の農家が栽培した小麦を曳いて粉にしてやる中間業種を生業とすることで生計を立て、近隣の住民より少し社会的地位を高くして貰ってきた経緯が読み取れる。その土地をウェイケムが「二千ポンドの抵当」が設定されているのを理由に、法律の知識とタリヴァー氏への親類の妬みを利用して手に入れようとしているのである。そして、今回の「世襲享有財産」の所有権を巡る場面では、「プチブル倫理観」の持ち主に対して、農村共同体的考え

方の人物の主張が受け入れられなくなったという状況の変化が示されている。エリオットはこの場面で、単純にウェイケムとタリヴァー氏との個人レベルでの考え方の相違を描いていないのである。ウェイケムとタリヴァー氏との対立が、「プチブル倫理観」を持つ人々と農村共同体的考え方を持つ人々との間の「集団」的又は階層間の意識（考え方）の隔たりの大きさを浮き彫りにしていると、言えよう。

よってこの場面では、タリヴァー氏、ウェイケムという二人の登場人物の描写によって、農村共同体的考え方とプチブル的意識との相容れ無さから来る悲慘な結果を、エリオットが描こうとしているのではないか。何故ならば、この引用箇所（第一部第8章）より後の第三部第8章で、ウェイケムはディーン氏やグレッグ氏に「この事件についてウェイケムが示した感情は正当なものだ」(268)という理由で自分を「信用」させている。その上で、彼はタリヴァー氏の水車小屋と土地を取り上げ、代わりに取り上げた水車小屋の支配人にタリヴァー氏を雇おうと画策している。こういったこと等が述べられていることから、農村共同体的考え方とプチブル的意識との相容れ無さの齟齬、悲慘さというものが良く分かる。

エリオットが、ウェイケムを弁護士というプチ・ブルジョア階級として、台頭させてきていながら、彼のタリヴァー氏の土地財産を取り上げる際に、タリヴァー氏の親類（ディーン氏、グレッグ氏）を信用させて説得させるという手法を使ったということは、血縁血縁を大事にする農村共同体という旧来の価値観を持っていることを意味している。エリオットが、こうした時代の過渡期の状況にありがちな倫理観、価値観が抱えている矛盾点を描くことで、ウェイケムのプチブル倫理観をより際立たせていると言える。

このように見てくると、タリヴァー氏は親から受け継ぐよう言われたものを、彼の持つ能力を発揮して必死に守ろうとしたに過ぎず、ウェイケムには従来の秩序を壊そうとした側面があったと思われる。

当時の産業革命、金で物の価値を判断するようになってきた社会状況の変化、土地に関わらずして収入を得るようになる新しいプチ・ブルジョア階級の出現を考慮すれば、ウェイケムはタリヴァー氏にとって「社会悪」の権化である。ウェイケムらの企みに対して、タリヴァー氏らは、引続き水車場の所有主としてあり続ける為、負けた裁判の費用を賄うため、家中の家具を売り払わないといけない状況になっていく。だからといって、事態が好転する訳ではなかった。ウェイケムは、タリヴァー達にお金がなければ先祖代々固有の財産の所有も安泰でなくなることを実感させるのである。水車小屋の所有権を巡るウェイケムとタリヴァー氏との争いの事例を使って、エリオットが、タリヴァー氏程家系が続い

てる訳でもなく、水車小屋のような資産も無いが、タリヴァー氏以上に優越感を持っている、といったウェイケムの持つ「プチブル倫理観」の特徴を説いているものと思われる。そして又、エリオットがウェイケムらの水車小屋の所有権奪取の企みに対して、従来からの聖オッグの町の倫理観を持つタリヴァー氏らの、この様に法や裁判に訴えるといった対応が、「プチブル倫理観」への対抗策としての失敗例であることを披露してくれていることにもなっている。そしてウェイケムらの意識、所謂「プチ・ブル倫理観」という新しい階層意識や倫理観が、タリヴァー氏らジェントリー層の属する支配階級からしてみれば、従来からの倫理観が支配する、聖オッグの町社会に対しての「社会悪」にしか見えないという特徴を持っていることを示している、と言える。

註

- (1) 「プチブル」、『ブリタニカ国際百科事典』第15版、1988年、p. 787.

結論

1.始めに

テリー・イーグルトン (1992) は、ジョージ・エリオットの作品には19世紀後半(ヴィクトリア朝後期時代)の観念形態が見られると指摘⁽¹⁾した。その内の主な6つが、フォイエルバッハのヒューマニズム、ロマン主義的自己目的達成、福音主義、農村共同体、初期フェミニズム (Incipient feminism)⁽²⁾、プチ・ブルジョア・モラリズムである。この論文は小説『ミドルマーチ』、『フロス河の水車場』を上記の主要6つの倫理的観念という視点から分析、検証したものである。

人間として文化の進化を考える時、例えば『ミドルマーチ』では、福音主義のドロシアにも理想主義と結びついたロマン主義的自己目的達成の考え方がある。一方、同じロマン主義的自己目的達成の考え方であっても、利己主義と結びついた考え方のカソーボン、バルストロウド、ロザモンド等。その他、農村共同体で小作人を代表する考え方であるカドウォラダー夫妻、理想的な農村共同体には好ましくない教区長やブルック氏。彼らの利己的方針に唯々諾々と従い、疑問を持たない点以外は、誠実で相手に敬意を示せるガス。

このように『ミドルマーチ』、『フロス河の水車場』の両作品について、この論文で取り上げた登場人物には、共通して見られる点がある。それは彼らが銘々、「各々自身が満足のいく状態と幸福に対して関心を持つこと、又は尊重すること」⁽³⁾を大切にしているということが、分析の結果から言えるからである。

エリオットは、作者であるだけでなく、小説の中の「語り手」でもある。当論文に於いて検証の結果、彼女の考え方はどういう風に偏っていて、何に起因していたと言えるのか。そのことについて土井治氏は、翻訳著書『ジョージ・エリオット』の中でヘンリー・ジェイムズのエリオットに対する論評を紹介している。ジェイムズに依れば、「ジョージ・エリオットにとっては、小説というものは、『本来人生の写実ではなくて、道徳的意義を加えた寓話』⁽⁴⁾であったと言う。

もしエリオットが彼女自身の生き方の反省の上に立って書いているとすれば、ドロシアに自身の性格をトレースし、カソーボンに理想の男性像を見 (Middlemarch, 86)、その批

判に対する肯定がある筈である。「理想の男性」などというものは「幻想」(*Middlemarch*, 86)だと認めた上でそれでも尚、ドロシアは夫を理解しようとし、ロザモンドはリドゲイトが説得を諦めたので自分の主張が夫に理解されたのだと得意になる。彼女たちは、まるで自分達の選択が間違っていなかった事を証明しようとしているかのようだ。

エリオットはまず、序章でそうした彼女たち「女性」の努力をワーズワースの言葉を借り、「声なき声」⁽⁵⁾ に耳を傾け彼女たちへの「同情に源を發し」(86)、彼女たちの声を代弁しようとした。だからこそ、結果として彼女は、小説『ミドルマーチ』という大作を書き上げることが出来たのだと考えられる。

つまり、女性が自身の名前で小説はおろかパンフレットの1つも世間に発表し辛い、当時のイギリス社会でルイスとの夫婦生活を支えたのはこのエリオットと「あまたのテレサたち」(*Middlemarch*, 3)との間に芽生えたのと同じ、「期待」と「信頼」だと考えている。何故ならば、「手伝いもしないで本にばかりかじりついている」とか、「馬のたて髪のようにどうにも手のつけられない髪のためにしばしば嫌われた」子供の頃の事を詩の中で、「『私のすべての善の種子』[*Brother and Sister V*」]⁽⁶⁾だと、エリオット自身が言っているからである。周りから嫌われたにも拘らず15歳の時、母が亡くなるとエリオット(メアリ・アン)は「家や父や兄の面倒を見たり、貧しい人々を訪問したりと近所の慈善事業に働いたりした」という。対照的に姉の方は、長女でありながら、19世紀当時のイングランド地方の片田舎では、長女の立場から、して当然と見做されたことをしないで、結婚して家を出て行っている。しかし、エリオットには、そういうところ(自分の境遇、生来の特質)に対しての悩み事は何一つ出て来ない。それどころか「私のすべての善の種子」とまで述べている。すべてを受け容れ、良い方向に解釈する姿勢が現れている。このエリオットの姿勢、そのものが『ミドルマーチ』、『フロス河の水車場』の各場面に於ける「偏り」を生み出していると考えられる。

1.1. フォイエルバッハのヒューマニズムについて

フォイエルバッハのヒューマニズム(*Feuerbachian Humanism*)については、フォイエルバッハが独自の人間学に拠って、彼の考えるところの、本来在るべきキリスト教の姿というものに鑑みて、

宗教における人間疎外を暴露した理論的達成である。「神、信、善、美、聖」というものは人間が作ったもの、実在しないものとする考え方である。

テリー・イーグルトンが指摘するところでは、『ミドルマーチ』における作者、エリオットに見られるイデオロギー(又は観念形態)全体を統括するアイデア(idea)である。『ミドルマーチ』における代表者として、バルストロウドが挙げられる。一方『フロス河の水車場』に於ける代表者としては、ステイーヴン、マギーが挙げられる。このフォイエルバッハのヒューマニズムについての節では、「信、善、美、聖」というものは人間が作ったものとするのだが、実際には、そのようなものは存在しないのだとする考え方。「神の救い」すらも人間中心に考えられた「恩恵」のようなもので、自分に都合の良い時だけ、「神の救い」だとバルストロウドが見なす場面(第71章等)にもっとも顕著に見られる。

1.2. ロマン主義的自己目的達成について

この節に関して、『ミドルマーチ』における代表者として、社会からの評価に背を向けたままで、自分の研究だけの界に閉じこもるカソーボンや熱心な福音主義者の振りをして金の為に不正を働くバルストロウドと、社会との調和を目指すドロシア、ウィル・ラディスローの2派に分けて、描かれている。一方、『フロス河の水車場』に於ける代表者として、ステイーヴン、トム、マギーが挙げられる。よって、ロマン主義的自己目的達成(Romantic self-achievement)とは、古典主義・合理主義に反抗し感性・個性・自由を尊重し、個人が掲げる理想をあくまで追求し、その実現を目指す考えを指しているものと考えられる。

1.3. 福音主義について

この節では、マギーと、彼女が真の福音主義者として自己確立するに至る過程を支える人達(ステイーヴン、フィリップ、トム)を例に分析を展開した。分析の過程で『フロス河の水車場』では小説内の舞台とされた聖オッグの町の「福音主義」がどのような形で存在しているのか、についても明らかになった。そして、とりわけトムにはマギーに与える影響のうちに、家父長とプロテスタント主義の特徴が見られることが、指摘出来る。

物語の舞台である、聖オグの町の「福音主義」は、もはや形骸化し、因習化していた。例えば、婚約、付き合う（男女が口をきく）そして結婚という順序（形）の方が、何処までも相手に寄り添いたいという（自らの本心）より重んじられている点に、形骸化し、因習化していたことを端的に示す特徴がある。

厳密に言えば、「個人」の「救いのための縛り＋自己否定」がマギー、フィリップ以外の『フロス河の水車場』の登場人物に当てはまるとは言い難いと思われる。スティーヴンとトムは、形骸化し、因習化していた聖オグの町の「道徳」に、宗教的雰囲気があるというだけで、聖書に忠実で正しいことをしている気になっている。そして、聖オグの町の「福音主義」が、既に形骸化し、因習化していることに気付いていない。その反対で、フィリップは、そのことに気付いている。と同時に彼は真の福音主義を理解していると見られ、マギーが真の福音主義を理想主義との調和を目指して追求する姿に、彼女の悲劇的結末（死）を予感する。マギー、フィリップは、自分が如何に精神的に救われるかを考えると同時に、相手の立ちゆくように心を砕いている。そういう「調和」的な類の『救い』のために自分を「縛り」、「自己を否定」する。これに対し、スティーヴンは町の有力者の息子だから、本能のまま、好きに行動し、「縛り」、「自己を否定」だけでなく、因習化した聖オグの町の道徳さえ無視する。片や、盲目的に自分の考えを聖オグの町の道徳に合わせていけば、皆が救われ家長としての役目が果たせると考えている、そういう「救いのための縛り＋自己否定」がトムには見られる。故にトムの考えでは、人が人間であるためには、「聖書にある福音書の教義精神に則って、信仰による救い」、つまり福音が必要だと言うことになる。福音は神様が言われたとされ、イエス他預言者と呼ばれた「伝道師」により伝えられた聖書に書かれた言葉を守った者にのみ与えられる「好ましいもの(状態)」とされる。こうした幸運に恵まれることが、必然性を備えるには、人間が自己を確立する必要があるのではないだろうか。

何故なら福音主義が「救いを得る為に自己を縛り＋自己を否定すること」であるが為に、ある社会（世間）の一定範囲内に、その社会の構成員である個々人の言動が収まる。それが社会を構成する互いの信用に繋がって、その社会が安定する、という構図である。

例えば、キリストの御ことばとされている表現の中に『見ないで信ずることの出来る者は幸せである』⁽⁷⁾というのがある。これは絶対的に信ずることであり、物事の顛末を見てから受け容れるかどうかを判断することとは、真逆の考え方と言える。聖書の言葉の意味が完全に理解できなくても疑わず、キリストに倣う精神で、何処までも良い方向にのみ

解釈し、受け取るものである。こうしたマギーの精神はG・エリオットが唱えてきた「寛容の精神」といった内容に通じる。このことからエリオットの言う「寛容の精神」といった道徳的内容の拠り所の一つに、このキリストの御ことばが成りうると考えられる。決して彼女は根拠のない自信や洗脳に依って主張したのではないことが判る。あくまで救いの存することは疑いの無いとの確信の上に、様々な思想を判別していったことの証が、小説『フロス河の水車場』内では、マギーという登場人物が真の福音主義と理想主義との調和を目指していく思考様式の過程の上に反映されていると言える。

『フロス河の水車場』の登場人物、それぞれの段階（個人レベル、社会間のレベル差）はあるものの、因習的慣習に成り下がった形骸化した「縛り+自己否定」から成る道徳が人々の行動に支配的影響を与えているし、そうした因習的道徳に従うことで、人々は聖オッグの町に於ける社会的「信用」を得ているという構図が、証明されたと考える。無論、聖オッグの道徳が余りに因習的であるが為に、マギー、トム、妹の悲劇性が一層、読者の同情を引くという小説上の構図（又は効果）を演出している、と考えられる。

真の福音主義即ち、救い（「神」の許し無しに救いはない）という超自然的介在物を前提とした上での「縛り+自己否定」によって社会的信用を得ることが結果として「神」からも信用される人間になれるのだという考え方を、エリオットが小説『フロス河の水車場』で実験的に読者に投げかけていることを窺わせるに十分だと思わせられる。

但し、福音の現される処は、何も住むところとは限らない。姿・形がある生き物の内で救われる対象は「人間」のみであり、福音は人間のみが認知しうる、死後に受けられる「神からの恩寵である」と、狭義に捉える必要があるとも言えるのではないだろうか。

1.4. 農村共同体について

『ミドルマーチ』における代表者としては、ケイレブ・ガース、メアリー・ガース、フレッド・ヴィンシーが挙げられる。フレッドが著した本の題名を『緑野菜の栽培と家畜飼料の経済について』としたことから伺える。「かぶらやふだんそう」の栽培を語る時、それらを育てる土地(earth)について、触れない訳には、いかないからである。一方、『フロス河の水車場』に於ける代表者として、ウェイケム(氏)、タリヴァー氏、トムが挙げられる。

つまり、農村共同体(Rural organization)とは、農業及び農村組織を以て社会の基礎としようとする立場であり、エリオットは農業を中心とした社会を理想化した面があることが言えよう。

1.5. 初期フェミニズムについて

初期フェミニズム(Incipient feminism)は女性の社会的、政治的、経済的権利を男性と同等にし、女性の能力や役割の発展を目指す主張の初期的段階での考え。当時の女性に対する観方(みかた)や女性の価値のことを指している。

『ミドルマーチ』における代表者として、夫・カソーボンが過度の緊張と疲労からくる心臓発作で論文執筆中に倒れたときも夫を助け、良人の為に何が出来るかを治療に訪れたリドゲイトにドロシアが訊ねる場面など。家父長制度のもとに抑圧され、家庭の場に閉じ込められたヴィクトリア朝の女性の立場をよく現している。エリオットによる悲劇からの開放・救済方に着目した。

『フロス河の水車場』に於ける代表者として、マギーが挙げられる。この章全体を統括するアイデア(idea)である“Incipient feminism”は「初期フェミニズム」とも訳される。このフェミニズムというのは1792年、メアリ・ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』を著したことをもってフェミニズム運動の先駆けとする説があるように、フェミニズムの考えは19世紀の文化に多大な影響を与えたとされる。そこでマギーとトム、2人の関係を仮に「愛し愛される関係」とする。ということは即ち、それは、2人のそれを「その間にある愛情を神によって祝福された関係である」ということになってしまうのではないか。この様に言うと、まるで結婚式で神の前で宣誓している新婚夫婦のようではないか、というような声も聞かれそうな感じがしてくる。しかし、エリオットは夫婦以外にも、神が分かつことが出来ない二人の関係というものの中に、フェミニズムの「大義」に殉じて、女性の権利確立のために障害となっている家父長制度を象徴する身近な人物を、時と場合によっては道連れにしてでも葬り去ることがあり得るのだということを、主張したかったのではないか。何故ならば、『フロス河の水車場』の最後の場面が、妹が兄を救おうと命を懸けた美談とも評される場面である反面、女性が「水の中の魔女」であることを仄めかしているからである。当時のキリスト教の象徴的考え方を礎としていた家父長制度を当時興り

つつあった初期フェミニズムの思想に絡めて、覆したいとの願望をも感じさせ、トムとマギー、兄妹2人とも溺れてしまうという悲劇としての側面も持ち合わせた作品であるとも解釈出来る。女性だけを、溺れるか否かで、「魔女」なのかどうかを判断しようとする、その考え方の中に、男女同権を目指していた当時の初期フェミニズムの考え方からすれば、女性だけを差別的に扱う側面が見られると反発もあったことであろう。

しかし、いかに当時フェミニズムの考え方が出始めていたとは言え、初期段階であることを勘案すれば、フェミニズム思想に基づいた露骨な女性解放を唱えたり、ましてやキリスト教的にも、観念形態的にも、さすがに進歩的な考え方を持つエリオットといえども、当時の社会システムの根幹となっている因習について根底から覆す意図で以て登場人物を描写したりすることを、躊躇したのではないだろうか。故に、エリオットはその考え方を、マギーについて、その当時主流であり、トムに描き込まれた美德とされる、河の洪水で流され死に懸けている兄を救わんと妹がその命を顧みないで助けようとする「兄妹愛」的な表現や描写によりカムフラージュしてマギーという人物を描こうとしているのではないかと、推察される。それ故、エリオットは『フロス河の水車場』という小説を、妹が兄を救おうとする「美談」として読者に読まそうとすることにより、(反男権的という) 過激なフェミニズムの考え方を、オブラートに包んで書かれているとも言えよう。

1.6. プチ・ブルジョア・モラリズムについて、そして終わりに

プチ・ブルジョア・モラリズム(Petty[petit]-bourgeois moralism)とは、資本家階級でもないのに資本家階級的意識をもっている人々の道德観、因習の事を指す。この観念形態に於ける、『ミドルマーチ』内に登場する代表者として、牧師の家柄や受けさせた教育が異なることを理由に、息子フレッドと土地差配人であるケイレブ・ガースの娘メアリーとの結婚に反対するヴィンシー夫人が挙げられる。一方、『フロス河の水車場』に於ける代表者としては、ディーン氏、ウェイケム(氏)が、挙げられる。先行研究についても、19世紀後期、ヴィクトリア朝時代の精神風土やモラル(因習)に関する全般的な特徴について論じたり、又は、エリオット本人の意識について論じたりしたものもある。

しかし、論文内では、『ミドルマーチ』、『フロス河の水車場』という具体的作品、且つ両

作品内の登場人物に、分析の焦点を絞り込んだ。本論文は、分析を行う際、所謂作者エリオット本人の意識と登場人物の意識とを切り離した上で、「プチ・ブルジョア・モラリズム」を含む、当時の幾つかのイデオロギーについて、其々に相応しいと思われる階級に属する登場人物達を分析の対象として抽出（選定）した上で、彼ら（彼女ら）に見られる特筆すべき意識（又は感覚）の詳細について論じることによって、作者エリオットの意識の内に芽生える素となった、ある意味で「偏り」とも評される、彼女の「すべての善の種子」が蒔かれた背景（因りどころ）を探る趣きが存したことを、論述を終えるに当たり、申し添えておきたい。

註

- (1) Eagleton, Terry. “George Eliot: Ideology and Literary Form”, Peck, John ed. *Contemporary Critical Essays, New Casebooks Middlemarch*, London: MacMillan Education, 1992, pp. 158-173.
- (2) 「初期フェミニズム」という訳語は、論文筆者による、論文執筆上便宜的にテリー・イーグルトンが彼の論評（1992）で使用した ‘Incipient feminism’ を和訳したものである。故にこの観念形態だけは、常に本論文内で並列表記されるべきものと心得、使用の都度、敢えて表記することとした。
- (3) ‘Self-love’, *The Oxford English Dictionary*, Oxford, 1972, p. 451.
- (4) Cooper, Lettice. 土井治訳『ジョージ・エリオット（英米文学ハンドブック——「作家と作品」No.20）』（研究社出版、1956年）, p. 18.
- (5) Hardy, Barbara. “*Middlemarch: Public and Private Worlds*”, *Particularities: Reading in George Eliot*, London: Peter Owen, 1982, p. 129.
- (6) Cooper, p. 64.
- (7) 「ヨハネによる福音書」第20章第29節参照。

Bibliography

Primary Sources

- Eliot, George. *Middlemarch*, Edited with an Introduction and Notes by Ashton, Rosemary, London: Penguin Books, 1994.
- Eliot, George. *Mill on the Floss*, Edited with an Introduction and Notes by A • S • Byatt, London : Penguin Books, 2003.
- May, Herbert G., M. Metzger., Brace, H., ed. *The New Oxford Annotated Bible with the Apocrypha*, Revised Standard Version, Oxford: Oxford University Press, 1977.

Secondary Sources

- Anderson, Quentin. "George Eliot in *Middlemarch*" (1958), *George Eliot Middlemarch*, Swinden, Patrick., ed. London: The Macmillan Press, 1972.
- Blake, Kathleen. "*Middlemarch* and the Woman Question", *Nineteenth-Century Fiction* 31, no. 3 (December 1976), the Regents of the 4., Berkley: University of California Press, 1977.
- Bloom, Harold, ed. *Modern Critical Interpretations; The Mill on the Floss*, New York: Chelsea House Publisher, 1988.
- Chase, Karen. *Middlemarch in the 21st Century*, Oxford: Oxford University Press, 2006.
- Cooper, Lettice. *GEORGE ELIOT*, Tokyo: Kenkyusha, 1956.
- Cross, J. W., ed. *George Eliot's Life as Related in her Letters and Journals*, 3vols. New York: Harper and Brothers, 1923.
- Eagleton, Terry. "George Eliot: Ideology and Literary Form". *Contemporary Critical Essays: New Casebooks Middlemarch*, edited by John Peck. London: MacMillan Education, 1992.
- 'Evangelicalism', *Encyclopædia Britannica Volume3*, London, 1788.

- Feuerbach, Ludwig. *The Essence of Christianity*, Eliot, George. Trans. New York: Harper Torch books, 1975.
- Fleishman, Avrom. *George Eliot's Intellectual Life*, Cambridge; Cambridge University Press, 2011.
- Gordon, Jan. B. "Origins, *Middlemarch*, Endings: George Eliot's Crisis of the Antecedent", *Centenary Essays and an Unpublished Fragment*, Smith, Anne. Ed., London: Vision Press, 1980.
- Haight, Gordon. S., ed. *The George Eliot Letters*, 4vols, London: Yale University Press, 1975.
- Hardy, Barbara. "*Middlemarch*: Public and Private Worlds", *Particularities: Readings in George Eliot*, London: Peter Owen, 1982.
- Hertnoll, Phyllis. *Who's who in George Eliot*, London: Elm Tree Books, 1977.
- Hertz, Neil. "Recognizing Casaubon", Glyph 6. Gasche, edited by Henry Radolphe. London: The Johns Hopkins University Press, 1979.
- Hulme, T. E. *Speculations — essays on humanism and the philosophy of art*, London: Routledge and Kegan Paul, 1958.
- Miller, J. Hills. "Optic and Semiotic in *Middlemarch*", *The Works of Victorian Fiction* (Harvard English Studies 6), edited by Jerome Bucky, H. Reprinted by permission of Harvard University, Department of English and American Literature and Language, 1975.
- Paris, B. J. "George Eliot's Religion of Humanity", *A Journal of English Literary History*, vol.29, London: The John Hopkins Press, 1962.
- Welsh, Alexander. "Knowledge in *Middlemarch*", *George Eliot and Blackmail*, edited by Alexander Welsh, Reprinted by permission of Harvard University Press., 1985.
- 秋田茂 「パクス・ブリタニカの盛衰」川北稔編『イギリス史』 山川出版社、1998年。
- レティス・クーパー 『GEORGE・ELIOT 英文学ハンドブック—「作家と作品」No.15』 土井治訳 研究社出版、1956年。
- ルネ・デカルト 『デカルト著作集』全4巻、 大出晃・有働勤吉訳 白水社、1973年。
- ジョージ・エリオット 『ジョージ・エリオット著作集』2 (『フロス河の水車場』、『サイラス・マーナー』) 工藤好美・淀川郁子訳 文泉堂出版、 1997年。
- ジョージ・エリオット 『ミドルマーチ』I・II巻、 工藤好美・淀川郁子訳 講談社、1975年。

- ルドウィッグ・フォイエルバハ 『キリスト教の本質』 桑田悟郎譯 改造社、1932年。
ルドウィッグ・フォイエルバハ 『キリスト教の本質』上・下巻、船山信一訳 岩波書店、
1937年。
- 福永信哲 『絆と断絶——ジョージ・エリオットとイングランドの伝統』松籟社、1995年。
「福音主義」『ブリタニカ国際大百科事典』1974年。
- フィリップ・ハートノル 『ジョージ・エリオット登場人物事典』 子安雅博訳 京都修
学社、 1998年。
- 久守和子 『イギリス小説のヒロインたち<関係>のダイナミックス』 ミネルヴァ書房
1998年。
- パメラ・ホーン 『ヴィクトリアン・サーヴァント——階下の世界——』 子安雅博訳 英
宝社、 2005年。
- 岩間俊彦 『イギリスミドルクラスの世界——ハリファクス、1780～1850——』 ミネル
ヴァ書房、 2008年。
- 木下善貞 『英国小説の「語り」の構造』 開文社、 1999年。
- 小林章夫、齊藤貴子 『諷刺画で読む十八世紀イギリス』 朝日新聞出版、 2011年。
- 工藤好美 「小伝」、 G・エリオット 『ミドルマーチ』第I巻、工藤好美、淀川郁子訳
講談社、 1975年。
- 見市雅俊 『ロンドン＝炎が生んだ世界都市』 講談社、1999年。
- 西原廉太 『聖公会が大切にしてきたもの』 聖公会出版、2010年。
- 荻野昌利 『歴史を〈読む〉 —— ヴィクトリア朝の思想と文化 ——』 英宝社、2005年。
- 大嶋浩 「*The Mill on the Floss* における Tom Tulliver と自己改革」 兵庫県立大学第2部言語
系教育講座、 1998年。
- 宇野毅 『現代イギリスと社会と文化 ゆとりと思いやりの国』、 彩流社、 2011年。